

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金助成事業

ナホトカ号重油流出事故から 10 年
三国湊型環境教育モデルの構築・普及活動
調査報告書

平成 19 年 10 月

特定非営利活動法人 三国湊魅力づくりPJ

はじめに

福井県坂井市三国町にある三国湊は江戸時代の北前船によって栄えた日本海でも指折りの要湊です。越前の全ての水を集めて日本海に注ぐ九頭竜川の河口を抱く湊であればこそ、古くから歴史に名を残し、荘園開発の拠点として重視され、中世には水運によって栄え、近世には西廻航路の発達とともに日本海有数の湊として繁栄を続けました。北方海流と南方海流が豊かな漁場をつくりだし、越前ガニを始めウニやアワビなど海幸がもたらされ、白山に発する河川が注ぎ込む福井平野は「コシヒカリ」を生み出しました。まさに水とともに生きてきた湊といえるでしょう。

今から10年前、この水の湊はかつてない事件に襲われました。ロシアタンカー「ナホトカ号」による重油流出事故です。この災害によって、三国の青々とした美しい海は黒く重い油によって染められました。それは、現代人の生活を成り立たせている石油が、自然の恵みを生活の糧とする漁港に流れ着いた事件でした。そのコントラストたるや鮮やかなことこの上なく、ナホトカ船首部分が打ち上げられた沖に漂う黒い油は、まるで写真のネガのように私たち自身の姿を映し出していました。しかも恵みをもたらす潮と風の流れが、この黒い油を運んできたのです。自然は私たちに何かを告げようとしているのかもしれませんが。

この災害から10年が経ち、ナホトカの記憶はいつしか砂浜に書いた絵のように波にさらわれてしまうのでしょうか、それとも寄せては返す波のように何度も響き渡るのでしょうか。

重油流出事故を契機として、地域住民の環境に対する意識が向上し、地域団体による植林等の環境保全活動や豊かな自然を利用した環境教育が盛んにおこなわれていますが、それは各団体による単独な活動にとどまっています。またこの事故が提起した様々な問題は、環境教育活動やESD(持続可能な開発のための教育)を行っていくうえで参考とすべき貴重な事項が多いものの、その総括や研究等が総合的に行われていません。

そこで、重油流出事故から10年が経過した今、地域団体で行われている環境保全活動、環境教育活動と重油流出事故における災害と自然環境の研究や、ボランティア活動についての考察等を総合的に取りまとめ、豊かな三国湊の自然環境の歴史的・文化的な視点からの研究成果も織り込みながら、独自性を持った三国湊型環境教育モデルを構築することが必要であると考え、本調査報告書をもって足がかりとし、地域活性化の活動と連携させながら、体験型環境教育プログラムをESDの活動として実践的に行うものとします。

■三国湊



地図提供サイト <http://freemap.jp> より制作 (2007年10月17日)

目次

I.	ナホトカ号重油流出事故とボランティア	2.
第1章	事故発生から「三国方式」の誕生まで	2.
	1. 事故発生からの推移概観	2.
	2. 様々な対応から	16.
	3. 総括	40.
第2章	10年の声を尋ねて	53.
	1. 米ヶ脇漁業協同組合員米谷淳氏に聞く	53.
	2. エコネイチャー・彩みくに会長阪本周一氏に聞く	57.
	3. おけら牧場山崎一之氏に聞く	66.
	4. 坂井市議会議員田中千賀子氏に聞く	74.
	5. 海女柚木博子氏と池田チマ子氏に聞く	78.
	6. 三国芦原金津青年会議所長谷川啓治氏に聞く	88.
	7. 大湊神社宮司松村忠祀氏に聞く	99.
第3章	総括	107.
II.	三国湊の自然と文化	114.
第1章	海の生活とその文化	114.
第2章	山・川の生活とその文化	125.
第3章	海里山をつなぐもの—移動する人とモノ	134.
III.	三国湊型環境教育モデルの提案	136.
第1章	人海戦術の教えるもの	136.
第2章	循環する自然と共生の知恵	138.
第3章	森・里・海の関係構築に向けて	140.

I. ナホトカ号重油流出事故とボランティア

第1部は次の3章からなる。第1章はロシアタンカー「ナホトカ号」の座礁による重油流出事故状況に焦点をあて、各文献並びに調査報告書（後述）を参照しながら、時系列に沿って当時の状況を理解する。第2章は当時重油回収に携わり現在三国町に暮らす8名の方々に聞き取り調査を行い、文献調査から把握しえないものを理解する。第3章は、第1章と第2章を踏まえ、ナホトカ号重油流出事故を様々な視点から総括するものである。

第1章 事故の発生から「三国方式」の誕生まで

1. 事故発生からの推移概観

第1章はナホトカ号重油流出事故の概要を理解するため、ナホトカ号の沈没から三国への重油と船首部分の漂着、そして重油回収作業の開始から後に「三国方式」と呼ばれることになった官民一体の災害対策ボランティアのあり方の誕生までを調査する。調査は以下の文献を参照して行われた。

ロシアタンカー油流出事故災害記録誌編集委員会編『ロシアタンカー油流出事故 災害の記録と教訓』福井県民生活部消防防災課（1998）。

重油災害ボランティアセンター編『日本海からの熱い風—ナホトカ号重油災害ボランティアからのメッセージ』マルジュ社（1998）。

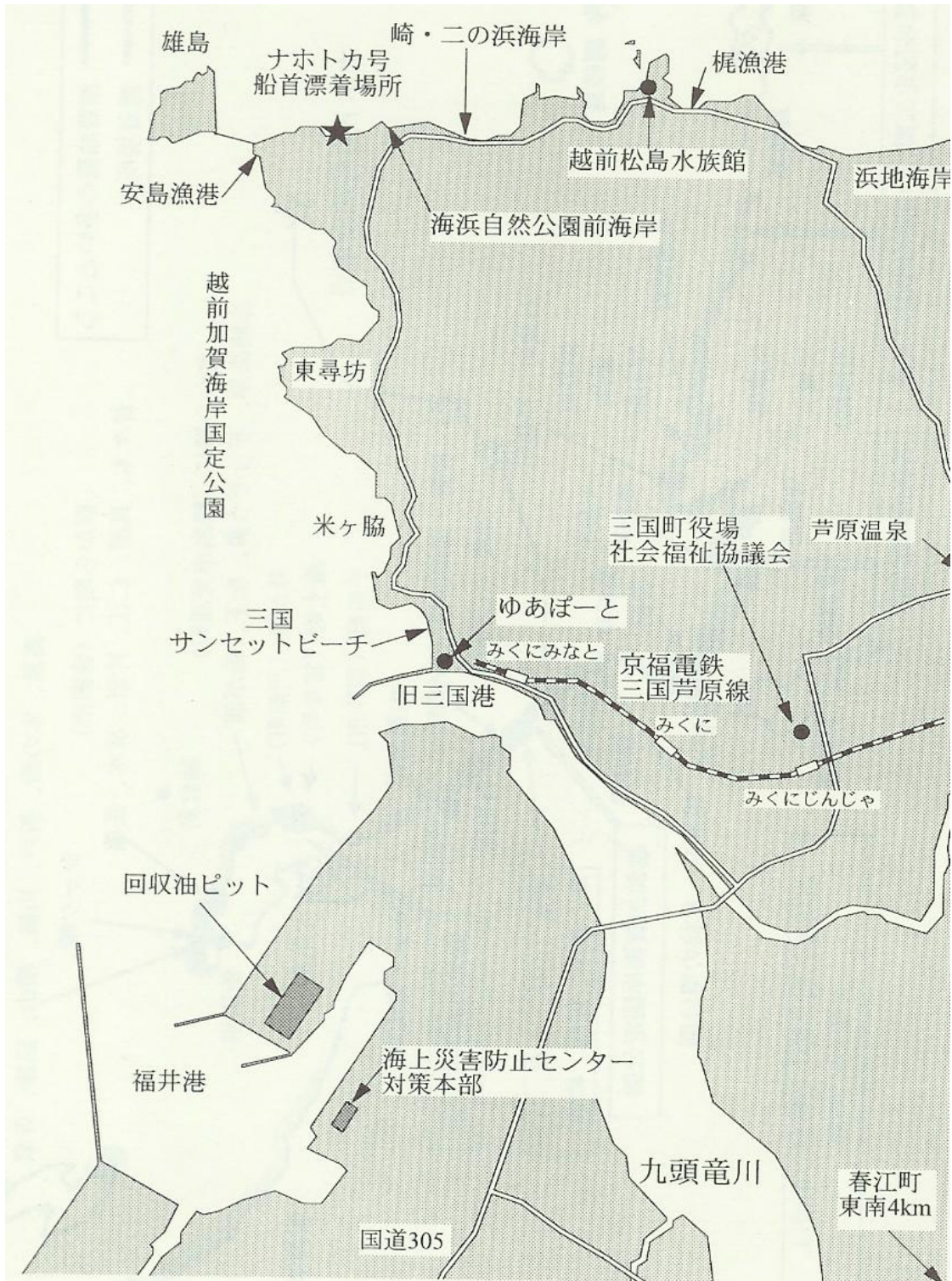
藤井康広編『日本海からのおくりもの』トライフコーポレーション（1997）。

『重油災害とボランティア』三国ボランティア本部事務局 社会福祉法人三国町社会協議会（1997）。

福井新聞社編『ナホトカ号事故から船首回収まで 重油汚染』福井新聞社（1997）。

海洋工学研究所出版部編『重油汚染・明日のために—「ナホトカ」は日本を変えられるか—』株式会社海洋工学研究所出版部（1998）。

三国町海岸部



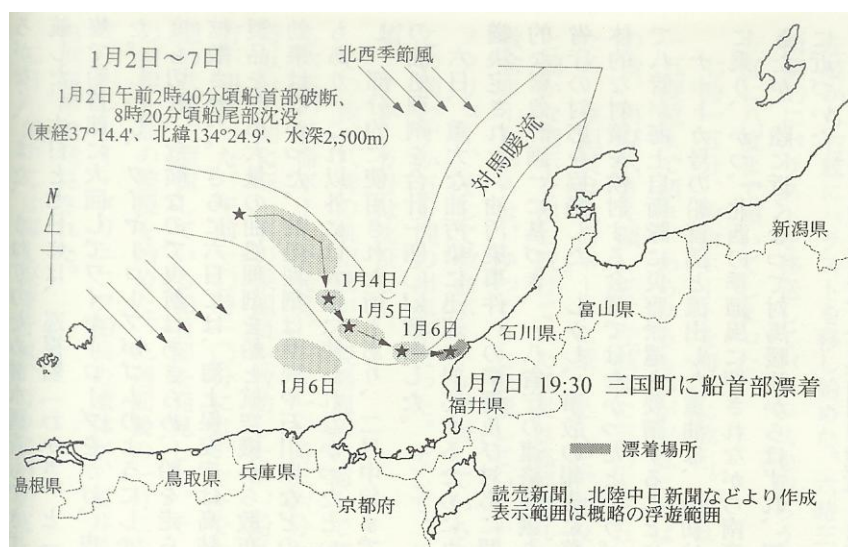
出典：海洋工学研究所編『重油汚染』株式会社海洋工学研究所（1998）2頁.

ロシアタンカー「ナホトカ号」の沈没

事件が起きたのは1997年1月のことであった。元日の福井県内には、日本海で発達した低気圧が東北東に進み強い南風が吹き、福井で17.5℃、敦賀では15.3℃まで上昇、冬の日本海には珍しい穏やかな正月を迎えていた。その後さらに発達した日本海低気圧は、大陸からの寒気と強い冬型の気圧配置を示し、日本海は大荒れになると予想されていた。

1997年1月2日午前2時51分。一隻のタンカーが島根県沖ノ島沖で遭難したとの急報が第8管区海上保安本部に入った。タンカーの名はナホトカ (Nakhodka)、ロシア連邦の極東に位置する有数の商港都市に由来するその船名は、ロシア語で「発見」を意味する。このタンカーは総トン数13,157t、載荷重量20,000t、全長177.25m、型幅22.4m。1970年にポーランドにて製造されている。同日午前11時、海保ヘリが沖ノ島の北北東約100キロの海上で発見したのは、同船から流出したとみられる帯状の重油であった。同船は腐食衰耗激しい船体に19,000リットルの発電用C重油を積載、中国舟山を出航し日本海を北上、ロシアのペトロパプロフスク・カムチャッキーに向かう途中、最大級の波浪による外力が船体強度を上回り折損したのであった。そして同午前8時、二つに折れた船体に浸水した海水により船の後方部が沈没、切断されたタンクから3,700リットルの重油を日本海へと流出させ、油を抱えた船首部は漂流を始めたのであった。このとき、海上を漂う重油が引き起こす事態を三国の自然と人々が受け止めることになろうとは、誰が予想しえただろうか。

3日午後、重油は三国町の沖北西約137キロの海上に達していた。強い季節風にあおられた船首部分と重油は対馬海流から海岸へと流され越前海岸に接近した。



流出油の漂流漂着（1月2日 - 7日） 出典：海洋工学研究所編『重油汚染』28頁.

三国への重油及び船首の漂着

6日夜、漂流する重油は三国沖 17 キロに接近。三国町のパトロール隊が双眼鏡でナホトカ号の船首を確認する。7日未明に沿岸へ漂着する可能性は高いと三国町は同海上保安署を始め町内の関係団体は対応に追われた。しかし大しけで海上での処理作業は難航する。



海を見詰める地元民（写真提供：福井新聞社）

1月7日。この日、重油と船首部分が三国に漂着した。同日の動きを福井新聞社が追跡している。次に引用したい（同社編『ナホトカ号事故から船首回収まで 重油汚染』（1997）77頁を参照）。

2:00 警察が警戒態勢に。

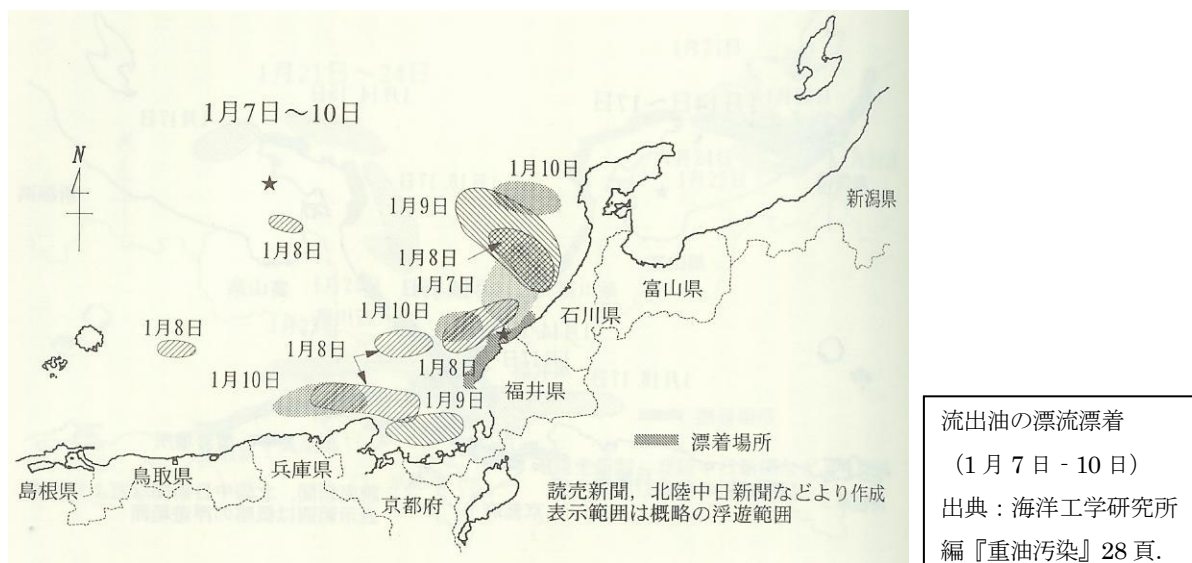
6:30 地元漁協が波松沖で船首や海上保安部の巡視船を確認。

7:00 三国海上保安署に現地災害対策本部設置。各漁協で監視パトロールを始める。

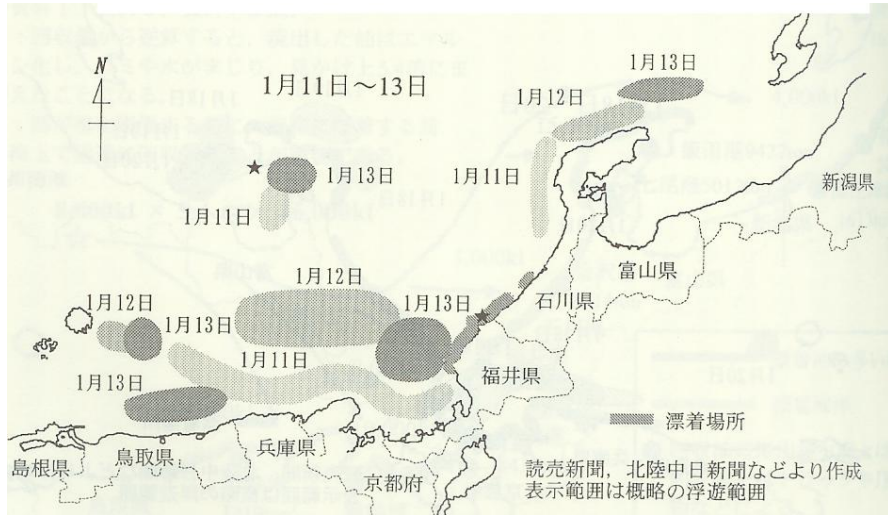
8:00 波松区長が船首や船が近づいているのを確認。警戒のパトカーも到着。三国町崎の民宿に予

- 約客から「食べもの大丈夫か」と電話。
- 9：00 「潮の流れや風から波松に来る」と地元民。しかし船は風に押し戻される形で、南下。上空に海保や自衛隊の飛行機。越前松島水族館が営業開始。ひしゃくやむしろを用意。三国町が対策本部設置。
- 9：20 水族館や海浜公園に報道陣が集まる。
- 9：30 沖の船が雄島方面に戻っていくように見える。パトロール中の雄島漁協安島支所議員が「漁礁内に入ったな」とつぶやく。県庁で庁議開始。西川副知事を本部長に事故対策本部設置。
- 9：40 浜地海岸に洗剤のような虹色の泡。
- 9：50 梶漁港に大量の波の華。油で粘りと虹色の光。「こんなの見たことない」と地元の人。「岩ノリは一番の収入源なのに」と女性組合員。
- 10：00 「長期戦になるだろう」と石井県民生活部長。県に重油漂着の情報。
- 10：30 「ごぞ、むしろ、ひしゃくで防ぐ。でも大量に来たらお手上げ」と水族館館長。第8官本部から三国保安署に13人の応援部隊到着。
- 10：55 県庁で「ロシアタンカー油流出事故対策本部」を設置し対策会議始まる。
- 11：00 保安部が「船首は安島岬から4.4キロ」と発表。水族館から肉眼でも確認。
- 11：35 県対策本部が会見。「台風波の風の中で海保などが命がけで当たっている」。
- 11：50 海岸に重油漂着と保安部で発表。「海の色が変わってきている」と安島区の自衛消防隊員。
- 12：00 船首が水族館の沖、1キロ付近にまで近づく。保安部の船が周囲にオイルフェンス設置作業を始める。安島で漁民らがバケツやひしゃくを用意。
- 12：30 船首が雄島方面にさらに漂流。水族館では取水口の汚染に備え吸着マットなど搬入。安島沖で波間が黄色く変色。
- 12：35 保安部の巡視船がロープとワイヤで船首を食い止めようとしたが失敗。
- 12：45 崎漁港にオイルフェンス設置の準備。三国消防署が直径1センチの油の塊を見つける。
- 13：00 「風が油くさい」と水族館職員。
- 13：10 船首が目前に迫り雄島漁協^{さき}崎支所の組合員「ウニ、サザエは稚貝や産卵場所もやられるから5年は駄目になる」。消防署員海岸につくも手がつけられず。
- 13：30 「午後1時に海浜公園沖で船首着底」と保安部が発表。
- 13：45 座礁取り消しと保安部発表。

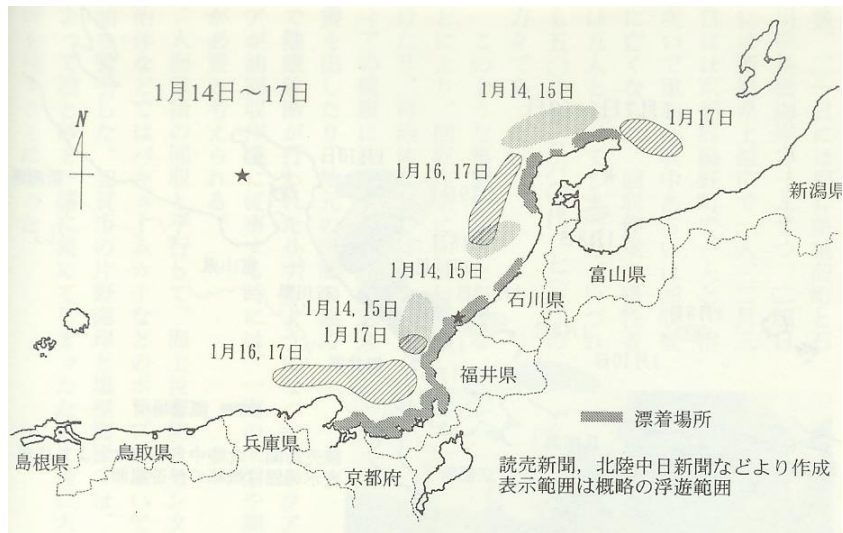
- 14：00 取材ヘリが続々現場上空へ。
- 14：20 「ノリの養殖場が全滅だ…」と海女の悲痛な声。
- 14：30 役場職員が水質検査。海保の巡視船がオイルフェンスの準備。
- 14：40 「実質的被害と風評被害が心配」と雄島漁協安島支所長。
- 15：00 県が現地対策事務所を福井港事務所に設置。
- 15：15 「いまやってもむだ」と消防署員。
- 15：20 県庁で栗田知事を本部長に災害対策本部を設置。
- 15：30 雄島付近にオイルフェンス設置作業を始める。日本獣医師会の野生動物の専門員が野鳥の救護について県と協議。
- 15：50 雄島地区で緊急放送。「現在手の施しようがありません。火の元に注意してください」。
- 15：55 知事がヘリで現地視察。
- 16：05 オイルフェンスの取り付け終了。
- 16：30 保安部「着底は午後2時半」と新たに発表。
- 16：40 空からの視察を終えた栗田知事が会見。「ドロドロの油が流れている」。
- 16：50 三国町役場で対策会議。西川副知事が現場視察。無言で帰る。
- 17：00 海に降りた消防署員が「軍手が真っ黒。油の層が20センチほどあった」。
- 17：15 現場に投光器が点灯。船首部分が浮かび上がる。北潟湖の河口にオイルフェンス設置。



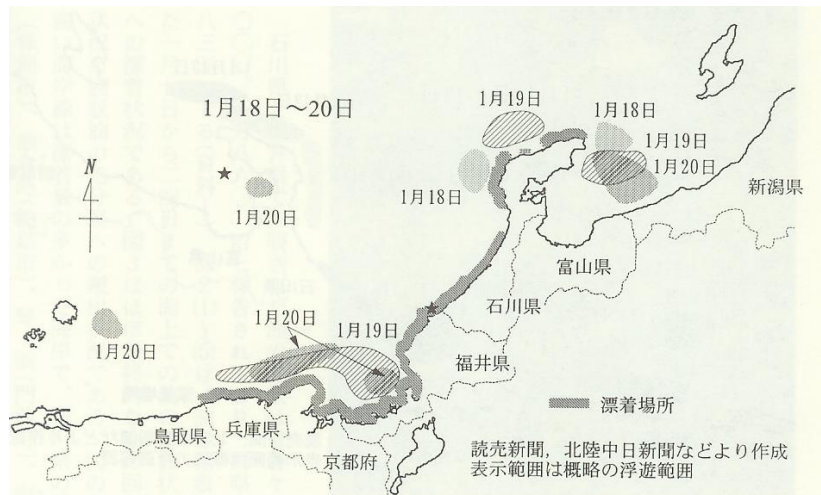
翌8日には石川県、9日には京都、兵庫、鳥取の各府県に重油は広がり、9府県の海岸に漂着し、砂浜や磯を汚染、海の生態系に多大な影響を与えた。



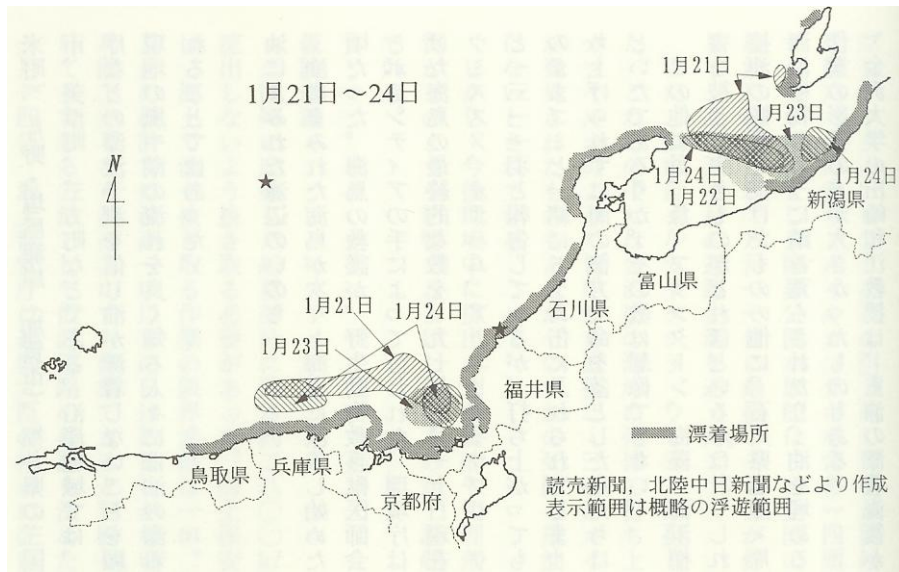
流出油の漂流漂着（1月11日 - 13日）出典：海洋工学研究所編『重油汚染』31頁.



上：流出油の漂流漂着（1月14日 - 17日）出典：同著32頁。下：（1月18日 - 20日）出典：同著同頁.

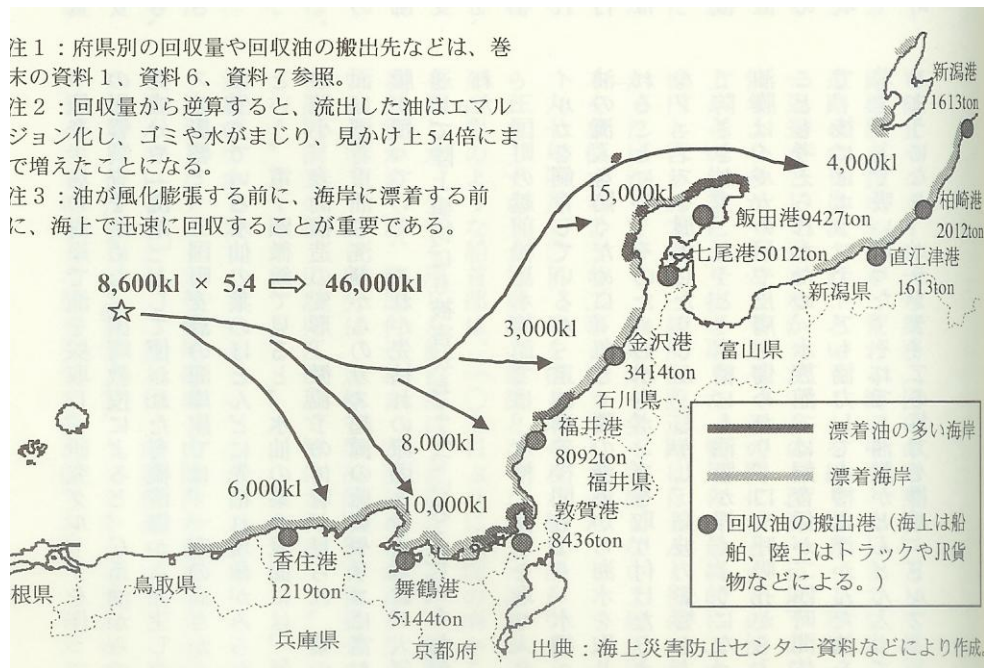


流出油の漂流漂着 (1月21日 - 24日)



出典：海洋工学研究所編『重油汚染』33頁。

流出油の漂流と回収・搬出状況



出典：海洋工学研究所編『重油汚染』33頁。



流出重油によって黒く覆われた三国沖（写真提供：福井新聞社）

重油回収作業概況

重油の日本海沿岸への影響が明白なものとなるに従って、海上保安庁、自治体、自衛隊、漁連・漁協をはじめとする地元住民や重油災害ボランティアセンターに集まってきた全国からのボランティアをはじめとした民間人、企業等による回収作業が始まった。

漂流中の重油の漂着防止のためのオイルフェンスが海上保安庁等によって設置されたが、悪天候と資材不足で大きな効果をあげることはできなかった。また漂流重油の回収は海上保安庁・自衛隊に加え、漁民が連携してこれに当たった。

海岸に打ち寄せられた重油の回収は漁民をはじめとした住民や重油災害ボランティアセンターが受け入れたボランティア、自治体から要請された企業の社員、自治体職員たちがひしゃくや手で拾い集めバケツに入れて回収するという方法が取られた。

当初回収は高性能ポンプによる汲み取りが試されたが漂着した重油は海水と混ざり合い体積が増大、また高粘度という性質上、ほとんど効き目がない状況であった。一部地域では高粘度が

ンプが効果的に機能したところもみられたが、調達の遅れもあり全体の回収量から見ればわずかであった。

漂着重油の大部分は、したがって、人の手かひしゃくによって汲み取られ、バケツに入れ多くの人が列をなして運ぶというバケツリレーを経て道路際のドラム缶にあげ、それをクレーン付きのトラックに載せ集積場である三国町のテクノポートに運ぶという方法がとられたのである。砂浜では悪天候により重油の塊の多くが砂の下に深く潜りこみ、砂混じりとなったが、これも手で砂を掘り返し、篩にかけて細かい重油の塊を見つけ出す方法がとられた。手で掘り返せないほど深く沈んだ重油は重機で掘削し手で篩にかける方法がとられた。また天候の悪化によって岩にこびりついたり、砂利の下に潜りこんだりした重油も手によって、丁寧にへらで落とすか、あるいは布でふき取るという方法がとられた。このように重油回収が進むにつれ作業は細分化し、それに応じた資機材が調達された。そして気の遠くなるような細かな作業が続けられたのである。

ナホトカ号船首部分からの重油抜き取りは1月16日から始まったが、悪天候によって阻まれ一向に進まなかった。一方で、冬場の悪天候に左右されない方法として、仮設道路を設置して陸上からの抜き取り方法が試みられたが、これも冬場のしけにより何度も埋め立て道路が波にさらわれるという無残な結果になった。

最終的に船首部分からの重油の抜き取りが終わったのは、荒れが収まった2月25日。座礁から数えること49日のことであった。仮設道路はほとんど役に立たなかったという。なお、船首部分は4月20日に撤去された。

各地災害対策本部が解散した後、自治体の復興事業の一つとして、重機による砂利の入れ替え洗浄、テトラポットの入れ替え洗浄等が行われた。



懸命の連携プレーが続く住民総出の三国町安島（写真提供：福井新聞社）

重油漂着による被害概況

重油が漂着したのは、地元漁業が例年最も活気に満ちる時期であった。定置網では冬網の寒ブリやマイワシの最盛期を迎え、底曳網業も越前ガニや甘エビ、赤ガレイが旬であり、海の状態がよければヒラメの刺網やメダイの一本釣りも盛んに行われ、磯では荒天の切れ間にイワノリが採集され、ナマコ漁や水ダコ漁に忙しい時期である。ゆえに魚介類など海の生物および漁場等の被害は甚大であった。

しかし漁業関係者は漁を休業し海上を浮遊する重油の船上回収、重油漂着状況の監視および陸上漂着後の回収作業に従事せざるを得なかった。漁業を休止したことによる被害に加え、地元漁業関係者を襲ったのは風評被害であった（以下被害状況については『ロシアタンカー油流出事故災害の記録と教訓』（1998）を参照する）。

漁場の被害は以下のようなものである。イワノリ漁場、アワビ、サザエ、ウニなど磯根資源の餌場、

ガラ藻場（魚介類の幼稚魚の保育場である藻場）に甚大なる被害を与えた。とりわけ三国町にあるノリ付き場には大量の油が打ち寄せ、最盛期を迎えていたイワノリの採集が不可能になるとともに、イワノリ場に造成された採集のための窪み、コンクリートの割れ目に重油が入り込み、悲惨な状況となった。このため、冬場の貴重な収入源が絶たれた漁業者、とりわけ海女さんにとっては大きな痛手となった。

重油はカサガイ類やクボガイ類を斃死させ、一部海域ではこの時期産卵及び幼生の浮遊期・着底期であるバフンウニの棘の脱落や斃死が確認された。

また、海洋生物の幼生の餌場となる海藻の流出、そこに付着している珪藻に被害を及ぼし、ピリヒバなど石灰藻等の枯死に追いやった。

また野生動物に与えた被害も甚大であった。野生動物の救難を担当したのは獣医ボランティアであったが、推定で 50,000 羽の水鳥を含む野鳥が死んだという。以上のような海の生物に対する被害は多大であった。



海鳥の洗浄にあたる獣医たち（写真提供：福井新聞社）

水産施設及び漁具への被害は次のようであった。県内の冬場の定置網漁業は寒ブリやマイワシ等を主な対象種として操業されているが、このうちの大型定置網 15 ヶ統は油の漂着に備え陸揚

げされたが、5ヶ統に油の付着が確認された。3ヶ統には二重落とし網の天井網等の取替えが必要となり、1ヶ統は部分的に網の補修及びロープ類の取替えが必要となった。

また中型定置網でも二重落とし網に油が付着し、使用不可能になり、嶺南の小型定置網でも59ヶ統のうちの38ヶ統の浮子やロープ類に油が付着していることが確認された。

一方、魚介養殖では生贄網を海中に沈めることで養殖魚への油の被害を防いだ。嶺北では養殖ワカメに油が付着したため収穫を中止した漁業者がいたことは記述したとおりである。

会場での重油の監視及び洋上回収は1月9日以来累計で2,555隻の漁船等によって実施され、これに携わった漁業関係者（出勤人数から自衛隊、ボランティアの人数を引いたもの）の総数は累計66,068人（1997年3月11日付け）にのぼった。

こうした被害にともない漁場の回復がなされた。とりわけ油の漂着が多かった三国町を中心として、イワノリ漁場やアワビ、サザエ、ウニ等の磯根資源に対する被害の生じた漁場について水質・低質、底生生物、藻場等の調査が実施され、浅海の漁場回復のため、漁場造成や漁場改善の対策が実施された。



漁船による重油回収（写真提供：福井新聞社）

上記の被害に対して、あるいはそれに勝る被害は風評被害であった。マスコミによる日本海全
てが重油に染まったかのような報道は、日本海産の魚介類を敬遠させ、日本海側とりわけ福井・
石川県の観光地、温泉、民宿などのキャンセルを招いた。そのなかには、回収ボランティアがい
るという理由で旅行を差し控えるという観光客も多く見られた。行政、観光協会、民宿組合は懸
念に風評対策にあたったが、功を奏さない状態が続いたのである。

2. 様々な対応から

ナホトカ号の重油流出事故に対しては、保安庁、県、町、社会福祉協議会、青年会議所、民間、地域住民、ボランティア等の様々な組織、団体、個人によって様々な初期対応がとられた。そして三国町に続々とボランティアが集結するなかで、多くのボランティアに対応することができるまとめ役が必要となってきた。そこで「重油災害ボランティアセンター」が設置され、その後「三国ボランティア本部」ができあがったのだった。この流れは様々な初期対応をしていた組織、団体が合流したもので、行政と民間組織が各々必要とするものを補完し合う形でパートナーシップを組んだ官民一体の組織という点から、今日「三国方式」と呼ばれている。

ここで行政から民間にいたるまでの様々な対応を挙げ、「三国方式」誕生まで流れを追ってみたい。

1. 行政による対応

行政の対応は福井県がまとめた『ロシアタンカー油流出事故 災害の記録と教訓』（1998）に記録されている。以下必要箇所を抜き出してみる。

1月2日2時51分ナホトカ号からのSOSを第8管区海上保安本部が受信。13時10分、乗組員32人のうち船長を除く31人を救助。第8管区海上保安本部が重油漂着の恐れがあるとして福井・石川両県および第9管区海上保安本部（新潟県）に警戒の第一報を流したのは、3日夕刻のことであった。翌4日に第8管区が「ナホトカ号海難・流出油災害対策本部」を設置。ヘリ偵察、巡視船10隻、航空機4機が監視調査に向かい、運輸省第5港湾建設局（名古屋）に重油回収船「清龍丸」の派遣を依頼、同日午後11時に名古屋港を出発する。「清流」が現地到着したのは9日の夜であった。三国町の臨海工業地帯テクノポートに回収重油の一時貯蔵ピットが完成する。10日、回収作業のため自衛隊が派遣される。運輸大臣が三国入り。三国町現地対策本部内に救護所が開設される。

・福井県庁

ナホトカ号の重油流出事故のような大規模な災害においては、通常の組織体制では対応できないことは明らかであり、災害の規模に合わせて、組織の規模、権限、業務を変化させて効率的に災害対策を実施しなければならない。そのため災害対策基本法では、災害対策本部という臨時に

設置される機関を規定し、地方公共団体が部内各組織を挙げて機動的に防災活動を実施できるように規定している。

この災害に際して、福井県庁は全庁体制で対策に当たった。

4日16時 「タンカー油流出事故庁内連絡会議」を設置。組織の構成としては、以下12課をメンバーとした。環境保全課、自然保護課、消防防災課、衛生指導課、観光物産課、水産課、漁港課、耕地課、管理課、河川課、湾港課、県警本部地域課。その業務は①海上保安部その他関係機関からの情報収集及び連絡調整。②庁内関係課との連絡調整である。

4日16時 - 18時 第1回庁内連絡会議開催

議題は①タンカー油流出事故庁内連絡会議の設置について、②タンカー流出事故の状況についてであり、タンカー船首部の油、海上保安本部の対応、水鳥保護、水産物への影響、防災資機材の運搬手段の確保、県有船によるパトロール、水産関係業界との連携、マスコミ発表、オイルフェンスの搬送等について協議された。

5日15時 - 16時 第2回庁内連絡会議

この会議は①現在の状況について、②各課の対応について、③今後の対応が議題であった。油防除作業における市町村との連携協力、油防除作業の詳細な記録の保存等について協議された。

6日16時 - 17時 第3回庁内連絡会議

この会議では前日と同じ内容が協議された。

福井県庁は同県で1990年に発生した「マリタイムガーディニア号海難・油流出事故」（京都府与謝郡伊根町沖にて座礁）の経験から対策を考えた。その対策とは、12課で構成される連絡会議、また各課の個別対応として会議の設置、重油に関する情報収集、および重油回収に必要な資材の準備である。

以上は三国町に重油と船首が漂着する前の対応である。先述したとおり、当時海上はおおしけだったという。したがって洋上回収はできないとしても、このときすでに三国沖に漂着する可能性は高いと推測されていた。しかし陸上で行いうる対重油対策が十分ではなかったといえる。それは実際に漂着した7日から回収用資機材の不足問題が発生したことから裏付けられる。過去に使用された事例のある、ドラム缶、ひしゃく、胴長靴、オイルフェンス等の調達の際に、県内業者および近畿・中部の応援協定府県に上記の材の確保を依頼したが、それらを注文した場合に生じる費用の問題、使用しなかった場合の材返還の可否という問題があり、一度に多くの注文をす

ることができなかつたからである。それはある決定やある判断をした際の責任の所在の問題が、重油を回収するというミッションよりも比重が大きかつたことから結果されるのではないか。情報の収集と伝達を主な目的とした連絡会議も不十分であつたといわざるをえない。連絡会議において上記の協議内容が十分に検討されていれば、重油と船首漂着の際に効果的な役割を果たしたのではないだろうか。

1月7日、重油と船首が三国町に漂着した日に、地域防災計画の「人為的な大規模災害については関係課長と協議する」に基づき、「ロシアタンカー油流出事故対策本部」が設置された。地域防災計画に基づき、とあるのは、それまで大量の油流出事故に際してどのような基準でどのような災害対策本部を設置するかという基準を設けていなかったからである。ところが被害が甚大であると認識した県はただちに「福井県災害対策本部」を設置した。

「ロシアタンカー油流出事故対策本部」は、重油対策のため同日午前10時に副知事を本部長に各部長を本部員として構成された組織である。その下部組織として関係各課長を構成員とする「タンカー油流出事故対策連絡会議」が置かれた。しかし福井港湾に現地対策本部として置かれた事務所で会議を開くも、上に述べたように災害対策本部の設置が決定され、事故対策本部としては具体的な活動に着手することはなかつた。

同日15時20分に設置された福井県災害対策本部は同日第1回災害対策本部会議を開き、この会議は、2月9日まで連日開かれることとなつた。2月10日は船首部分から重油の抜き取りが完了した日であり、福井県防災会議が開催された日である。県庁内に災害対策本部が設けられるのは、昭和59年の豪雪時以来、13年ぶりのことであつた。

その後4月には同本部を廃止した市町村もあり、必要最低限の人数にするとともに、消防防災課の隣室を災害対策本部事務局とした。この間本部の組織は状況にあわせて部門、人員の増減、設置場所の変更をしていった。

三国町の対応

1月7日午後2時、船首部分が安島沖に座礁し、雄島橋から若えびす沖にかけて帯状の重油が確認されると、三国町は半澤政二三国町長を本部長とする「ロシアタンカー重油流出事故災害対策本部」を役場内に設置する。以来1日に2回対策会議を開催し、当日の作業報告及び翌日の回収場所の決定やボランティアを含めた人員配置、これにともなう回収材の調達配備、ドラム缶の搬出などの作業計画を策定した。

町による災害対策本部設置の他の対策を県のまとめた『ロシアタンカー油流出事故 災害の記録と教訓』（1998）162-163 頁より引用する。

- ・ 救護所の開設 現地本部（安島）内と梶漁村センターに救護所を開設し、地元およびボランティア等の健康相談、健康管理を行った。
- ・ 炊き出しの実施 赤十字奉仕団および連合婦人会の協力を得て炊き出しを実施し、回収作業員の方々におにぎりなどを配った。

災害対策活動としては、次の点が挙げられている。

- ・ 情報収集 災害対策本部が現地本部を中心に各地区の現場7ヶ所と連絡を取り、油の漂着状況、物資の調達、回収状況、作業状況の情報を収集した。また、翌日の作業をスムーズに行うため、各地区の本部長を役場に収集し、連絡調整を行った。＜今後の課題＞連絡調整にあたるための通信手段として、防災行政無線を使用した。が、地域的に無線の届かない所があったので、今後災害が発生した場合は、携帯電話を使用したほうがよいと思う。
- ・ 資機材の調達 機材の調達については、県の現地本部に連絡を取り1月まで県に依頼した。その後は町で地元業者に依頼して調達した。資材については、当初県にドラム缶、ひしゃく、バケツ等の調達を依頼したが足りない物が多くあり、町で地元業者に発注して対応にあたった。その後は、全国各地からの支援物資により十分対応ができた。＜今後の課題＞今回の災害においては、支援物資等の保管場所を確保するのに苦慮した。
- ・ 油回収作業 ＜砂浜での活動内容＞サンセットビーチ、浜地海水浴場の砂浜は、振興会員、地元住民および数多くのボランティアの方々が回収作業に参加した。砂浜に漂着した油は土のう袋等を集め、砂に埋もれた油は重機等で掘り起こして回収し、砂に混じっている油は篩にかけて分離し回収した。4月以降は、重機により砂を海に押し出し、海上で吸着マットにより回収した。＜岩場での活動内容＞安島等岩場は、漁協、地元住民、自衛隊、消防団およびボランティアの方々が回収作業に参加した。岩場の危険な場所は、自衛隊

および消防団が回収作業に当たった。回収作業内容は、ひしゃく、バケツ等で回収し、バケツリレーによりドラム缶まで運んだ。また、竹べら、古タオルを使い、岩の隙間や玉石の重油のふき取り作業を行った。＜海上での活動内容＞三国港機船底曳網漁業協同組合、三国港漁業協同組合が、沿岸への漂着を未然に防ぐために漁船を使用して浮流している油をひしゃく等により回収した。

崎漁港、安島漁港にオイルフェンスを設置。ドラム缶、バケツ、ひしゃく、カップなどの資材の搬入を開始する。町の総務課、農水課の職員は夜間待機し重油の状況及び船首部分の監視にあたる。

11日、米ヶ脇、陣ヶ岡区長らの配慮により区民館等をボランティアに無料開放する。三国警察署はボランティア本部で異常があった場合は雄島派出所に連絡するよう通知する。

ここまでみてきた行政による対応は、後述する「重油災害ボランティアセンター」から「三国ボランティア本部」の流れに直接関与するものではないことがわかるが、町単位での行政の働きが効果的だと考えられる炊き出しや健康管理などはボランティア活動全体を支えるものとなったことは想像に難くない。しかし回収作業初動における不十分な対応は様々な面から指摘がなされており（例えば第2章の聞き取りを参照されたい）、また区民館の無料開放などもまず区長の発言あって初めてなされたことであり、災害時における行政側の管理能力は指摘されざるをえない。

それでは、官民一体の災害対策のあり方とされる「三国方式」はどのような面から直接的に官が関わってくるのだろうか。次節の社会福祉協議会の対応がその役割を果たしたのであった。

2. 社会福祉協議会の対応

社会福祉協議会（以下社協）は「半官半民」、「公私共同」の組織とも言われ、行政が関与して設立された民間組織である。この組織の目的とするのは地域の福祉の推進およびボランティア活

動の推進と支援である。全国、都道府県、市町村単位で組織されており、基本的には社会福祉法人格をもった民間団体であるが、社会福祉法に定められ、運営資金の多くは行政機関の予算による。

三国社協は昭和 55 年より「みくにボランティアセンター」を開設しボランティアの振興、連絡調整などを手がけ町民総ボランティアを目指してきた。

以下三国ボランティア本部事務局と三国社協の編による『重油災害とボランティア 三国ボランティア本部の記録』（1997）から社協の動向を列記し記述してみよう。

1月9日

三国社協に神戸元気村（阪神淡路大震災の復旧に活躍したボランティア団体）の中田氏から電話でボランティア保険手配の依頼が入る。

福井県社会福祉協議会（以下県社協）の中村次長が三国町対策本部を訪れ、県社協として三国社協を通じ重油災害を支援していく旨を申し出る。午後、三国社協田畑事務局長は三国町対策本部よりボランティアのコーディネートを命じられる。10日3時半、受付を開始。全国からボランティアの受付に対して電話による問い合わせが殺到、現在は登録だけにして後ほど要請するという対応をとる。田畑氏は毎日二度開かれる三国町対策本部会議に出席することになる。

1月10日

三国社協は元気村の中田氏にたいしてボランティア保険加入手続き業務の了解の旨を伝え、ボランティア保険の申請書を渡し、ボランティア保険の登録受付を開始する。三国町対策本部はボランティア受け入れを三国社協で行うよう要請した。これを受けて三国社協は緊急理事会を開催し即決する。11日より安島現地で対応することにした。三国社協において県社協、兵庫県社協、神戸市社協職員の指導のもと、ミーティングが開かれ、ボランティア受付及び地元住民福祉対策について、役割分担、県内社協職員の支援日程等の作成を行う。午後、災害対策本部は、油が硬化し9日に搬入されたバキュームカーが機能しなくなってから、人海戦術で回収しなければならないと判断し、午後5時から県社協の支援で活動計画を検討する。

1月11日

三国社協はそれまで三国町対策本部にて受付を行っていたが、現地事務所に移行するため安島にある「子供広場」へテント、机、イスを搬入しボランティア受付事務所を設置する。子供広場にはすでに青年会議所が事務所を設置しボランティアの受付を開始していた。

県は三国社協に対してボランティア保険の保険料の負担を伝達し、その全額が県負担になる。県対策本部は必要物資の要請を三国社協に連絡する。

同日夜、神戸元気村、JCとの論議の結果、事務所の一本化が決定される。このときをもって行政、社協、ボランティアの「三国方式」が誕生した。

1月12日

三国社協は全国から届けられる支援物資を保管するために、福祉センターの2つの会議室を借用し、保管場所に当てる。社協内みくにボランティアセンターがボランティア本部支援のためにボランティア動員日程を作成し、1日5名の出務計画を決定する。

各所にゴミ置き場が設置される。また県外ボランティアの道案内のための看板を JR 芦原温泉駅等6箇所に設ける。

日本各地からJCメンバーが続々と集まる。この1日でボランティアの受付数は3000人を超えた。車で現地入りしたボランティアは現場付近の道路両側に駐車したため交通渋滞が発生、物資の輸送や重油回収作業に多大な支障をきたしたという。

県社協、各市町村社協、県福祉事務所職員によるボランティア本部支援体制の打ち合わせがもたれる。13日より1日7名を動員することに決定。三国町社会福祉センターのホールにて「三国ボランティア本部」の発足記者会見を行う。三国社協から2名、県社協から1名、重油災害ボランティアセンターから3名が出席する。

経団連田中氏らが三国ボランティア本部の現状把握と情報収集のために同本部を訪れる。

その後の経過

以下上著に従いその後の経過を列記する。

- 三国町にある福祉センターにおいて三国社協、青年会議所福井ブロック協議会代表東角操氏、三国芦原金津青年会議所理事長長谷川啓治氏によるボラン

ティア本部のミーティングを毎日行うことに決定。

- ・ 三国社協はボランティア活動資金受け入れのために善意銀行の口座を開設する。
- ・ これまでのトップダウン型の指示命令のあり方を見直し、合議制で進めていくことにする。
- ・ 三国ボランティア本部から県対策本部へコンテナ物資を要請する。
- ・ ボランティア本部に受付が集中すること、およびそれによる交通混雑を緩和するため、東尋坊にテントを張り、現地受付を行う。
- ・ 宿区民館、妙海寺がボランティアの無料宿泊所として無料解放される。越前松嶋水族館のイルカプールに重油の混じった海水が混入。プールの油膜取りのために24時間体制のドルフィンプロジェクトが開始される。14日からは荒天のため作業が中止される。

後述するが、事故当初社協は災害に対する対処の仕方、役割の担い方が決定せず動けなかった。社協は何らかの要請があり、それを審議して次の行動を決定するという手続きを踏むためである。詳しくは第1章第3節の総括を参照されたい。

3. 青年会議所の対応

青年会議所の対応は、重油災害ボランティアセンター編『日本海からの熱い風』（1998）、社団法人日本青年会議所、北陸信越地区福井ブロック協議会、たすけあいのあるまちづくり委員会編『ロシアタンカー重油流出事故災害「よみがえれ日本海」ボランティア活動報告書』（1997）にまとめられている。上記から青年会議所の対応を抜粋する。

1月8日

当時日本青年会議所（以下JC）福井ブロック協議会（以下福井ブロック）の会長であった東角操氏は8日午前現地を視察。あまりの海岸の変貌に愕然としたという。東角氏は視察後すぐに三国・芦原・金津JC（以下MAKJC）の理事長であった長谷川啓治氏に電話連絡を入れた。

長谷川氏はすでに同日午前6時半に小学4年生と小学2年生の娘二人を連れて安島を訪れてい

た。MAKJC のもとには重油の漂着と同時に全国各地の JC から「必要な人・もの・金があれば何なりと」という電話が殺到した。視察後の電話連絡で東角氏は地元 JC としての対応を長谷川氏に尋ね、長谷川氏は行政（三国町役場）と協議した上で何らかの行動をするつもりだとの考えを示す。その後も東角氏と長谷川氏は連絡を取り合っていたが、行政の動きが今ひとつだと感じた東角氏は同日夜、福井ブロック協議会役員及び県内各地青年会議所理事長に対応の思いを緊急 FAX で伝え、9 日に緊急役員会の開催を提案した。

1月9日

翌9日午前中には、福井ブロックは北信越地区の会長吉原氏に災害緊急連絡シート（神戸震災後に日本 JC が作成したフォーマット）を使用して地区及び日本 JC に第一報を送る。MAKJC の正副理事長と JC の福井ブロックで緊急役員会（常任）を開催、要請を取りまとめ、町の災害対策本部を訪問し、10日以降の重油回収作業の支援を申し入れた。しかし支援を断られたため県の対策本部を訪ねると、県は市町村からの要請を待っている状態であった。長谷川氏もいうように、その時点ではおそらく地元の漁民・行政・消防団・建築業界・観光協会など、地元の各種団体が回収作業を進めており、災害対策本部にも支援の連絡が殺到し、收拾がつかなかったものと思われる。いずれにせよ、JC はいつでもメンバーを動員できる体制を整える準備に入った。

JC としての災害支援取り組みへの第一歩が踏み出されたのは同日午後のことである。三国観光ホテルにて、重油災害の取り組みについての協議が開かれ、その結果、出席した役員の総意で重油漂着除去対策本部の設立を決定した。その目的、活動内容、活動場所、活動期間、活動方法は以下ようになる。

1. 目的
 - ・きれいな越前海岸を守るため
 - ・重油による被害をできるだけ食い止めるため
 - ・自然を守るという県民性をアピールするため
2. 活動内容
 - ・重油回収作業
3. 活動場所
 - ・三国町安島付近の海岸

4. 活動期間

- ・平成9年1月10日（金）—1月31日

5. 活動方法

- ・各ロム（LOM=Local Organisation Member）からの支援者によるローテーションによりマニュアルに基づいて活動する。

以上の案を1月9日夜、福井ブロック内各地の JC 理事長宛に FAX した。

他の JC 組織への連絡は以下のように進んだ。9日午前中に東角氏が FAX した第一報が北信越会長吉原氏を中継し日本 JC へと伝わった。また重油除去対策本部の設置および重油災害ボランティアセンターの設置については東角氏の上記 FAX により日本 JC に伝わり、人的支援、物的支援（回収資材等）の要請を同時に依頼した。

これをうけて地区内各ブロック会長及び日本 JC 常任理事には9日夜、日本 JC 役員、評議員、全国会員会議所理事長には11日に緊急 FAX が送られている。

全国に強力なネットワークをもつ JC の力が情報伝達においても十分に発揮されていることがわかる。

1月10日

10日午後、三国観光ホテルにて前日の役員会で決定した福井ブロック協議会重油漂着除去対策本部（案）が県内に10ある JC 理事長が集まった役員会で協議され、1日に100人のメンバーを動員し重油の回収に当たるなど、全員一致で重油災害に向かうことが決定された。これによって JC における対策本部が確立したのである。

同日夜、2日前から神戸から現地に入っていたボランティア団体「神戸元気村」の代表者である山田和尚氏と JC 福井ブロック会長以下役員、MAKJC 理事長長谷川氏との話し合いがもたれた。山田氏は JC の重油災害に対する除去対策本部設立を評価したうえで、三国町にやってくるであろう多くのボランティアのコーディネーターを担うことを提案した（このあたりの詳細は第1部第2章の長谷川啓治氏への聞き取りを参照されたい）。

JC は独自の対策本部は継続させつつ、神戸元気村に協力を仰ぎながら新たに「重油災害ボランティアセンター」を設立させることを決定した。同団体は JC の名を冠せず広い受け入れ口をも

つものであり、初代センター長には山田氏が選出された。JCは翌日の作業に必要な物資運搬用トラック、重油回収用のおがくず運搬用ダンプなどの調達を手配した。

「三国方式」で知られる「三国ボランティア本部」へとつながる組織「重油災害ボランティアセンター」はこのようにして誕生したのである。

重油災害ボランティアセンターは、重油災害に対する最初の民間ボランティアセンターであった。この組織は単一の団体によって運営されるものではなく、地域住民への配慮も含めた重油災害復興を目的として全国からやってくる各種の団体および個人を、全て受け入れサポートしていく主旨を持っていた。

ボランティアセンターの誕生はタンカー沈没から9日目、重油漂着から4日目のことであった。いまだ政府および自治体がボランティアの活用を考えを到らせることもなかった段階での、民意によって誕生した組織であった。同日夜、神戸元気村本部へと現地情報を電話で伝達し、元気村本部による“SAVE THE COAST“というホームページからインターネットで各情報を全国発信する。同時に元気村本部によって主要マスコミにボランティアセンター誕生のリリースがなされている。

1月11日

午前7時、重油災害ボランティアセンターが始動する。事務所が設置されたのはナホトカ号の船首部分が漂着した三国町安島の子供広場であった。現地にはすでに数100人のボランティアが受付を待っていた。前日の提言を知らなかったMAKJCのメンバーが重油回収作業に入ってしまう、残された10数名と元気村スタッフ2名、リスポンス協会1名では多くのボランティアに対応するには困難であったため、受付を済ませた個人・団体からスタッフを依頼した。まず受付を10名配備し、ボランティアを回収場所へ移動させるためにトラックを手配する係、昼食の準備係を配備していった。こうした作業に平行しながら組織図が作り直され、午前中にはほぼ組織の原型が出来上がった。必要物資の種類と量を把握し、買出しなどの班もつくられた。受付、車両、昼食、宿泊先などが初日から準備されてきたが、電気、水道、ガスを含め、とにかく何も揃っていない状態であった。必要なものは大きく壁に書き出され、手配できるスタッフが各自備品、材料、自転車、無線機とひとつずつ揃えていった。

多くのボランティアへの対応が戦場のように熾烈を極めるこのとき、多くのボランティアに驚いた自治体（三国町）が職員を派遣している社会福祉協議会（社協）にボランティアの受付を依頼し、センターがある子供広場にテントを設置、受付を始めた。社協は「これからは社協で受付するので、あなた方は指示に従ってください」とボランティアセンターに社協の下で業務を行うように指示したが、社協テント内には数人しかおらず、ボランティアセンターは社協がこれから集まってくるであろう数千人のボランティアに対しスムーズな対応ができないと判断、受付スタッフに対し業務の続行を指示する。

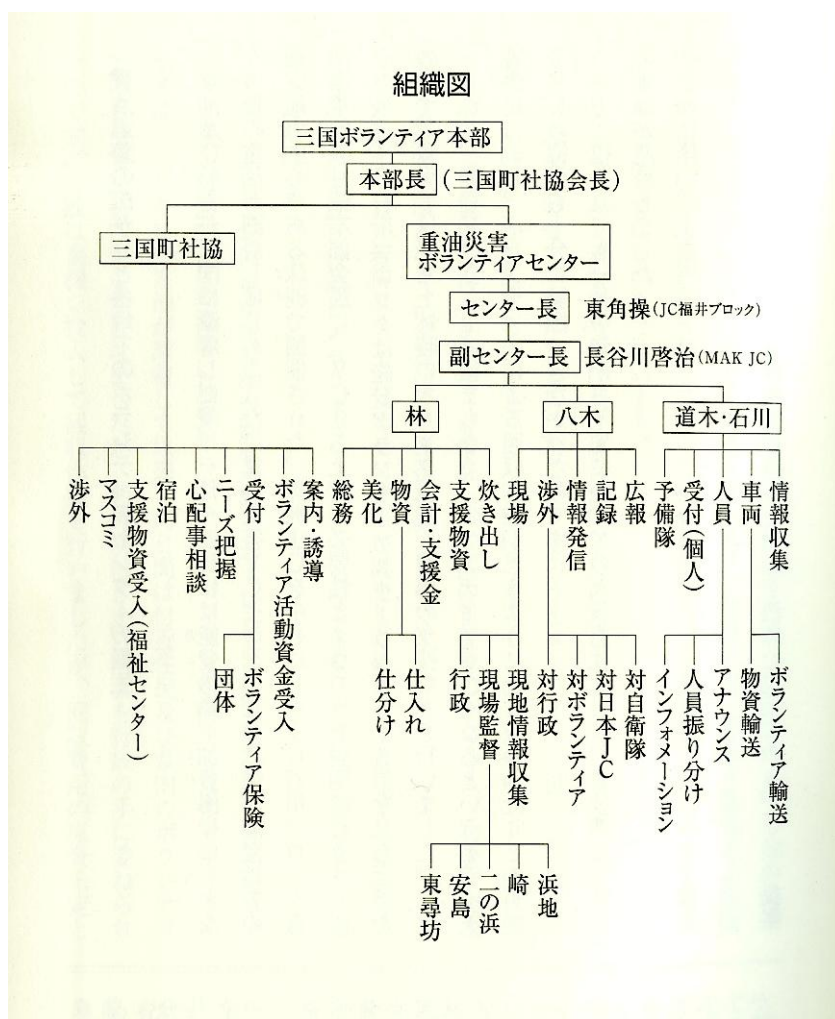
このように、子供広場には二箇所の受付が存在したことになるが、センターの判断が正しかったことは、受付窓口に集まるボランティアの人数で立証された。ほとんどのボランティアはセンターの窓口に集まってきたのである。ボランティアセンターはすでに 1000 人集まればそのうち 10 人を受付、10 人を現場監督、10 人を炊き出し等食事係へと割り当てるシステムをつくっており、なおかつ重油の早期回収というミッションを把握していた。ボランティアを有効に活かすこと、他の機関との連携のとり方、各企業、団体の後方支援の受け入れ方はすべてこのミッションを成就するために考えられた。

午後になり、社協側から「二箇所での受付は不自然なため隣にテントを移したい」との申し出があり、受付を団体用と個人用に分け、前者を社協が、後者をボランティアセンターが受け持つことになった。東角氏は日本財団ボランティア支援部とコンタクトをとり、ボランティア活動資金のバックアップを取り付け、ボランティア活動資金口座の開設準備を始める。

ようやく 1 日目が終了し、ボランティアセンター内でミーティングがもたれた。一日中センターに提案を出していた元気村の山田氏は新しい組織図を見ながら「以前、神戸のときは、これだけの組織が出来上がるまでに 20 日かかった。さすが JC だ。何も無いところから 3000 人は動かせる組織を 1 日で作ってしまった。もうこの組織にわたしは必要ありません」と言い残し、その後各地でのボランティアセンターの立ち上げと自然保護や環境問題に積極的に取り組み始めた。

同日夜、重油災害ボランティアセンター東角氏と長谷川氏、三国町社協事務局長田畑氏、北野氏、山本氏、県社協の事務局長、神戸長田区社協を交えてボランティア受け入れ組織のあり方及び運営について深夜まで議論が交わされた。社協側から「やはり二つの組織で運営するより一つの組織にしたい。立場上、申し訳ないが今後の運営の関係上、社協を組織図では上にしていただ

きたい」と提案があり、東角氏や長谷川氏は今後は地元住民のカウンセリングや、ボランティア以外の幅広い活動が必要とされること、本来は社協が運営するのが一番ベストだと考えていたことから、この提案に賛同した。東角氏は、この協議の結果、どちらの組織が上部に立つかということではなく、相互の主旨理解の上にパートナーとなることまた、相互が得意とする分野で役割を分担し運営していくことを合意し、そのうえで三国ボランティア本部を設置したと述べている。本部長には三国社協の森安一男会長が就任した。このようにして社協と JC 他のボランティア団体が一体となった「三国方式」が誕生したのである。



三国ボランティア本部組織図

(出典：重油災害ボランティアセンター編『日本海からの熱い風』マルジュ社 (1998) 19頁.)

1月12日

三国ボランティア本部が活動を開始する。これらの流れに大きな勢いをつけた団体のひとつは

日本財団であり、もうひとつは生協であった。どちらの団体も重油災害ボランティアセンターの立ち上げに前後して資金面、物資面、情報、人（専任の担当者）の面で大きく貢献した。前者はいち早く重油災害ボランティアセンターの立ち上げを神戸元気村の情報により後方支援し、後者は独自情報より支援に名乗りを上げ後にはボランティアセンターの構成団体となった。そして両団体は各地で来たボランティアセンターの支援も行ったのである。

1月13日

油回収の組織が確立してくる。同日午前3時過ぎ、長谷川氏は初めて本部を離れ、神戸元気村の山田氏の後を追って越前松島水族館に向かう。この水族館では海水を取り入れているため、油の浮いている巨大な水槽の周りでは、凍える寒さの中にもかかわらず、イルカを救おうと24時間体制で水面の油膜を取り除く作業を行っていた。このままではスタッフが潰れてしまうと考えた長谷川氏は、翌朝ボランティアのなかからイルカを救うための「ドルフィンプロジェクト」スタッフを募集した。

その後の経過

重油と船首部分が三国に漂着した後、1月15日には能登半島、加賀海岸にも極めて多量の重油が漂泊し始めた。重油災害ボランティアセンターの東角氏は、能登地方の被災地の中心であった珠洲で開催された、珠洲JCを中心とするJC石川ブロック重油漂着除去対策本部会議に出席、ボランティアセンター立ち上げの必要性和ノウハウを伝える。その後JC石川ブロックは能登ボランティアステーションを立ち上げた。重油災害では立ち上げ時のスタッフ派遣、費用の支援等を行った。

しかし、能登ボランティアステーション立ち上げ後まもなくボランティアが亡くなるという痛ましい不幸に加え、天候が悪化したことによってボランティアによる回収作業は思うように進まず、能登ボランティアステーションの機能は十分に発揮されなかった。

一方、福井県においても1月中旬から下旬にかけて天候が悪化し、同様に回収作業は中止された。そして若狭湾にも多量の重油が漂着する。

2月上旬、重油災害ボランティアセンターは三国ボランティア本部の組織から抜けて日本海の被災エリア全ての人・金・情報についての後方支援にまわった。この動きは若狭ボランティアセ

ンターと加賀ボランティアセンターの設立へと結びついた。

若狭への大量の重油漂着にともない、JC 福井ブロック内の若狭地方の 3 青年会議所は、各エリアで行政も含んだ関係諸機関とボランティアセンター立ち上げについて協議を進めたが、JC の提案を受け入れたのは、唯一県外ボランティア受け入れを積極的に進めることを決定した美浜町のみであった。美浜町の場合、行政側が立ち上げにおいて支援した最大の要因は、地元 JC である三方五湖 JC が、普段から行政の強い信頼を得ていたことが考えられる。

立ち上げと運営が円滑に進んだ要因としては、若狭地方 3 青年会議所メンバーの団結と協力、そしてメンバーが三国で重油災害ボランティアセンターに携わっていたという経験があげられる。また三国重油災害ボランティアセンターからセンター長代理で JC 福井ブロック専務の道木氏が常駐し、三国重油災害ボランティアセンターからの人、物資、資金、情報支援の窓口となり、運営面等で連携を計ったことも大きな要因であった。

以上のようにして若狭ボランティアセンターが誕生した。若狭ボランティアセンターは三国方式とは異なる住民と行政とボランティアセンター（JC メンバーを含む）が三位一体となって運営された。

また、2 月下旬には石川県南部の塩屋、片野海岸に加賀ボランティアセンターが誕生した。この地域は 1 月中旬に重油が漂着して以来、数日間は付近の住民と県内のボランティアによって回収作業が行われていたが、続く悪天候から回収が中断され、作業は行政の手に委ねられていた。行政は重機を導入して回収作業を行っていたが、回収費用の原資未定と、重機によって砂混じりになった重油の処分方法が見つからないという二つの理由で、重油は海岸の波の影響を被らないと思われる箇所埋められたり、砂山として放置されていたのである。

こうした窮状をみかねた重油災害ボランティアセンターの山田氏は県外ボランティアによって回収を再開する考えを行政に提案する。そしてボランティアの受け入れおよびセンターの運営責任を全てボランティアで行うという意思表示のもとに加賀ボランティアセンターが誕生した。地元加賀 JC も東角氏の再三の働きかけによってスタッフとして参加することを決定した。立ち上げスタッフは重油災害ボランティアセンターより数名派遣され、その後、各地からやってきたボランティアを募り、スタッフを構成していった。

漂着後 2 ヶ月が経ち、ボランティア熱が冷めたからだろうか、加賀ボランティアセンターにはなかなかボランティアが集まらなかった。そのため、東京での街頭 PR や全国 8 箇所へのボラン

ティア無料バスも、30回余り独自で派遣して、ボランティアを集めた。

このようにして三国で誕生したボランティアセンターは被害のひろがりとともに各地でボランティアセンターを誕生させ、全国のボランティアを有機的に機動させたのである。



温かい豚汁（写真提供：福井新聞社）

4. 民間から始まった対応

民間における重油流出に対しての活動は、重油流出事故の二年前の 1995 年、阪神淡路大震災を経験した震災ボランティアの対応が挙げられる。この対応はきわめて迅速であった。上記『日本海からの熱い風』、『日本海からのおくりもの』からその動きを追ってみたい。

1月6日

阪神大震災で活動した NPO 日本災害救援ボランティアネットワーク (NVNAD=Nippon Volunteer Network Active in Disaster. 以下 NVNAD) 伊永勉理事長と神戸元気村の山田和尚代表との電話による事故対応の相談がもたれた。神戸元気村は阪神大震災のために仮設住宅への住居を余儀なくされている住民に食事の配送等さまざまなボランティア活動をしていた団体であり、当時の代表は上記山田氏、副代表は草島慎一氏が勤めていた。

1月7日

元気村山田代表とスタッフ中田氏がこれから現地に向かうことを全国の関連組織に発信する。すでにこの時点で、一民間組織のもつ全国的ネットワークが稼働し始めていたことが確認できる。

1月8日

現地入りを果たした山田らは朝、地元の老人たちと重油の汲み取り作業にあたり、状況が現地の対応能力を超えていることを把握、昼頃山田氏から神戸に待機する副代表草島氏に電話連絡を入れる。「朝から重油をひしゃくですくう作業をしている。みんな老人たちでやっているんやわ」。午後には元気村事務局を通して全国にボランティアによる支援を要請する。「この災害対策には人海戦術がもっとも効果的であるが、地元のマンパワーには限界がある。広くボランティアを募るしかない」。同時に草島氏は元気村スタッフ吉村氏とともに現地 JC と福井市に電話を入れたが、なかなか周辺状況は分からなかった。このとき山田氏の現地入りが草島氏によって日本財団の黒澤司氏に伝えられる。日本財団の黒澤氏この災害でも多大な後方支援を行ったが、神戸元気村に対しては阪神淡路大震災以降様々なプロジェクトの相談と支援をしていた。

この災害に果たしたインターネットの役割は大きなものであったが、これを駆動させたのが草島氏である。前日から構想していた「Save the coast!」(海岸を救え!)のタイトルがコンピュ

ーターに書きつけられたのもこの日のことであった。

1月9日

前日の支援要請から NVNAD により派遣された伊永理事長が現地到着し、支援体制をとった。神戸の草島氏は朝からインターネット上に HP を立ち上げるため、現地から情報を聞きだし、正午に第一報がアップされる。これは現地のマスコミ発表の1時間半前のことであった。当初現地の情報は NVNAD と連携して HP 上にアップされる予定であったが、情報伝達の遅さを懸念した草島氏は独自の取材と情報更新を決定する。情報の確認と訂正が NVNAD に呼びかけられた。山田氏から草島氏へ現地のコンテナ手配の依頼がなされ、日本財団ボランティア支援部、黒澤氏との電話相談が持たれた。同夕刻元気村インターネット配信のための情報収集がなされる。

1月10日

日本財団黒澤氏が現地入りする。コンテナハウスの建設、臨時電話回線が引かれる。山田氏を初代代表として重油災害ボランティアセンターが開設された。黒澤氏によって同日山田氏と海上災害防止センターの佐々木邦昭氏とゼネラルマリンサーベイヤーズの福島義春氏が引き合わされる。その後山田氏は海上災害防止センターのミーティングに参加した。そのなかで同センターとサーベイヤーとのパートナーシップの基盤がつけられた。ボランティアの受付が始まったのも同日で、この日のボランティア受付記録は250人であった。

同日夜、山田氏は緊急対策会議を開いていた JC 福井ブロック協議会に接触し、翌日から JC とともにボランティア活動の窓口の運営をおこなっていくことを即決する。

この日から重油災害ボランティアセンターの電話はほとんど話中でつながらなくなったという。草島氏は外部非公開の電話番号を教えてもらい JC 福井ブロックの東角氏や MAKJC の長谷川氏から情報を聞き出し更新していった。

マスコミリリースを流すと同時に草島氏は VAG (Volunteer Assist Group、神戸震災時より草島氏にインターネットのサポートを提供していた組織) の山口氏に E メールを送信し、重油除去ボランティア募集のページができたこと、それをページリンクすること等をメーリングリストで送信するよう協力を仰いだ。すぐさま励ましのメッセージを含んだ 12 通のメールが草島氏の元に届く。最初のリンク希望は野生動物救護獣医師協会の植松氏からのメールであった。

当時のことを、頭の中が阪神大震災の初期 1 週間のときのようになっていたと草島氏は上著で回想している。

1995 年、当時有機野菜の宅配会社に勤めていた草島氏は、野菜とともに現地入りした神戸で山田氏と出会い、休職して神戸に残り活動を続けた。その仕事のほとんどは、山田氏の指示や自分の方策から要請される様々な物資、機材、支援金を、携帯電話を片手に企業やマスコミに向けて呼びかけるというものだった。

それから 3 週間ほど、朝 7 時になる携帯電話に起こされ、電話でのやり取りのあと呼びかけ文をパソコンでたたき、FAX で送ると夜が明ける、そんな作業を延々と繰り返した。

その日々が始まった。神戸元気村事務所の草島氏の机の周りは三国町と化し、コンテナ建設、電話線が引かれる現地情報を思い描き、到着する FAX による作業人数や刻々と代わる天候、荒波、嵐の情報をほぼ 2 時間ごとに更新した。FAX をスキャンし現地の見取り図を作成した。

現地からの情報は草島氏になかなかつながらず、またインターネットがモニターされておらず、なかなか草島氏の仕事は理解されなかったという。

神戸では、テレビや新聞などの大きなメディアを使っていた。アピールできる方策を見出し、マスコミにリリースし可能なかぎりの協力を求めるためにそれらのメディアの利点は大きかった。新聞やテレビに掲載されると集まってくる物資は想像を超えたのである。

しかし現地のニーズは変更されるスピードも速い。メディアをみた人が被災地で必要なものを知りそれを送るまでには、現地のニーズは刻々と変化する。紙の媒体はそれに追いついていけないのである。

神戸では、こうしたタイムラグと情報の偏りがあった。それでもリアルタイムに近い情報を提供できるラジオというメディアは有効だった。大阪放送局の FM802 が毎日のように神戸元気村の携帯電話に電話をつなぎ、「いま何が必要か」をインタビューしてくれ、現地ニーズをいち早くキャッチアップした。

しかしナホトカ号の重油災害は状況が異なる。そのようななか、当事者の意向をリアルタイムで反映できるインターネットは有効であったのである。またその有効性は、多くの既存メディアがしばしば記事の話題性を追求するのに対し、いま伝達しなければならないことに焦点が当てられ、体力さえあれば 24 時間いつでも大量の情報が伝えられ、自由度の高いメディアであることにもあった。加えて、文字だけでなく絵や写真も掲載することができ、全世界に発信できる。実

際、インターネット経由の物資提供やプリントアウトしたネットの画面を握り締めて参加したボランティアは多かったのである。このようにして阪神大震災での教訓の反省の上にボランティアが情報発信作業を行ったのであった。

1月11日

朝からセンター事務所には全国からのボランティアが押し寄せ、この日だけでも200人を超えた。福井県生活協同組合連合会が参加、物資の調達を中心に本格的な活動を開始した。その後も生協のボランティアは全国から参加にかけつけ、述べ1000人に達した。生協関係からの義援金は1億2130万円になったという（『日本海からの熱い風』66-67頁）。

同日深夜に重油災害ボランティアセンターと三国町社会福祉協議会との協議の結果「三国ボランティア本部」が発足したことは「JCの対応」の箇所でも述べているが、その役割分担とは以下のものであった。

重油災害ボランティアセンターは、三国ボランティア本部の実働部隊を担った。受付、情報の収集・分析・発信、ボランティアの割り振り等を行った。三国社協はボランティア保険の受付、行政との連携、福祉ニーズの把握、物資受け入れ、医療・衛生面の手配等を行った。それぞれの得意とする分野を活かした役割分担でこれが「三国方式」といわれるゆえんである。

1月12日

以上に記したように、民間組織の力は大きなものだった。JC、日本財団をはじめ、UKPI、IOPCという二つの保険会社の全責任を受けるサーベイヤー、海上保安庁直轄の海上災害防止センターと民間NPOのパートナーシップは画期的なものであった。

これに加え、企業の協力も、アップルコンピュータージャパンからコンピューター、カシオ計算機からデジタルカメラ、パタゴニアジャパンよりフリース、下着、バッグ、ベスト、JALから無料チケットが提供された。

この日から14日までの3日間、ボランティア本部の決定によってボランティア作業は全面的に休止された。これはボランティアのみならず、地域住民にも疲労が蓄積していること、重油回収作業や組織を冷静に見つめなおす機会にする意図があったが、この休止決定に際しては医師会の提言が取り入れられた。

当時三国町の医師会代表を務めていた藤井康広氏は医療ボランティアとして安島救護所に携わっていた。多くのボランティアが三国入りし始めた 10 日ぐらいから町災害対策本部から坂井郡医師会へ、14 日には救護所への医師派遣要請が届く。15 日の成人の日から救護所に藤井氏が先頭となって出務し救護諸活動が開始された。薬品及び備品は持参された。

5. 地域住民による対応

今回の重油の流出に対し最も直接的な被害を受けたのは、地元の漁師や海女からなる漁業協同組合の人々であった。6 日に海上の様子に異変を感じ取り重油の回収を開始した様子は、第 2 章の当時米ヶ脇漁協の支所長を勤めていた米谷淳氏、および海女漁を営む柚木博子、池田チマ子両氏への聞き取りを参照されたい。ここでは文献によって調査されうる当時の状況の理解に焦点をあてる。

1997 年 10 月に出版された『海からのおくりもの』をひらけば、8 日には年長の海女さんが、夥しい量の重油をひしゃくでバケツに汲み取り始めたとある。生活の場であり、生活の糧である海が汚染されていくのにこれ以上「ただじっとしているわけにはいかなかった」のだという。

地元の海女さん、石森幾代さんは次のような言葉を残している。

「うちはもうじっとしとれん。目の前の海が汚れるのを黙って見とれん。そう云うて安島の海女さんや漁師さんが総出で午後からバケツで重油を汲み始めたがです」。

誰もが国や行政が解決してくれると信じて疑わなかった 8 日のことである。「おばあちゃんらがもうじっとしとれん。何か出来ることをせな！、云うてバケツと杓を持ち出したがです。私ら若いもんも年寄りだけにさせておくわけにいかん云うて、やり始めたがです」。バケツとひしゃくによる回収とバケツリレーによる人海戦術が始まった。「何か出来ることから」、「出来る人が」行こう。大量の重油が人手によって回収しつくせるものではない。啞然とする男性たちを尻目に、その場に居合わせた女性たちによって、町内に、婦人会に声かけられ、翌日から重油汲みが始められるための段取りが汲まれた。この呼びかけをおこなった山崎洋子さんは、海に広がる大量の重油を前にバケツとひしゃくをもった人の手で回収するという対応を、「庶民の勘」として次のように同著に記している。

「庶民の勘。とりわけ農林漁業に従事し、あるいは田舎の自然の中で働き暮らす女性たちの五感、動物的に鋭いものがある。生活に追われ、お金儲けにがんじがらめにならざるを得ない男

たちより、子供を産み育てる女達は、損得抜きで海や山や川、田や畑、私たちの生命を守り維持する自然環境に敏感だ。

それは若者たちも同じだ。重油に被われた海に危機感をつのらせ、あてになるのは国でもなければ行政でもなく、自然と向き合っただけでそこに暮らす自分たちが何をし、どう動くか一人一人の力であることを潜在的に知っている。その潜在的な行動を引き出すものが、誰にでも出来る杓とバケツという簡単な方法だったために、大勢の人たちの心に行動の火をつけたのだ。

海女のおばあちゃんの持ち出した杓とバケツ。庶民の生活の知恵。最も原始的な方法と、一人一人の力が近代文明の環境汚染、重油の海洋汚染から海を救う役割を果たすと云うことは、皮肉でもあり、私たちには大きな発見だった」。

ナホトカ号に積載されていたC重油は粘性が強く、派遣されたバキュームはこれを回収することが出来なかった。したがって最も効率的であったのは、最も原始的といわれたひしゃくとバケツによる方法だったわけである。そしてそれが続々と集結した全国のボランティアによってなされてゆくことになった。

もとより地元住民の対応は炊き出し、ボランティアへの家の開放等、様々なものがあり、ここに紹介した活動に代表されるわけではない。そうした活動の報告は第2章を参照されたい。また同章の山崎一之氏の聞き取りにあるように、三国町のほとんどの人は会社に出勤したという事実もあったことを付記しておきたい。



(写真提供：福井新聞社)

3. 総括

以上第1章では重油流出による災害時の状況を時系列に沿って理解し、この事故に対する様々な対応を見てきた。これらの調査より事故発生から「三国方式」の誕生までをまとめてみたい。時系列にポイントとなる出来事を列記してみると次のようになる。

- ・ 1月2日ナホトカ号が沈没
- ・ 同月7日同船の船首部分と重油が三国沖に漂着
- ・ 同月10日「重油災害ボランティアセンター」設置
- ・ 同月11日「三国ボランティア本部」設置

「三国方式」は11日の三国ボランティア本部の設置をもって誕生した。この方式はその後ボランティア活動を通じて定着していくこととなり、官民一体となった災害時の対応の画期的なあり方として広く認知されるに到ったのである。その成立に民間組織の担った役割は大きかった。すなわち三国ボランティア本部が設置されるためには、重油災害ボランティアセンターがなければならず、重油災害ボランティアセンターはこの災害に対する最初の民間ボランティアセンターであり、またこのボランティアセンターの立ち上げをJCに提案したのは、阪神淡路大震災を経験した民間組織であり、財政面や必要とされる機材面でも様々な企業による調達が活動を支援したことを考えれば、ナホトカ号の事故対策において、民間の担った役割は計って余りあるといえるだろう。それゆえ「三国方式」誕生の引き金をひいたのは民間ボランティアだったといえることができる。

重油回収ボランティアにおいて、民間ボランティアが起爆剤の役割を担ったとすれば、これを持続するための役割を担ったのが社協であり行政であった。このように「三国方式」は各組織が潜在的にもつ役割や可能性を引き出すものであったといえる。

以上が組織面だとすれば、実際の重油回収が始められたのは、地元三国の地域住民、とりわけ漁業を営む漁師、海女であり、全国各地から集まったボランティアの力が3ヶ月で三国の海からほとんどの重油を回収したのであった。この驚くべき事態は一気になされたのではなく、重油に被われた黒い海を前に絶望の念を抱いた一人一人の人間が誰ともなく自らの手で重油を掬い上

げ、その姿に反応した一人一人の善意によって実践された行為によって徐々に成し遂げられたものであり、そのつどの小さな営為と情感を通じて初めて実現されたものであった。このことは深く心に刻まれるべきことであろう。

ところで「三国方式」が誕生したのは1月11日夜に社協で行われたミーティングの場であることが分かったが、以上の調査からはどのような過程で成立したか明らかでない。そのため事故後ボランティア本部と社協がまとめた『重油災害とボランティア』に掲載されている3つの座談会をここに参照したい。

座談会 I 「ボランティア組織の立ち上げの経緯と反省」には、重油災害ボランティアセンター長東角氏、松森和人氏（物資担当ボランティア）、三国社協事務局長田畑氏、三国社協専門員北野幹子氏が出席、越後周二氏がコーディネーターをした座談会が掲載されている。

ここで先ず民間組織と行政組織の違いを示す箇所を抜き出してみる。この違いが「三国方式」が誕生した由来でもある。

北野 JC の方達は地元だけでなく福井ブロック全体で取り組もうというのがすぐに決まったのですか。

東角 すぐに決まりました。

北野 私たち社協のほうで困ったのは、当初はどういう立場で今回の災害に対処して、どういう役割を担うかということが決まっていなかったので動きようがなかったということがありました。三国町の災害対策本へは社協の局長が詰めていましたが、対策本部から社協にどのように動いて欲しいかという要請があつてからはすぐに動けたわけなんですけれども。そういう点、JCは動きが早かったですね。

東角 でも、それは意外と簡単なんです。

越後 JC の場合はトップが動こうと決断するかどうかにかかっていますからね。

東角 地元やらせようとしてもムリがあるわけです。地元の方々が直接被害を被っているの
で、彼らの所属する団体、消防団とか観光協会とかの団体にすでに所属しているために、そ
ちらで動員されてしまうから、回収に関してはわれわれのほうが力を入れていかなければな
らない、と判断したのです。

行政とはそもそも、状況を判断把握してから動くという性質があるから、いい悪いは別にし
て、われわれ民間のように即活動というのはムリだと思います。

田畑 油が硬くなって、バキュームカーが機能しなくなってから、災害対策本部では人海戦術
で回収しなければならないと判断したのが10日の午後でした。で、早速人を集めなければな
らないということになって、10日の3時半には社協で受付をはじめました。

北野 それまでは、ボランティアの問い合わせには、とりあえず、いまは受付だけをします。
折り返し連絡しますということで、ゴーサインは出していなかったわけです。

越後 社協がコーディネートとしてやらなければならない、と災害対策本部で決定したのが10
日の午後からなのですね。

田畑 そう10日の午後からだったですね。

越後 そうして、11日にはテントを立てるわけなのですけれど、その半日間というのはどうし
ていたのですか。

北野 半日というよりも9日には元気村の中田さんから電話があっても、そのときは社協に対
して町からゴーサインが出ていないどころか、社協の立場がはっきりしていない状況だった
わけで、とにかく協力をできるだけしますということしかいえなかったのです。で、中田さ
んに10日に一度会いましょうということで。中田さんが来てくれて直接会って話したのです。
ボランティアの保険の話とか、そこで彼女は自分たちはもう活動をします、というかなり断
定的な言い方だったので、それでとりあえず応援はします、ということで何かはっきりとし

ない返事しかできなかつたわけです。社協に対して要請があるまでは。

松森 社協で独自に決定を出すということはできなかつたのですか。

田畑 それはできないんです。私自身がそのとき災害対策本部の一員であつて、本部員は部長の指揮で行動することになっております。

私はボランティア担当として、ボランティア情報を的確に申し上げてその判断を待つということなんです。

北野 町全体のことで、全体のことを見ながら、その中の一部、ボランティア分野を社協がまず受け取るかどうかということから始まるのです。JC みたいに会長がいらして、やるぞと声をかけてできるものではなく、その要請を受けるかどうかということをも、審議をして決定するわけです。つまり、社協の意志決定には審議というものが存在しているわけなんです。そこが少し半官半民ということで難しいところなんですね（上著 79 - 80 頁）。

社協と JC の組織上の大きな違いは活動する際の制約の有無であることが理解されるが、この違いがそれぞれの特性と限界を浮き彫りにし、いわゆる「三国方式」を誕生させたのである。JC は社協にみられるような制約がない分、迅速に対応することができる。福井ブロック長東角氏がニュースによって事件を知り、MAKJC の長谷川氏と連絡を取り、現地を視察、福井ブロック全体で動くことを決定した。トップの判断は即組織の動向を決定した。一方、社協は独自に意志決定することはできない。そのためには要請が必要であり審議が必要であった。その違いが活動開始のタイミングを決定した。しかし社協は地域住民とのネットワークがあつた。社協ゆえの即効性と柔軟性が発揮される場面がある。このような異なる特性を活かした役割分担がなされ官民が一体となつたとして賞賛される「三国方式」だが、これができあがるまでには様々な問題があつたのである。引き続いて同座談会から引用してみたい。

北野 地元との連携をとるといふことで、問題はなかつたのでしょうか。私自身が一番最初に聞いたのが元気村の中田さんやNVNAD の人たち 4 人が三国でいま調査をしていますということ

だったのですが、そこから JC が接触したのですね。そこら辺どうだったのでしょうか。

東角 日本財団のほうは第三者的に見てくれていましたが、最初の頃はそんなにどこの組織だからとかは考えなかったですね、とにかく前へ進むことしかなかったですから。問題とかいうと、最初社協さんとのことだけじゃなかったですか（笑）。あれは 11 日の朝だったか三国社協の山本さんが来たんです「私らがこれから受付をしますから」ということで。

田畑 現地対策本部の前で受付をしようと準備していたら、重油災害ボランティアセンターが受付をしているところで一緒にボランティアの登録受付をして欲しいと、[県から…引用者注]言われたのです。県の中村事務局長が社協はボランティアの受付をする使命がある、そんなことでは、使命は果たせない。と言われたので、それじゃあということで、センターの横ですることになったわけです。

北野 そのころ、事務所で留守を預かっているものとしては大変だったんですよ。局長たちは行ったきりナシのつぶてで、電話はひっきりなしでかかってくるはで、そんな大変なときに電話しても通じないし、二人は行ったきり何をしているのかと思っていました（笑）。

田畑 決断に時間がかかった。現地対策本部の前で机を出して受付をしにかかったときに、さっき言ったように、そういうことでは使命は果たせないということで、というのは県の救援物資やカネは県が指定した機関しか出せないということだったからです。その受け皿を社協が果たすことが使命だと言われた。それまで二の足を踏んでいたのは、社協はスタッフは少ないし、カネはないしで本部をまとめていこうにもやりようがない。そこで県から人のことは任せて欲しいといわれた。そこまでしてくれるのならやれるかもしれないと結果的に決断したのは、お昼の 12 時半ごろでした。

東角 私たちも最初の社協の山本君が来たときに追い返したわけではないですが、自分たちは自分たちでボランティアの受付をするから社協は社協で勝手にやっていたらいいじゃないかといった覚えがあります。また現実問題として人も社協にはいないしできないだろうとも思い

ました。

北野 「みくにボランティアセンター」が社協内にあるし、ボランティアに関することは社協でしなければならないことになっているし、また、たまたま国庫補助も受けて災害ボランティアの登録もしなければならない年であったし、まして町からの要請も受けているということになるとボランティアの受入を社協でしなかったら後で大変なことになるわけだったのです。せざるを得なかったという現状がありました。最初は私たち社協職員は少人数だから、4人しかいないところへ2人現地に行って帰らなかったら2人は事務所で対応しなければならなくなっ、て、どうしようかということになっていたのです。ヘルパーさんは沢山いてもみんな戸別の訪問に行ってしまうから、そういう状況だったわけです。11日の夜、神戸長田区の社協の長谷部さんが色々アドバイスをしてくださったのも大変助かりました。

田畑 市町村社協の職員数人が常時手伝いに来てくれたからそういう面では非常に楽になりました。何せ、当初は社協としても心配だらけだったわけです。JCと違って社協は現地本部と事務所と2つになり事務所が全国3,000社協からの問い合わせ又、支援物資、又、ボランティア活動資金を持参してくる方の対応又、町民からの問い合わせ等で、次長以下3人がこれに対応していたという実態でした。

越後 東角さんが社協ではできないでしょうといわれたのはいつの時点だったのですか。

東角 11日の朝だったと思います。

越後 それからこのようなやりとりがあって協力してやりましょうかということになったわけですね。

東角 後の話し合いは夜しましょうということでしたね。

北野 あのときは、いろんな話し合いをしましたね。

東角 夜の話し合いの中でその神戸長田区の社協から来られた長谷部さんが間に入って色々話をしたんですね。社協からは社協の下でセンター運営をやるべきだということに対して、私たちの方としてはそれはちょっと、という話をしましたね。

田畑 あの時、たぶん東角さんは反対するだろうと思っていましたが、われわれとしては災害対策本部との兼ね合いもありましたし、われわれとしてもつらかった。あちらを立てればこちらが立たずで、どっちもだめだというと何のための社協なんだということになってしまう。災害対策本部ではわたしは対策本部の一員だということになっているから、ボランティアの数とか明日の予定とかを聞いて本部に報告しなければならなかったし、ボランティアが安全で快適に作業していただくという、そういう関係でとにかく主体は社協で責任を持ってやっていく、ということを目指したわけです。実働は重油災害ボランティアセンターでやってもらえればいいということをいったと思う。しかしそれ以外にも宿泊の問題もあるし物資のこともあるので、それは社協のほうでしていくという役割分担をしましたね。

北野 私はあの場に同席させていただいて思ったのは、東角さんも長谷川さんも JC の方で、JC は社長さん方ばかりだと思っていましたので、さすが話の持って行き方が上手だなあと感心しました。社協の立場を理解しながら、全国からいろんな人が集まってきている。だから自分たちはボランティアセンターを作ったんだと、またほかにもいろんな団体が入ってくるし、ボランティアセンターも含めたそれら団体のまとめ役を社協がしていると思えばよろしいじゃないですか、といわれた。だから自分たちは実働部隊として働きそれ以外は社協でやられたらどうか、ボランティアのことで問題があったらわたしたちのせいになればいいじゃないですかといわれた。そのとき私は話の持って行き方がすごい、と思って聞いていたのを覚えています。

田畑 私も当初は色々と周りから言われました。

北野 事務所も緊張していたし、県外からの人もスタッフで多かっただけに、長谷川さんとか東角さんは県内の人だから気持ちがあほぐれてぎっくばらんに何でも話せましたね。

以上のような経緯から、ボランティアセンターと社協との調整がなされ「三国方式」ができあがった。組織上の観点からすれば社協も JC も全国的な組織であるが、町単位において前者は 4 人という少人数によって運営しなければならず、当初全国からの問い合わせに対応できなかったということは理解できる。後に社協の運営人数は増加したのだが、初動時における柔軟な対応を可能とする組織づくりが必要とされるように思われる。あるいは、広いネットワークを持ちある程度自由に活動できる JC などのような民間団体の力が初動時には必要とされる。この座談会では災害ボランティアのあり方について話が交わされている。参考のため引用したい。

東角 いろいろな組織の絡みもありましたが、立ち上げの混乱期はそうでもなかったです。しかし、ある程度軌道に乗ってきたときに自分たちの所属している組織の欲がでてくるといったことがあったのではないのでしょうか。そうしたときにいろんな弊害も出てきたように思います。問題はそうしたことをなくすためにどうすればいいのかということになりますが、そのためには組織を束ねる組織が必要ではないかと思っています。それは全国的な展開で進めていくべきだろうし、われわれ JC としてもそのような動きをしていく必要があると思いますし、もし、災害が起こったときに新しい組織の中でリーダーシップがきちんと発揮できるような人材の養成機関を作ることも大事ではないかと思っています。そうしなければ、例えば一部の人が出てきてずっとリーダーシップをとっているとなると、それに対抗する組織というのが出てきて揉め事を起こすということが起こりえますから、結局ボランティアの人も不信感を抱く。あるいはマスコミもいろんなことを書いたりするわけです。お互いによいことをやっているのだけれども、そういう風に捉えられがちになってしまいます。そういうところではボランティア活動というのは現地に根づかないだろうと思います。

松森 一番最初ボランティア本部に入ったときに社協、JC、元気村という風にどーんと出ているわけです。私は全くの一般サラリーマンの一般ボランティアで行った人間として感じたのは、その中に入りづらいということです。スタッフになって動くのだけれども 3 つの団体がそれぞれ自分の団体名を使っているわけです。JC の誰々さんとか、あるいはこの部分は社協がやるとか一つのボランティア本部を作っているといいながら、各々自分の団体に所属しているとい

う形で。じゃあどれにも所属していない一般のボランティアはどうするのかというとそれぞれの顔を伺いながら、探りを入れながら動かなければならない。せっかく同じ目的で動くわけだから、一つの組織をつくったのだから、できることならそれ以外の組織名はあまり出さないで欲しいというのが感じた点です。社協の誰々、JCの誰々ではなくボランティア本部の誰々、という感じになってくれれば、一般ボランティアももっと動きやすいのではないかと思います。一般ボランティアの人までがJC寄りとか、社協寄りとか、何とか寄りとか、まるで派閥争いみたいな感じが出来上がっていました。マスコミから取材を受けるときでも、まず、JCの方ですか、元気村の方ですかと聞かれるわけです。自分は首だけ横に振っていたんですが、傍目からもそういう風に感じられるのかなと思っていましたね。

東角さんは組織をまとめる組織といわれていましたが、組織をまとめる組織で又組織ができてしまう。だから組織をまとめるのが組織ではなくて、システムそのものが必要なのではないかと思います。例えばお金の問題があるとする。このような災害の場合、法律的には社協が受け皿になる可能性が多いのですが、社協が前面に立って公的機関はお金を一定期間貸付するなどというシステムがあれば一般ボランティアだけで組織運営ができると思います。又面白いものが出来上がってくるのかなとも思います。私も中に入って、結構派閥争いというものを耳にしていたので最初のうちはミーティングへは出なかった。出ても面白くなさそうだなと思ったので自分のできることをきっちりやろうと思っていました。後、やっぱり長期戦になる場合に、ボランティアの本部は、神戸に行ったときも思ったのですけれども、神戸の場合は直接の生活支援という形になってくるので、ボランティアが動く場所というのは現場なんです。でも、今回の場合は重油を回収するという作業支援ボランティアなんです。作業支援の場合は本部というのは前線におくべきではないと思うんです。

本部はあくまでも後方において前線はあくまでも作業をするだけの場にしておかないと。たとえば炊き出しも事務所のまん前でやっていて、入り口が分からなくなっているということもありましたし、何でもかんでもそこに人が集まってくるものだから相当混乱しました。作業をする場所と調整する本部の昨日は距離を置いて設置すべきだと思います。受付は現地でやってもいいとしてたとえば物資なんかも相当ものを置く場所で苦勞をしたし、炊き出しなんかも食品管理の面ではものすごい苦勞をしていましたよね。近いのはにぎやかでいいことはいいんですけど。

越後 いまの松森さんのご意見に対して東角さんはどのように思われますか。

東角 JCも最初からJCという名前を出すと人が集まりにくいということが分かっていたので、最初から重油災害ボランティアセンターという名前でやっていこうとしていました。過去の経験からも神戸でも北海道でもJCという名前を出してやっていたら必ず不評があったんです。組織の葛藤ということで。だから今回はJCの名前をあえて出していなかった。先ほど松森さんが言われていたことはもっともだと思いますし、とはいえ最初からそういう既存の組織意識をなくしていこうということの方がもっと必要であったと思います。やはり軌道に乗せるまでは地元ということもあったし、我々は企業家ぞろいだからひとつのシステムを作ってしまうまではわれわれの得手とするところだったわけです。そこまではやっていこうという考えはありました。そのバトンタッチが1月の終わりごろになったわけです。それと本部の機能を後ろに回すということは重要かもしれませんね。

越後 行政が動くまではやっぱり時間がかかる、悪いとかそういう問題ではなくて、システム的に時間がかかってしまうのはやむをえないので、まず民間からはじめなければならないと思います。だけど民間が始めるときにお金がない。企業なんかでも義援金を100万円とか送られてくる。しかし義援金だから被災者に配られる。またそれも、災害直後に入っているお金なんだけれど半年間くらいはそこで眠っている。われわれとしてはすぐに動くわけだから、そういう支援がすぐに得られればどんなにかありがたいことかと思うのだけれど、それは得体の知れない寄せ集めの団体だから誰もそこへは持ってきてくれない。社協なり何なりがお金を受ける受け皿として役割を果たして、それを管理しながら民間のボランティア活動に配分できれば、あるいはそのようなシステムなり何なりがあれば、ボランティアも動きやすいと思います。行政に任せておけばそのようなシステムというものは早く機能しないわけだし、民間だとお金は入ってこない。それを一体どうやって変えていくかということがこれからの課題だと思います。

松森 アメリカというのはそういう点早いんですよね。ハリケーンとかが来ますよね、そうするとすぐ口座ができるんですよ。反応が早いんです。日本とは比べ物にならないくらい早い。

北野 私が感じてきたことなんですけれども、コミュニケーションというのは非常に大事で、私たち社協の人間としても行政とのパイプ役ということで、今回それを大事に考えてきたわけなんです。短い時間でよくまとまりがついたと、多くの方からほめてもらえるんですけれども、やっぱりその影にはみんなが時間を惜しまずに夜通し話をしたことが要因でなかったかなと思います。聞いたこともない、わけのわからない団体が入ってくるというのがこういう災害時でしょうから、先ほどお二人が言われたように、災害時の何かセンター的なものができれば一番いいのだらうと思いますが、それはまだすぐにはできないでしょうから、それまでは民間団体とか社協とかがまず十分話し合いをして組織をきちんとしてしまうことが大事なんじゃないかと思います。そして組織がきちんできたことをボランティアの方に周知徹底して、派閥のないように全体がまとまってやっついこうとする。そういう立ち上げって大事なんじゃないかなと思いました（同著 84 - 85 頁）。

以上に組織と組織の問題、これに対するボランティアの反応、義援金の受け皿という行政の役割、そして民間の役割、コミュニケーションの重要性など様々な問題が指摘されているが、この重油災害の場合には組織間の問題があったわけである。しかし活動したボランティアにとっては「重油の回収」や「日本海をきれいに」というミッションが前面に押し出されているのである。したがって多くのボランティアをコーディネートする組織ないしシステムはそのミッションをいかに果たすか、その目的のために組織ないしシステムは何が出来かを探ることがコーディネーターとしての役割ではないだろうか。そこにおいて組織の主張は無化されるように思われる。

多くのボランティアの「重油の回収」や「日本海をきれいに」という動機は地元三国の住民に次のような影響を与えている。ここに紹介する座談会Ⅱは当時の区長を囲んで行われた。参加者は坂野上要安島区長、井黒虎子男米ヶ脇区長、田賀憲秀陣ヶ岡区長、山田正浜地区長、田畑克佳三国社協事務局長、そして当時ボランティアだった三宅貴之氏であり、同じく当時ボランティアだった岩下正二氏をコーディネーターにして行われている。

田畑 ボランティア側の立場の人間として、今思えば、漁協と区民の長である区長との間の調整には非常に苦労しました。

田賀 行政としては慎重にならざるを得ないですからね。区長の立場として残念だったのは、最初から区長会は協力団体として協力してくださいと対策本部からいわれていたことでした。区長会は一協力団体としてではなく、もっと積極的に区民のボランティアを動員し、指揮し、要員の配分等の実行計画に参画すべきではないかと思っていたからです。

田畑 そこら辺、非常に難しいところがありますね。

坂野上 区長を蚊帳の外に置きながらなにをしているんだ、と行政に文句を言いに行ったときもありました。

田畑 災害対策基本法には、「自治区と連携しながら役場がやらなければならない」となっている。基本はそうなっているのですが。

田賀 それに、地元の区民に対する保険の問題とか、そういうものがきちんとしていない。その点、代議員会でも結構やり合いましたね。

坂野上 そこら辺で問題になっているが、漁協組合があつて安島区があるのか、安島区があつて漁協組合があるのかということです。これには考えさせられました。例えば町で対策会議を毎日やっていたけれども、3回に1回は区長を呼んで区民の意見を反映してほしいと何回も言いに行きましたが残念ながらできなかった。そういう場があつてもいいと思いましたね。

田賀 私たち一般区民の立場としては、回収作業は漁業資源を守るためにやるのか、それとも日本の海を守るためにやるのかということが未だにはっきりとしない部分が残っていたと思います。しかし、結局は日本の海を守るためにやったのだと。その結果が漁業資源を守ることになっても、われわれの海をきれいにするためにやったのだという意識になってこななければならないと思います。しかし、どうも漁業組合が一番中心になっているような感じがしました。会議とか出ているとどうも漁業組合の海のように錯覚をしている人が多いような感じがした

のです。漁業権はあるかもしれないが、所有権は誰のものでもない。

坂野上 ボランティアに教えられたのはその部分なんですね。この海は漁協の海でもない、安島区の海でもない、ボランティアの海でもない。誰の海でもなくて、日本の海です。ということボランティアに教えられたと思います（同著 94 - 95 頁）。

第2章 10年の声を尋ねて

第2章は当時重油回収ボランティアに携わり現在三国町に住む方々への聞き取り調査からなる。その目的とするのは、文献による調査からは知ることのできない災害当時の状況と今この災害に対してどのような考えがもたれているかを知るためである。聞き取りは8名の三国町住民の方々に計7回行った。

1. 米ヶ脇漁業協同組合員米谷淳氏に聞く

人物紹介…米ヶ脇漁業組合員の米谷淳氏は昭和6年に三国町で生まれた。祖父は明治生まれで漁師一本。当時三国で一番大きな漁船であった10メートル余りの木造帆かけ舟に6、7人で乗り込み、3時間をかけて沖合いまで漕ぎ出し、底引き網漁を営んでいた。父は貨物輸送会社に勤める船乗りだったが、昭和18年に南方諸島にて戦死、残された米谷さんは漁師になった。16歳のことである。以来60年漁業に携わってきた。三国町には雄島漁業協同組合があり、5つの支所—米ヶ脇、安島、崎、梶、浜地によって構成されている。重油流出事故当時、米谷さんは米ヶ脇漁業協同組合支所長を勤めていた。

あっこにナホトカの船が上がる3日前に、すでにこの沖に流れてきとったんや。ほど風がね、まるこくさい風が来てて、こりゃあぶねえなと思った。

米谷さんに重油流出事故を呼び覚ますのは不穏な風と海の記憶であった。三国湊の漁業は漁場によって次のような漁種に分かれる。アワビ、サザエ、テングサやワカメを採るのは浅海漁業、磯に入ってきたタイや河口のスズキを一本釣りするのは沿岸漁業、ヒラメやカレイを獲る底引き網漁は沖合い漁業である。浅海漁業を主とする三国の漁業にとって、港への重油漂着は死活問題だったのである。

ほど、こりゃあだめだと。そいたら明るる日になったら、泡みたいなもんが飛んでくるたびに

油がパツ、パツと広がるのや。こりゃあくるぞー、用意せーって。

先頭を切って重油回収に駆け出したが、町の対策本部に行ってどうするかと問うも「自分とこのだけ守れ」という。吸着マットは県にトラックを飛ばして取りに行っていた。しかし間に合わない。「対応なんて何もしてねえ。備品なんか極わずか、申し訳程度にそこ置いたるだけや。吸着マットなんて 100 箱や 200 箱あっても足りない」。目に見えている重油の漂着に対し、何らかの対策によって防止する。そのための対策と必要とされる手段は何か。問い合わせる米谷さんら漁業者に対し、本部に用意されていた備品はあまりにも少なすぎた。

対策本部で手に入れた吸着マットを積み込んだ船をいくつかの海岸畑まで急がせ、海上に撒いた。船にはいつでも吸着マットを積めるようにしておく。それらの補給を待つては海原に撒いた。

きたぞーってときにはそれいけーって、全部の船を出してばーっと撒いて歩く。撒いた吸着マットは油でドロドロ、船にビニールシートを敷いても何の足しにもならんのや。きれいな白い船は真っ黒けになってもうた。

事態は急を要していた。対応を急ぐ米谷さんら地元漁業者は、初期対応に手間どう地元行政に怒りをぶちまける場面も多々あった。

行政の対応は後手後手やった。三国の役場やっても。いろんな雑貨屋でゴム手袋や軍手や、カップなんか買占めたんや、僕は。有り金全部つこて。遠いところまで行って買い占めてきたんや。毎日 50 人 80 人の人が使うのなら、カップもトロトロやし、洗うには台がなければいかんし。油落とすには油がいるし。それでボランティアも来るようになって、こちらに来てくれるように頼んで、手伝ってもらって、今日はこことここ、ここに行ってくれ、ここは 50 人ここは 80 人、ここは 100 人で人数割りしてね。それでやったんや。割り当てたらその通りそこにお弁当ももっていかなきゃいかんでしょ。海から上がったら手洗ったり足洗ったり、あったかい味噌汁出したりしてね。

そうしたのも一部は組合で（お金を）出したけどね。最終的には町が立替をしたんや、でもそれをやるまで時間がかかったんや。けんかばかりしとったんや。言うても分からんのや、

行政は。

僕はいろんな買占めをやったでしょう。米谷はそんなもんしたらあかんがや、みんなで分けなあかんやんといわれた。誰の銭や。おれの銭や、と所長を怒ったんや。こんなもん全部保険で出るんや。

知らんのか、油濁損害賠償制度というのがあるんや、本部がイギリスのロンドンにある。ナホトカはロシアやさかい、これに入っているかどうか東京に電話せえって。入っているというから、じゃんじゃんやれということで、できるだけ現状復帰で元になるようにきれいにしたほうがいいぞと。少しでも残したら、油は古くなればなるほど固まった硫化水素が雨で流れて流出率が高くなるから、ウニやサザエ、アワビも魚もいつてまうよと。

それから、やわっと県が動くんやで。それから国が動くんやで。今度はバッチつけた人が山ほどきた。

漁業を通して常に海と関わり、直接この災害を被るものとして、一刻も早くその対策を急ぐのは当然であろう。買占めに対して配慮を欠いた行動だとするのは一理ある。しかしそれも予想されるべき行動であり、国から町へ至るまでの連絡から事前に回収材が用意できれば未然に防止できたのではないだろうか。対応が遅れば自ら対応するしかない。20 数年組合長を務めた米谷さんは次のように語っている。「漁業にしろ、農業にしろ、トップに立つものは、いや役員はもちろん組合員も、自分らがやらなければ誰もやらないという考えでものを考えないと。きれいな言葉で建前で話しても通用しないんや、本音で話さない。そうすれば組合は 8、9 割まで統一するし、みんな分かってもらえる。そういう人間がおらんよ、僕らのようなバカがおらんよ。一言で言うと」。しかし漁業組合員としては上部組織である雄島漁業組合の指示に従わなければならなかった。

そして続々とボランティアが三国に集まってくる。どのように感じたのだろうか。

実際にみんな仕事してくれた、あの人らはようけね。あんなもの根気のいる仕事やで。いまやっつてすぐ結果が出るもんでもないんやで。きれいにしてね。磯の砂利なんかあるところ、スコップで砂利を海に放り込んで。そうすると水が波で動いて砂利の油が浮くでしょ。浮いたところを吸着マットで取ると。砂利は海がまたシケれば丘に上がってくる。そうしてきれいにな

る。またひどく汚れてるのは拭いてね。海に放り込む。ダツタカダツタカ、スコップでドロドロになってやったよ。

事故後、漁業組合員の海に対する意識は変わった。けれども組合が個人ベースのものとなってきた今日、漁業組合として海という環境に対する活動が起こる兆しはみられない。それも時代であると米谷さんはいう。

海の釣りでも、自分の考えてつくった道具は今でも見せん。子どもにも見せん。誰にも教えん。教えたらいかんのや。なぜかっていうと、そういうふうなかたちで魚がつかると、海が荒れてきてもね、涼しい顔して魚を釣って、素通りしてまうで。みんなそうして死んでるんや、欲にかかって。別にそこにいる魚は逃げていかんのやで、明日釣ればいいのやで。すれば資源保護にもなるし、出荷調整にもなるのやで。今日 100 匹釣るよりも今日 10 匹釣ってやるほうが、よっぽど値段もいいしね。それを短時間でやってまうであかんのやで。一晩中魚が釣れるわけじゃないで。それには天文も勉強せなかんのやで。風とか波とか星、月。だいたい日の入りっていうのは、そいから星の出と星の入りもね、40 種類ぐらいある。それぐらい覚えてやらんと、常識やった。そうやって考えてやってた。そういうものはアタマに入れて、全部残さん。残ったらあかんのや。そういうのが時代、時代っていうもんや。

子が親のやってることを習うのはいい。親が子に教えたらあかん。こうせないかんとかああせないかんとか。それを間違うとね、たとえば底引き網のカニ漁で思わぬ量があがったとする、そうするともう一回やろうとするでしょ、その一回を切り上げて帰れば命は助かるし、その一回をやったために船毎ひっくり返って乗組員が全滅したってこと、いくらでもある。それは欲にかかるさかい。

何にも残しとかんのやで。僕が死んだらほんで終わり。後のものは後のもので考えればいい。その時代に合うことを考えればいい。昔がこうであったというのは昔の人がいうことだね。現在というのはですよ、「過去を踏まえて、明日に備えよ」。みんな考えよちゅうことですよ。明日のことは分からない。そうしたって明日の日は来るのやで。

2. エコネイチャー・彩みくに会長阪本周一氏に聞く

人物紹介…地元三国町の^{しゅく}宿に生まれ、野鳥を通じて三国町の自然環境を研究しながらその保全にかかわってきた阪本周一さんは、この重油災害において最も多くの野鳥を保護した人といっていだらう。当時はボランティアとして重油の回収をしながら野鳥の救出に当たったのだった。野鳥をはじめとする三国の生態系を独学で学ぶこと 40 年、地元の自然環境を知り尽くした人である。それゆえ 2001 年三国町の環境基本計画の作成者に推された阪本さんは現在「エコネイチャー彩みくに」の代表を務め、様々な活動を展開している。

阪本さんは鳥類調査から環境保全の取り組みを始めた。地元三国町の自然の豊かさを知り尽くした人であればこそ、重油漂着時においても多くの渡り鳥を油から救出できたのである。そこでこの聞き取りも三国湊が渡り鳥にとってどのような場所か解き明かすところから始まっている。

日本海のこの三国町辺りの里山というのは、渡り鳥のメッカなんですよ。東尋坊にレーダーがあるんですが、ツグミなどの渡り鳥がそれに映るほど上陸したんです。海岸線に上空からいったん下りて、それから内陸部へ分散していくというほどで、その入り口が越前海岸なんですよ。鳥がやってくるのは大陸からです。中国・ロシア・韓国、こういう大陸のほうからやってくる。越前海岸にやってきて、少しずつ体を慣らしながら、岐阜とかの亜高山帯に分散していく。

渡ってくるのは冬鳥が主ですね。集団で渡ってくる小鳥で、代表的なのは県の鳥であるツグミ、それからアトリ科の仲間が多い。あとは春と秋にだけ渡ってくる旅鳥、これはシギの仲間が多いですね。それから夏鳥というのが暖かい南方から渡ってくる。カッコウなんかそうですね。南方から海岸線へいったん渡ってきて、それから移動する。オオルリなんてきれいな鳥も渡ってくる。雄島という離島には滅多に見られない鳥もやってくる。海岸というのは渡り鳥と強い結びつきがあるんですね。福井市の海岸のほうから石川県まで、必ず海岸線には防潮林というのがあるんですよ。このなかが私のいわばホームグラウンドで、鳥と接触していた。こういうところから鳥と関わりがあったんです。

三国の海岸線に並ぶ黒磯に馴染むような真っ黒のクロサギ、シベリアから渡ってくる大きな雁、オオヒシクイ。10年単位で続けられた調査は学会でも発表され、初めて明らかになった生態も多い。たとえば後者について、石川県加賀市片野町に飛来する個体群が福井県の九頭竜川に餌を食べに来る個体群と同じであることが突き止められた。田圃が広がる九頭竜川周辺には新潟県にあるような湿地帯がない。ましてや人の出入りは激しい。そんななか本来昼行性であるオオヒシクイは夜行性に変えて生活していたのである。この発見に加え、オオヒシクイの餌が九頭竜川下流域の抽水植物、マコモであることも突き止めた。マコモはイネ科の植物で、夏場から8月の終わり頃までに花を黄色くし9月にはそれを枯らす、以降養分を水中に下ろし熟させる。これが餌となっていることが分かったのだ。こうした活動から、阪本さんは九頭竜川に愛着をもち水草の保全に取り組むようになったという。

その取り組みのなかで、この20年間に建設省（現国土交通省）の河川課に何度も陳情に行ったという。「ここは鉄砲水といって川の流れが急激に速くなるものですから。どっと流れると河口に全部ゴミが流れてくる。こういうものをある程度防止するには水草の復元です。水草には、そこに生物が集まり、水を浄化するという役割だけでなく、急流を草で撒きながらゆるやかに水の勢いを治めるという昔からの役割があったんですよ」。「昔から橋げたと柳の木がゴミを食い止める役割をしていました。そこに柳の木があれば昆虫が来る。水中に卵を産むからそれを食べるに両生類や魚がやってくる。それを捕まえに鳥が来る。そういう食物連鎖を全部無視して人間本位に考えると、邪魔者は取ってしまえということになる」。鳥の生態調査から環境保全へと阪本さんの取り組みは広がっていった。

環境は、もともと鳥を媒体にして長年やってきました。昔から鳥は環境のバロメーターといわれたんですね。鳥の生き様とか鳥の生息環境をみていると人の暮らしや人の環境まで結びつけて考えられるといわれたくらい。ちょっと環境が変化したりその兆候が見えると、一番最初にそれをあらわすのが鳥ですから、鳥というのは敏感なんですよ。

ナホトカ号の重油流出事故では被害にあったのは人間だけではなく、ワカメなどの海の生物だけではなく。まるごと海の生態系が被害を受けた。たくさんの海鳥が油にまみれて死に絶え

たのである。

重油が漂着したその日から、その回収に駆けつけた阪本さんだったが、重油を掬いながら鳥が気になって仕方がなかった。翌日、阪本さんの家へ次々と FAX が送られてくる。問い合わせでも野鳥の保護対策窓口がなかったため、学会名簿を調べて問い合わせてきたのだろう。FAX 用紙を補充するのに大変だったと阪本さんは振り返る。「急激に石鹸で洗ってはいけない。先ず暖をとった後でぬるま湯で徐々に油をとって行ってください」。かつて島根県でこうした災害を体験した学者の方の、詳細な注意書きが添えられた野鳥の保護対策情報が入ってくる。

油まみれになったのは、北のほうから南のほうへ行って暖かいところすむ鳥でした。一番多かったのは、オオハムという大きな水鳥やかもめの仲間。海洋に多い鳥ですわ。犠牲になったのは 5、6 種ありました。油まみれになって、沖で死んだものもあれば、私が助けたものでも、もう腐りかけて両手でぶらさげても足が千切れそうになってるものもありましたし。生きてる鳥はそのまま毛布で包んで獣医のところへ運びました。

鳥っていうのは昼になると海に出る習性があります。夜明けと同時に海まで急いで行って、ボランティアが誰も出ないときに、水際のほうを見るとね、転々と鳥がうずくまっているんですわ。そーっと腹ばいになって行って毛布をかぶせるんですけど、まだ油のつきがそれほどでもない鳥もいて、ぴゅーっと歩いて行って海へ戻ってしまう。それでも行けば必ず回収しました。回収した鳥は一時を争うので獣医さんへ運び込みました。ダンボールにつめて、加戸農道場へ運びました。そこは特別に野鳥を集めるところがあるし、海岸から近いしね。生きてるやつは全部そこへ運んで。早いもんですからまだ誰も来てなかった。それでダンボールに名前を書いてね。現地で夜を明かしたこともありました。

当時、会社に勤めながらの野鳥救出活動が続くこと丸 1 ヶ月半。午前中はほとんど鳥の回収にあて、会社には行ったとしても午後であったという。鳥は夜明けとともに沖に出てしまう。沖まで行くのは危険なので午後は重油の回収にまわった。野鳥の救助ではハイエースを一台犠牲にした。重油のついた長靴と、腐った鳥の匂いがこびりついた。車内にシートを敷いても全て重油で汚れたため、諦めた。その後車の中は真っ黒になった。

かなり長期間、おそらく1日も欠かさず、丸2ヶ月くらいは日の出と同時に野鳥の救出に、あわら市から雄島のあいだを巡回していました。それはなぜかという、夜、油まみれの鳥が丘のうえに上がるんですよ。人気がなくなった頃にね。それで一晩過ごすでしょ。そして日の出と同時に海に出てくんですよ。そのあいだに救出しないと、どんどんどんどん死んでしまう。そういう鳥の生態的なものよく知っているものですから。一番回収したつもりでいるんですけどね。

そして続々と集まってくるボランティアには鳥を助きたいという動機で来る人もいた。野鳥救助の窓口を探していた青年を友人によって紹介され、それならということで翌日の調査へ一緒に行ったこともあった。しかしそうした人は極わずかだったという。

ボランティアは押し寄せるほど来ました。来てもらってる人に対して感謝を持たないかんし。仲間を駅まで送り迎えすると、ボランティアに来たんですけどどこに行けばいいんでしょうかという人も駅にはいっぱいいた。そういう人を運んだこともありましたね。でもね、ボランティアに来るっていう人は沢山いたんですけど、生態系とか動物とかそういうものの救済というのは、「それどころじゃない、そんなところまで手が廻らない」というのが、本音でしょうね。

そういう面から言うと、やっぱり地元で私がいてよかったと自負しています。一番よく勝手を知ってる、自分の住んでるところで活動ができた。相当燃料費が要りましたが、近いからよかった。私達の活動は朝早いですからね、ボランティアの事務所行って名前を書いて、そんなことする必要もないし、記録する意味もない。ただ早く行って助ける、鳥のためにするんです。それが終わったら町内、自治会で何日にはサンセットビーチの砂の油をとりに行ってくださいっていうとそれは別に行っていましたからね。

その後阪本さんは三国町の環境基本計画の作成に携わり、2年を費やして地域の特性を活かし、重油事故を教訓にしながら、この計画をつくりあげた。ややもすると作成しただけで終わってしまう計画をいかに推進していくか。そこで結成したのが「エコネイチャー彩みくに」であった。合併した他の町にはない三国の特性。それは、海、里、里山、古い町並みと文化という様々な「彩り」があること。けれどもその彩りはかつての鮮やかさを失ってきているのではないか。

「エコネイチャー彩みくに」が最初に取り組んだのは九頭竜川河口のゴミ問題だった。

エコネイチャー彩みくにが発足して第一番目に「三国の海から SOS」と題してやったんですよ。県内各地に発信しました。何が問題だったかという、九頭竜川のゴミです。不法投棄があまりにもひどく海が汚れている。これは重油事故があった後、県民の意識が学習してないとか、事故が活かされていないといえるわけです。その当時、海の大切さとか海の生物、観光資源、磯にすむワカメとかウニ、サザエという海の恩恵まで影響を受けたに関わらず、意外と県内の人には忘れかけている、教訓が活かされていない。それはどう形で表されているかというと、川へ平気でごみをどんどん投げている。昔からゴミ投げ文化というのはありました。ちょっとした家庭で出た残飯を投げるようなことをしたんですが、それも今はやりません。それが家電製品や化学製品までもがどんどん川に捨てられる。それが一時雨で増水すると、全部河口から海に流れ出る。それがどんどん海岸線に運ばれる。それを私どもは見て調査して、これではいけないと。これではきれいにしてくれたボランティアに対しても申し訳がない。何年か経って再度訪ねてきたときに、なんと汚い海になってるのかと、油ではないけれどゴミがひどいと。こういう印象をもたせた場合ね。果たしてあの当時の教訓とか気持ちが伝わってないということになる。それではいかんということで、川を中心に海岸のゴミも含めて陳情とか、行政のところへ尋ねて行ってこういうひどいことになってる。これを行政単位で何とか話し合っ解決しようというふうに呼びかけを始めたんですよ。普段の雨がちょっと降ったときとか、水が増えたときとか、堤防際にへばりついているゴミが蓄積して一気に6月、7月の雨期になると流れてくる。そういうものをビデオに撮ったりしながら訴えてきている。継続しずっとやってることに対して効果が出てきてます。

2回目に取り組んだのが、水環境から考えてみる鴨池というものです。九頭竜川の鳴鹿大関というのが平成5年にできあがったんですよ。それで県内全域行き渡っていると思うんですが、パイプラインで農業用水を取り入れる制度が始まったんですね。それで今まで田圃の用水として使ってた溜め池が役目を終えたんですね。それで15年ぐらい水を入れ替えることもなく放置されたために、池そのものの生態系が変わってしまった。それで昔あった貴重な水草、そういうものがどんどんなくなってしまっ絶滅してしまった。それで人工的な、蓮とか睡蓮が池いっぱいにはびこってしまった。そこで水を入れ替えないものですから、今度球根と

か根っこが腐敗してどんどんどんどん酸欠状態になって、異臭まで放つようになってきた。これでは環境基本計画に逆行するようなことを放置していることになる。三国町の懇談会の一番か二番に入るぐらい、子供たちにあの池を残してほしいという声が高かったものですから。取り組んでいこうと。

これはものすごい効果あります。水を入れ替えたり、腐敗した茎や根っこを回収して、水の環境がどんどん変わってる。一時期は魚は酸欠で100匹単位で死んだんですよ。それがなくなった。匂いもなくなった。それから冬鳥の、鴨の間は20年前は10,000羽に近い渡り鳥が来てたんですけど。今は多くて2000から3000羽なんですよ。それは暖冬などの影響もありますから一概には言えないんですけど。将来は鴨だけでなく、雁などの鳥も入れる自然に近い環境作りをしていきたいと思ってるんです。

3回目のテーマが里山保全。里山といっても池も含まれてるんですね。三国の里山の中には、湧水が何10箇所も残ってるんです。それから里山っていうのが残っているのは、旧雄島地区（今の安島・陣ヶ岡）にしか残ってないんですね。

松枯れ病の現状と対策。それから開発による里山の伐採。つまりね。狙われてるんですよ。別荘地として。それによって市が無秩序に許可を出していくとあつという間に景観が損なわれる。もちろん安島自治会というのも何10年もかけてやっていますが、海岸の護岸道路がありますね、向こう側が海側、こちら側が山側、できるだけ海岸側に建築物を建てないということを私どもがやってるんですわ。これによって東尋坊の近くに有料老人ホームが計画されたのも町と話し合っ陣ヶ岡の方にもっていった。それは結局米ヶ脇に建ったんですけども。それから別荘が計画されているのも、所有者と直接話させていただきました。皆太陽が当たる一等地に立てたがるので、何とか道路から内側へもって行ってもらって。自然の景観というのは県民全員の権利でもあるので、法律でクリアされてるからいくらでも建てていって言うわけじゃない。こういうのに取り組んでるのが里山保全の活動なんですわ。

松枯れは、松食虫を媒体にしてマツノザイセンチュウが中に入り込んで松を枯らすんです。これを、枯れたものはもう駄目だと放置しておくところからどんどん広がっていく。早くチップにして使うとか燃やすとかしないと駄目なんですよ。伐採はしても放置したのが過去のやり方なんです。テクノポートの松もほとんど全滅してしまいましたし、雄島の松も枯れてしまった。これから松を植えるらしいんですけど、それも自然林に変えてくれという提言をしている

最中なんです。そういうのが里山保全の活動ですね。

それから行政には免税処置とか行政が買い上げるとか、そういう手も打ってくれるように頼んでいます。地主さんは持て余してるんですから。里山は手入れをしないと成り立っていかんですよ。人間の手が加えられて初めてそれが維持管理できる。昔は薪にしてそれを燃料に使ったり下草を刈って木を育てるとか。今はそれを全くやってないですから、里山というより死に山ですね。

それから今年やるのは、地球温暖化。地球環境というテーマです。先ずやるのは、町民市民の意識改革、もう足元まで迫ってきてますよと。CO₂の削減や生活の中からいかに地球温暖化防止につなげるかというのがテーマ。企業から発明品やアイデア製品を展示してもらいます。

最終的には重油と現在の町民の意識の結び付けたいと思ってるんです。行政はあの事故に触れたくない。風潮被害が今までもありましたし、悪い思い出をここで思い出させるようなことはしたくない。特別なイベントをやらなくておこうというのが町・市の考えです。ところが県は、当時の教訓、苦勞話を、次のステップの教訓として思いなおしていこうと考えてます。行政もそれぞれの考えがあります。私どもはそのなかで、とくに海をきれいにするとか、ゴミの問題とか徹底してやっていく。とくに冬に季節風が強くなりますとね、海外、中国や韓国のゴミが流れてくる。これを国に呼びかけて何とか政治レベルで対策してほしいと呼びかけています。私もいまずっと定点で写真を撮り続けています。来年の3月まで1週間に1枚ずつ。その変化を見えています。

重油流出事故から10年を経た今、阪本さんの継続的な活動は三国に様々な影響をもたらしている。そしてその活動の根幹にはこの事故を三国のこれからの結び付けたいという強い意志がある。

やっぱり一番大事なのは風化させてはいけないということですよね。季節風が吹くとね、毎年木材が流れ着くんですわ。貨物船から投げ出されたものです。要するに海が荒れるものですから、荷崩れが起きるか、あるいは船が危ないからこっからここまでは海に放出してしまおうと計画的に投げる場合があるんです。そんなのが何100本と毎年海が荒れると流れ着くんですわ。越前から石川ぐらいまでは。その回収は国がやってくれるんですけど、もしこれがですね、10

年前のナホトカ号みたいにですね、油が流れ着いたら。また 10 年前と同じようなことがいつ起きてもおかしくないという危険は含まれている。そういうことを考えたらね、風化させてはいけない。意識を持ってもらわないかん。昔のことを思い出さんどこうというのではなくて、いつでも、冬の荒れたときには、そういう危険がはらんでいるという意識を持ってもらわないと駄目だと思うんですよ。そういうのが町民の声として出て行かないと、航行する船舶の規制というところにつながっていかんとね。要するに無謀な船の運航によって事故が起こるような海ですから、国レベルで規制していかんと。重油が残した教訓というものは考えながら行動してるんですよ。

砂の中にゴミが埋まってる海女さんの苦情とか、海水温の上昇でワカメやサザエの採れるところと取れないところが出てくることを知ってるんですわ。それを重油の提起した問題と結びつけていかないとナホトカは事故で終わってしまう。それをきっかけにしたいんやね。

そして重油流出事故後、様々な面で変化の兆しがあらわれている。

ボランティア精神が生まれてきたし、住民の人たちの環境に対する意識がでてきました。これは継続して行ってほしいと思う。もし 10 年経っても海岸に重油がこびりついているとしたら大変でしょ。それがあつという間にきれいになった。その後のケアを心の持ち方というか、意識を持ってやるのとやらないとでは全然違う。安島の部落というのは、重油をきっかけにもすごい関心が、意識が変わりましたわ。すごいですわ、あそこの部落の統一性は。自治会町以下ひとつの部落が結束して物事をやるという。それも環境への取り組みを。たとえば海岸の清掃なんてのは毎日やっています。それから里山を守るために結束してわれわれ環境団体と行動している。その取り組みの速さがすごいんです。それぐらい重油をきっかけに安島というまとまり方、考え方がうまれてきました。安島だけでなく、重油被害にあった海岸線のところまで、三国町梶、安島、米ヶ脇の漁民の方を中心に里山に木を植えたりする森づくりをやってるんですよ。特定非営利活動法人ドラゴンリバーと連携して。特定非営利活動法人ドラゴンリバーは九頭竜川の河川を保全する団体ですから、川を中心にやっていて、こちらは海にゴミが漂着するというのが悩みの種ですからね、それを回収して燃やしたりする活動を地道にやってるんですよ。それは重油事故の後そういう意識が芽生えて、前向きな取り組みというのは意識が変

わってきてると思うんですね。

阪本さんは「エコクラブみくにっ子」という主に小学生を対象とした活動も行っている。自然観察調査やその発表を通して、子どもたちに三国の自然を体験したり考えたりするきっかけをつくるものだ。子どもの頃の経験は年を重ねても残っていく根源的なものがある。阪本さんもそうだった。

昔はかばん放り出して自転車で山に入り込むのが第一の楽しみやったでね。昔の三里浜に防潮林があって、昔は手入れをしていたふわふわとした山なんですね。そのなかで、野生のウサギと仲良しになったというかね。ある日、野ウサギがいるもんですから、子供心にじーっと見てたんですね。春先だったと思う。そのウサギがなんとも野生感があって。野生のウサギをそんな身近で見れるのは珍しくてね、学校から帰ると、あくる日も、そのあくる日も、毎日毎日見に行ったんですね。ブッシュていうのか、山の中に木が生えてて少し中が窪んでいてね。そこから5メートルほど離れたところでじーっと座って、日が暮れるまで見てたことがある。それをずっと続けてたら、だんだんウサギが慣れてきて、あんまり警戒をしないようになったもんですからね、初めは歩いて5メートルまで行く間はちょっと警戒してるんですけど、止まって、座って、じっとしてるとちょっと近くまでよってきたりね。それはなんであっていうと、そこで繁殖してたんですわ。そこで繁殖をして子育てをしたのを見たのは、おそらく私ぐらいのもんじゃないですか。それをずっと20日間ぐらい通ったかね。それでなんともいえない可愛いらしさというか…。それで子ウサギを手を取ったんですよ。その感触のよさね。野生のちっちゃい子供を触ったことが。子供心に今でも覚えているんですよ。10歳くらいかなあその時分は。

そういうのもきっかけになってるんかなあ、自然との触れ合いの。そういう出会いがあったからこそ、続いているんだろうと思うよね。やっぱり今の子供もあんまり神経質になりすぎないで、もちろん時代が変わって危険なものもいっぱいあるから、もちろん心配はせないかんですけど、ある程度自然に触れさせるということがどれだけ大事かと思います。そうすれば、わたしのようなバカな少年が生まれてくるかもしれん。バカもたまに必要なときもあるんでね(笑)。

3. おけら牧場山崎一之氏に聞く

人物紹介…山崎一之さんは神奈川県茅ヶ崎生まれ、22歳で三国町陣ヶ岡に移り住んだ。2年の歳月をかけて石ころだらけの五反の土地に井戸を掘り、家を建て、開拓農業を始める。同じ大学に通っていた洋子さんと結婚し、以来夫婦で営む「おけら牧場」は、周りをめぐる林のなかでいつも鶏や牛の鳴き声に包まれている。牛の繁殖と飼育、地鶏の養鶏を軸に、無農薬の合鴨米や野菜を育てるこの牧場には、全国各地から農業を学ぶ人が訪れる。

山崎さんは重油が漂着したとき「高みの見物」を決め込んでいた。自分たちの手で回収できるはずがない。そういうことは行政のやることであって、自分たちにできることがあるとすれば、それは、回収後いかにしてこのような災害を未然に防ぐことができるかを考えること、防止するための組織を地元でつくることなのであり、重油回収に自分たちの出る幕はないと考えていたのである。

このように重油の回収から一定の距離をとっていた山崎さんはこの事故をどのようにみていたのだろうか。

重油回収に行った女の人が、洋子も含め体調に異常をきたすようになったんや。それでこれはどういうことやと。それで色々調べたら、環境ホルモンに行き着いた。だから、ナホトカがきっかけで海がどうのこうのっていうよりも、それがきっかけで体壊したりした人がなんでそうなったんだろうって発想になった。

そのころホルモン異常っていうのが問題になってたんや。何をしてたのかっていうと、男が女みたいになってきて、女が男みたいになってきてしまっ。これは何か原因があるはずだっ。同性愛に走るのってホルモン異常が原因だと予測をたてたんや。それでお肉が原因だと思った。どうしてかっていうと、お肉にするときに肉牛にみんな注射するんやけど、その中にはホルモン剤をつかうんや。女性ホルモンを。人間の中のホルモンのバランスが崩れやすいのは、肉食が原因やないかと。肉を通じてある人は女性ホルモンをとりすぎちゃうし、ある人はホル

モンのバランスを崩してしまうし、その結果、男が男であることがどっか崩れて女性化してくる人が全体の何割かはいるし、女性もバランスを崩してしまうのではないかと思って、データを集めてたんだわ。一般紙に鶏肉や牛肉について1年に1つか2つ記事が掲載されるんだけど、それを集めてた。

でも実際は予測してたようじゃなくて、化学物質が擬似女性ホルモンの働きをするものが多いと。それが微量でもホルモンに影響を与えて、ホルモン異常というものが精子に影響を与えると。精子が減少してるってことは僕らも知ってたんや。でもそれはホルモンの影響やと思ってた。でもそれがいまい環境ホルモンが原因だと分かった。化学物質が女性ホルモンの働きをしちゃって、それを摂ると一番蓄積されるのは、精子と卵子で、精子のところに溜まりすぎると精子の数が減っていく、卵子の中に入ると、受精はできても着床できない、流産とかが多くなる。子宮内膜症や子宮筋腫、そういうものが多くなるよと。なるほど、それが問題となっているのかって。

重油から揮発したガスのなかにもそうしたものが入っている。ものすごい量を吸ったわけだから。女性が。だから洋子だけじゃなくて、もっといろんな人がそういうした病気にかかっているんじゃないかとおれは思ってる。みんな自分が悪いと思っているから、それが原因でなったとは言わないけれど。後になってああ怖かったなってデータをみるとわかるんだけど。それまでひと月経つまでは、重油が危険だよって認識はなかった。

だからそれがきっかけで海がどうのこうのっていうよりも、それがきっかけで体壊したりした人がなんでそうなったんだろうっていう発想になって、環境ホルモンっていう方向にいったんじゃないかなと思う。

重油の回収には一定の距離をとり、事を冷静に見守っていた眼差しは、ナホトカ号の重油流出事故から環境ホルモンへと注がれていった。その先には今日の食育や健康という問題がある。「頭のいい人はそういうことを考えるのよ」と洋子さんがインタビューする隣で笑う。ひしゃくやバケツによる重油回収は理に適わないと判断した一之さんがいる一方、洋子さんは実に海女の友人を応援するため、重油に覆われた海を何とかするため、婦人会に呼びかけて重油回収に向かったのである。重油を回収することとしないこと、どちらが正しいか、どちらが善いことなのか。10年を経た今となっては、重要な問題ではないであろう。もし重油回収を正しい行為だとすれば、

大勢のボランティアが三国に向かう中、それとは逆の方向に車を走らせた会社勤めの住民は、並べて正しくなかったことになってしまうだろう。重油回収が讃えられれば讃えられるほど、彼女らは後ろめたさからますます事故から離れてしまうかもしれない。加えて重油回収が「正しい事」なら、ボランティアは善行だと考えることになる。ところで「善い事」はその度合いを増すごとにしばしば責務へと転化する。責務が習慣化し、各人を拘束するようになれば、それはボランティアの自発性という精神にもとることになるだろう。それゆえ回収という行為にも、ボランティアにも、そこに正しさも善も見出すべきではない。そこにあるのは各々の信条だけなのだから。事故から10年が経った今、問題とすべきなのは、三国に住まう人がそれをどのように風化させず次の一歩につなげていくかということではないかと思う。

「ナホトカ」に関わる一連の記憶は、今もって地域の人々にとって、すっきりした形では治まっていないように思われる。それはある人々にとっては思い出したくない古傷であるかもしれないし、別の人々にとっては良き思い出であるかもしれない。「ナホトカ」に対して様々な捉え方がある。それは当然のことながら、今日の三国の海が取り戻したその美しさは、黒き淵より出たからこそ尚一層その輝きを増すのではないだろうか。そのような海は世界中を探してもどこにも存在しないのである。人の手が加わるからこそ豊かになる里山があるなら、三国の海は現代における「里海」の先駆をなすのではないだろうか。しかもその手は全国から集まったのである。これを何らかの形で記憶することは、決して意味のないことではない。

地元三国にいたからこそ見えるもの。農家としてできること。農家だからこそ持ちうる視点がある。マスメディアに対する疑義、漁師に対する疑問。山崎さんの長女美峰さんの一言ではじまった、ナホトカ号の船首部分を三国に残そうという「Na+ホントカ!?プロジェクト」。それらは一貫して、中央と地方の経済格差のなか、この三国の地で生きていくにはどうしたらよいかという考えから発しているように思われる。

メディアっていうのは、一番ひどいところを流すから。野球だったら得点を入れたところをニュースで流すんやし。見たい人の欲望を満たすために、細切れにして流す。それで全部見たような錯覚をおこすように、重油が流れ着いて、ドボンと音を立てているところで、ひしゃくのような原始的なものでやっている、それもそれが悪天候の雨、雪、曇りの中で、おじいさんや女の人がやっていると毎日のように流されれば、ずっと重油が機械も使わずにおばさんや年

寄りがやっていて、すこしずつ若者が集まってきてますと報道されれば、見てるほうとしては、自分もボランティアできるんや。ただ見ていられないから、手伝おうかなっていう気になったとしても不思議ではない。それもメディアの力だと思う。半分嘘だけど、半分は本当。それでたくさん来すぎちゃって、地元としては、自分たちもボランティアしたいんだけど、ボランティアのボランティアをした。送り迎え、家の提供、食事の用意、宿泊のための自宅の開放をふくめて。自分たちも行きたいのに。

「ボランティアの人たちに対しては、良くぞ来てくれたと思う」。山崎さんは自宅をボランティアに開放し、現場までの送り迎えをしたのだった。しかしなぜあれだけの人が集ったのだろう。洋子さんは次のように語ってくれた。

「あれ、バケツとひしゃくで汲むで人が来たんやが。ボランティアの人が」。

一之さんも口をそろえていう。

「そうそう、あれ機械で掬ったら誰も来んて。ああ、事故があつて機械でやってるんだなって終わってしまう。あの雪の中でひしゃくで汲んで、バケツでリレーして運んでるから、あの一人におれもなれるなって。別に技術がなくてもお金がなくても、あそこに行けばその中の一人としてバケツリレーぐらいは手伝える、ということで来た人が圧倒的に多い」。

「やっぱり、誰でもできる方法を探さないと人は集まらない」と洋子さんが語る。

「しかもあれは、誰も人が死なない。こうした災害のときにみんなためらうのは、自分も死ぬかもしれないって可能性の中でみんなが行くから。そうやって行くときには覚悟がいるけど、重油のときには覚悟がいらぬ。良心がちょっとあれば誰でも参加できる」。「ゴミ拾いだけでも全然違う。みんなで拾うと」。

私にもあなたにも、彼にも彼女にも、誰にでも出来る「原始的な」こと。だからこそ広がりを見せた重油回収。もちろん、この事故には、重油回収だけでない様々なボランティアのあり方があった。しかしやはり多くのボランティアがテレビをはじめとする報道からこの地にやってきた

のは、「手による重油回収」の場面を見てのことだったのではないだろうか。バキュームによる回収もままならなかった重油を掬ったのは他でもなく人の手であった。数え切れないほど多くの手が三国の海を救ったのだ。ここに三国の環境を保全するうえでナホトカ号の事故から学ぶべき重要なことがあるように思われる。

一方、ボランティアに対する地元漁業者や観光業者の対応は疑問を抱かせるものだった。

ボランティアの人たちに対しては、よくぞ来てくれたと思う。こちらとしてはできるかぎりのことは応援するから頼むわっていかたちだけど、漁師のひとはあまり歓迎してないぞって。重油の回収は彼らが有料で請け負うから、漁ができなくても、重油回収で仕事があるんだ。その仕事をボランティアが来ちゃうととられちゃうから。仕事をとられてあがったりだって。

漁師は海を自分のものだとおもってるという感覚がある。ウニ、サザエ、アワビは放流するんだよね。放流したってほとんど死んじゃうんだけど、放流することによって、そのウニ、サザエ、アワビは自分たちのものだって主張するためにそういう行為をするんだよね。だから他のものがウニ、サザエ、アワビをとったりするとこれ（手首を体の前で合わせて手錠のまねをする）になってしまう。魚は回遊だから魚はヤスで突いてもいいし釣ってもいい。もちろんそれを養殖場の網の中でやったら問題だけど。ウニ、サザエ、アワビは海の者たちにとっては大きな財産だから、自分のものにしたいっていうのはある。けれどもそれでは子どもたちが育たない。子供たちが海に入る楽しみっていうのは、たとえばサザエにとってこんなの採れたよとか、アワビにとって潜りっこしたりだとか、家族が喜ぶのが嬉しくて採ってくるっていうのがなくなると、海に入る楽しみが半減してしまう。せめてひと夏に何日間かは子どもたちが海に入る日っていうのを設けてもいいんじゃないかっていうが、現実はなかなか進まない。

だから漁師のひとたちっていうのは、ずっと冷めてたし、観光のひとたちっていうのも、報道されるたびに自分たちのものが売れなくなると錯覚して、それも実際あるんだけど、でもきれいにしないことには仕方がないのに。どうやって商売するんや。自分たちで海をつくったわけでもないのに、みんな海はきれいです、なんて宣伝して、それが汚くなったら今度はそれを隠して、海で商売しようとしてるわけだから。それはおかしいと。海が汚くなったら商売どころじゃない。1ヶ月か2ヶ月休んでそれをきれいにし、きれいになったところで商売に力を入れるというのが普通なんじゃないかと思うんだけど。ともかくみんな1日でも商売を休む

と食っていけない。それは非常に差し迫った問題で、ボランティアに早く帰ってほしいと。ボランティアがいるとその取材が来て、まだ海が汚いという形で報道されると、海のものが売れなくなる、観光にも来なくなるということで、なるべく早く、4月20日にボランティアを切り上げさせた。きれいにしようと思えば、色んなところに残っている重油は回収することはできたんで、夏まではやりたいというひともいたんだけど、観光協会としては、クリーンアップ終了宣言というのを4月20日にして。天然のワカメを取れる段階になったら海女さん組合も安全宣言をして。それはもう非常に現実的な問題と、海をどう思ってるんだという問題がある。海を商売にしてる人間は、概して海をきれいにしない。あつて当たり前なんだ。利益を上げよう。利益が上がらなくなってくると隠そうとする。

漂着した船首を残すような運動もしたんだけど、みんなが隠そうとするからさ。ナホトカをもうなかったことにしよう。思い出すようなことはなるべくやりたくない。船首の一部は福井臨港の会社の福井埠頭にある。もうひとつ大きいやつは、広島からもってかえったやつを、小野先生がモニュメントにしたやつが、福井のどっかの鉄工所にある。でもそれは日々風雨に晒されて消え去っていくだけだ。だけどマイナスのものをプラスにしたということなら絶対観光地になる。マイナスのものを大いに宣伝して、それを克服したたかってサクセスストーリーにしてくってという発想はないんだよね。日本ではすごいと、世界中みたって、手でひしゃくで回収したってのは例がないわけだから。アメリカにもイギリスにもアラビア周辺にも重油が漂着したって例があるんだけど、撤去できずにそのまま砂にもぐりこんだままで、重油もブヨブヨの状態ですずっと残っているっていう。あれは自然のものだから、いつか自然がきれいにしてくれるっていうことで、みんな100年かかるか、200年かかるかわからないけどそのままにしとくっていう。

当時小学校に入ったばかりの子ども達は今や高校生になっている。彼らのなかではナホトカ号の事故の記憶はないに等しい。そんな事故は「起こらなかった」というのが現実になりつつある。しかしそれは三国という地域にとって、また三国で生活を営んでいく人々にとって、本当に幸せなことなのだろうか。むしろ、「マイナスをプラスに」する力は、三国の外からの視線を集めるばかりか、三国に住まう人々の力となるであろうし、ボランティアへの感謝を表すことにもなるのではないだろうか。

山崎さんは重油事故を通して環境ホルモンの問題に行き着き、安心な食とは何かを考える食育に取り組むことになった。そして落葉樹を育てる活動を始めた。

ナホトカで体験したこと、洋子が体壊して、環境ホルモンのことだとか、なぜいまの女性たちが流産しやすくなったのか、食育だとか、健康だとか、食べものと一緒に、化学物質の入っているものを食べているわけで、ピコグラムの単位で汚染されるというのがわかったんで、そうしたことが広まってますよ、という警告は地元に住んでるものからいろんなかたちで発信できると思う。重油のガスを吸って、体痛めたところからこんなことになるんだ、精子の数が減るというのもそれが原因なんだということがわかってきて、食育っていう方向にいま行ってるわけですよ。

いまは山が非常に荒れてるから、その環境をきれいにしないと海はきれいにならないよ。きれいにするのは落葉する木。どんぐりとかサクラの木。「きのこの会」みたいなかたちでやってる。「きのこの会」は山にボランティアにきて楽しいことをやりましょうっていうことで、山から原木を取ってきて、シイタケの菌をうえこむ。ひとり 10 本ぐらい原木をもつてると食いきれないほどのシイタケが 11 月から 3 月ごろまでにとれる。それを会費 4000 円ぐらい払うと天然のしいたけが食べられる。原木を育てるために下草刈ってきれいにしなきゃならないし、きれいにしたら遊べるし。松の木を切って落葉を植樹する。栗やイチョウをなるべく植えようと。秋になれば银杏や栗が落ちてくる。それと家で取れた卵と、シイタケで茶碗蒸しをつくる。そうしたことが流れ流れてきれいな水ができる。落ち葉がきれいにするから。それと落葉を植えて山をきれいにするのは、都会のゴミをみんな田舎にもってこようとしているから。田舎といっても、ちょうどこのあたりのような、ちょっとした山や谷のあるところ。だから山をきれいにしようというのは、産廃との戦い。田舎をきれいにしないと産廃でうまっちゃう。田舎の人口を増やさないと。金儲けだけに走ってるかぎりには環境はきれいにならない。

10 年という月日は、三国に住む人にとって通過点でしかないのかもしれない。あの事故の前にも後にも時間は流れているし、日々の生活は続いている。農家として、三国に住むものとしてできること、やりたいこと。それが自然環境を保全することになれば、新たな三国の魅力をつくっていくことになる。

10年前事故があったから、これというかたちでやっているというよりも、あれはひとつの体験なんだ。体験をいまにどう活かしているかっていうことで。それをきっかけで何かを始めたというんじゃなくて、それまでも何かをやった過程であれを体験して、それを飲み込んで、いまどういうふうなことをしてるのかっていう地平だから。みんながみんな10年前のことをひとつの体験としてそれぞれ活かしてる。失敗したこともうまくいったこともあるだろうけど、あんなところに生きてるってのはひとつやふたつはあるはずだから。

4. 坂井市議会議員田中千賀子氏に聞く

人物紹介…田中千賀子さんは地元三国町の宿で生まれ育った。三国高校を卒業後、福井の松下電機に勤めお子さんを出産。後に宿の区民館に勤め始めた。「区民館のおばちゃん」として働いていると地域住民のそれまで聞こえなかった様々な声が聞こえてくるようになった。婦人会の会長になったことからせっけん運動や給食問題にかかわるようになり、区民館に勤務してから 10 年後、町会議員に立候補し当選。ナホトカ号重油流出事故の際、目に余る町の対応のまずさから決断したことであった。三国町議 20 人中唯一の女性議員であった。町会議員を二期勤めたところで、町合併により現在は市議会議員として活躍している。

ナホトカ号の重油流出事故は三国町に一人の女性議員を生んだ。田中千賀子さんである。区民館職員から町会議員に立候補するきっかけとなった重油流出事故であったが、田中さんはこの事故が起こる以前から九頭竜川の保全や生活廃水の問題に取り組んでいたのだった。この聞き取りからは田中さんという一人の行動家を支える人々と、その支えから田中さんが他の人の活動を後押しするという三国町の人的財産を伺うことができる。

そもそもは、27 年ほど前に、初めて宿の保育所の役員をしたんですね。母親クラブの会長ということで。でもどんなふうにして会をすすめていったらいいか全然わかんないし、ちょうどまたま山崎(一之・洋子)さんと出会って、子供たちに収穫する喜びを知ってもらおうということで、じゃあまず畑を作ろうということで。ちょうど空いてたので、敬勝寺というお寺の畑を借りて、そこでサツマイモを植えて収穫体験をさせたんやね。苗から植えようとしても、肥料のやり方もわからないし、山崎さんに教えてもらったのが始まりです。

田中さんがサツマイモの収穫を子ども達と始めたのは、今から 21 年前のこと。三番目のお子さんが保育園に入り、園の役員になったときであった。山崎さんの家へ伺うといつも卵をいただいた。放し飼いにしている鶏の卵は、黄身も白身もこんもり盛りあがっていて美味しかった。「私

もこんな欲しい」と結成されたのが、「たまごの会」である。田中さんと同様、走り回る鶏の卵が食べたいという人が出資金を出し合い、鶏を飼ってもらっている。そして「ミルクの会」もつくった。仲間で出資して一頭の牛を購入。乳搾りや餌やりを各自分担して、牛を育てる。田中さんは殺菌を担当したという。相手は生き物である。お盆も正月も返上しての世話は大変で、その苦勞を知ったという。乳が出なくなった牛、卵を産まなくなった鶏は肉にして食べた。誰が首にかみそりを入れるのか、決めるのに時間がかかったという。

持ち前の好奇心と関心をもったことを実行に移す早さは、誰もが認めるところである。

それで会長をしたために、勉強会にでるようになったんやて。山崎さんらにも積極的に教えて教えてってことで。私は畑もつくったことないし、サツマイモも植えたことないしね。それで山崎さんらと話をしてるうちに、卵も食べるとおいしいし、わたしらもこんなほしいって言って、卵の会ができたんやで。いまやっと有機栽培というのが認められて 20 数年もたったねって話してたんやけど。有機栽培のこというと、野菜なんてできるわけないとか、無農薬なんてできるわけないって男の人たちに笑われながらやってきたんやけど、20 数年たってやっと今みとめられたんやね。なんでも 20 数年はかかるねっていった。私はそういうことにすごく興味があって、やっぱり有機栽培と化学肥料使った野菜を食べてみると、全然違うんですって、味が。

食品添加物とか、着色料とか、色んなことを山崎さんたちと勉強させてもらって、やっぱり生活を見直すきっかけになったっていうんかね。たまたま合成洗剤も、ちょうど私らも卵の会っていうのをつくってましたから、そこで 5、6 人でね、洋子さんたちと一緒に、合成洗剤はいけないね、ちゅう話を何となくしてたんです。

地元漁協からは、合成洗剤が普及して、洗濯機が普及した頃から実際にウニが取れなくなったと聞いていた。石油等からつくられる合成洗剤の使用を止め、天然油脂の脂肪酸にアルカリ成分を加えてつくられるせっけんを使おうと、講師を公民館に招いて合成洗剤の安全性についての勉強会を催しながら、「せっけん運動」をしていた田中さんだった。それゆえ重油が漂着した際にも、田中さんはそれまでも海を汚していたという認識があったのである。

重油が漂着した海は黄土色でね。それまでも自分らで毎日合成洗剤を垂れ流して海を汚してるのに、こんなにならんと気づかんのかのうやのうって。

ナホトカの重油事故があって、上からヘリコプターで中和剤を散布してたんやね。合成洗剤と石鹼のことが頭にあったもんで、やはりそれを撒くと海産物がとれなくなってしまうんじゃないかということで、私らは散布しないようにFAXを入れたんですけども。そしたら漁業者の方からも中止の要望が出て。

重油が漂着する以前から生活廃水で海はすでに汚れている。それが田中さんの現状認識だった。その後「せっけん運動」は、廃食油の回収から新たなせっけんをつくる運動となった。滋賀県の業者に粉せっけんを頼んだり、生ゴミやこぬかやボカシを畑に入れて野菜をつくったり、九頭竜川の上流にどんぐりの木を植えたりするなかで、様々な問題が見えてきていた時だ。重油事故が起こった。油回収船について問い合わせるため県庁に電話すると一笑に付された。ボランティア受け入れの際の町の対応のまずさを目の当たりにした。三国の海をきれいにするために来てくれているのにどうということか。区民館をボランティアに開放した。

「町会議員に出てみない？」

それは田中さんの熱心さと行動力を買われての一言だった。「給食や環境問題などは、町民からいうより、町会議員になってやったほうが早い」。この言葉も後押しして、「お金かけんと、みんなで持ち寄って」選挙戦が始まった。そして99年2月、町議に初当選した。唯一の女性議員であった。以来様々な提案をしながら市民の声を市政につなげている。

重油流出事故の際には予期せぬことに感動したと田中さんは振り返る。かねて三国は九頭竜川の河口にあるため、上流のゴミが下流に流れ、河口に溜まっていくことが問題となっていた。そこで上流から下流までの住民がともに環境を考えてみる必要があるのではないかと考え、交流会を開いた。1996年の11月のことだった。そして3ヶ月もしないうちに交流会で出会った人々と田中さんは再会することになる。ナホトカ号の重油流出事故に対してドラゴンリバー交流会（九頭竜川の保全活動をする特定非営利活動法人）や永平寺の生活学校の人たち20数人が3俵のコンシヒカリをもって炊き出しボランティアに駆けつけたのである。2ヵ月後、今度は田中さんを始めとする婦人会が永平寺にどんぐりの苗を植えに行ったのだった。

ある日、三国町崎の民宿「いそや」のおかみさんが田中さんのもとを訪ねた。以前に田中さん

は次のような話を聞いていた。おかみさんの出身は坂井市丸岡町で、かの地で米づくりを営む兄が里山にあるゴルフ場で散布される除草剤を心配して炭で水を浄化していると。こうした問題に関心のあるおかみさんが訪ねてきたのには理由があった。

故郷の山に木を植えたい。そのための力になって欲しい。おかみさんが訪ねてきた理由はそれだった。田中さんは、これまで婦人会やたまごの会、ドラゴンリバー交流会で様々な活動をしてきた。そして何らかの行動を起こすときには、常に応援してくれる人がいた。だからこそ実現が可能だった。おかみさんは故郷の山が荒廃して消えていくのに胸を痛め、何とか食い止めようと私に相談に来ている。今度は私が応援をする番だ。

しかし田中さんはそのとき仕事で手一杯だった。一方、おかみさんは「たんぼぼの会」をいう会を発足させ活動していた。田中さんはおかみさんに会の活動の周知と講演会を開くことを提案した。「森の再生」を実現するためには、まず森の大切さを知ってもらう必要がある。チラシを印刷し、講演会の場所を確保した。地元安島の漁師さんや海女さん、壮年会など多くの町民が会の趣旨に賛同し会場は盛り上がりを見せたという。田中さんの行動力はこのようにして三国町に伝播している。

5. 海女柚木博子氏と池田チマ子氏に聞く

人物紹介…柚木博子さんは昭和 15 年に三国町崎に生まれ、同じ三国町の人と結婚して長女が小学 6 年生になった頃から海女を営んでいる。池田チマ子さんは昭和 10 年に生まれ、結婚後米ヶ脇に居を移してから海女漁を営んでいる。重油災害時には米ヶ脇漁協の炊き出しと連絡係を担当した。

ナホトカ号の重油流出事故はちょうどイワノリの収穫時期にあたっていた。それゆえ海女漁への被害は大きかった。誰もが 5 年から 10 年は漁業ができなかったという。漁協組合員は総出で重油対策にあたった。この聞き取りからは資料に残らない重油流出事故時の状況と三国町の漁協組合の一端を窺い知ることができる。

米ヶ脇の集落には福井藩主松平侯が訪れた際、海女踊りと潜水をご覧に入れたという記録があるが、現在海女漁を営むのは米ヶ脇漁協で 22 名である。米ヶ脇漁協全体の組員は 44 名であり、海女さんが半数を占める。母親も海女だった人がほとんどであり、柚木さんも池田さんもその例にもれない。最近では定年退職した団塊の世代による組合加入が増加し、かつて多かった夫が漁師、妻が海女という夫婦はいま三夫婦だけだという。

漁は先輩が海女漁をしてるところを眺めて自然に覚えていった。ああしてこうしてと手取り足取り丁寧に教える人はいない。身内ならまだしも、相手が他人なら尚のこと。毎日見よう見まねで勉強したという。最初はサザエが 3、4 個しかとれなくとも、だんだん体が覚えてくる。徐々に深いところにも潜れるようになる。

米ヶ脇の漁場は、1 月にイワノリ、2 月終わりから 4 月いっぱいまではスガモが採れる。イワノリは 12 月終わりから 3 月いっぱいまで。スガモ漁は海が荒れておらず、スガモが生えている場合に限られる。回数としては 1 ヶ月に 1 回か 2 回。計 5 回もあれば最高だという。

5 月、6 月はワカメ。14、5 日海に入ったら、よく入ったほうだという。6 月 25 日からはアワビ、サザエなどの「ナデ」が解禁される。アワビ、サザエをなぜ「ナデ」と呼ぶかといえば、「むかし水中眼鏡とかなかったでしょ。手でこうして岩のところを撫でてきたでナデっていうの」。

水中眼鏡は日露戦争前後、北海道に移住した人々から始めて入手したもので、それまでは海中でも目を開け、海水のしみるまま作業をした。そのため、どんなに高価であれよい目薬があれば欲しいといわれたという。

7月21日からはウニが解禁される。取ってきたウニは塩水を汲んできて、自分できれいにシオウニにする。材料はウニと塩だけ。ウニやワカメは個人が地元や福井市にもっているお客さんに買ってもらう。毎年ほぼ同じお客さんだという。サザエやアワビは漁連が買いに来てくれる。漁協にて重量を測ってもらい、1ヶ月に1度銀行に振り込んでもらう。

9月15日からはアワビの産卵のため漁は禁止され、サザエに限られる。サザエも同様の理由から4月には採らない。これは米ヶ脇と安島漁協に共通するが、崎や浜地漁協とは異なる。ウニも7月21日から1ヶ月間採ってもよいが、2週間ほどしか採らない。「海のもんだし、自然相手やし。波があつたり雨が降つたり、そんなにいかれんです」。年間海女として海に入るのは60日もいかないという。

海女の漁は「出たところ勝負」。これだと思って引いたくじが当たるとは限らない。岩を起して獲物があるときもあれば、いると思って行っても「ハズレ」るときもある。だから昔で言うと、「あかしもん」。柚木さんや池田さんが子供の頃に、いちもんがし屋という駄菓子屋にあった小さな札や三角くじのことで、舌で舐めると記されていた番号が浮かび上がって、その番号と一致した箱の中にある飴や風船を手にする事ができた。ウニなども岩を起こすまでわからないから、「あかしもん」である。

今日はたくさん採れたとしても、明日には漁ができるかわからない。それゆえ「丘づとめ」のひとが多く、海女漁を「現役で頑張ってるのは年金の人ばっか」である。

海女漁は安定した収入が得られるものでないので、若い女性が就く職業ではないのであるが、それでも今年50代の女性が組合に入ったという。

池田 海女さんやるのは好きやから。海行こうと思う人は、入るのが好きなんです。朝つらいときあるでしょ。でも行って入ると、元気もらうんやて。

柚木 明日もまた行こうかなって。で明日雨降ると、あああって。大変なんやけど元気っていうか、ああ、色々考えんのやわ。サザエならサザエだけあるかな一って感じで。でつらくなったら潜らんと、泳いどればいいでしょ。

池田 他所の人が入っても、自分があがろうと思ったら時間見んとあがればいいし。もういいやと思ったら変えればいいし。それが自由だよね。それがいいんです。もう決められてこれだけ入ってないかんといわれると、つらいですけど。われわれみたいに歳がいくとね、だんだんと歳にあわせて仕事するでしょ。自分の気ままに入ってるというのが魅力です。

海女の仕事初めはイワノリ採りから始まる。天然のノリは岩に生えている。お玉に柄がついているような道具で掻きむしって採る。日本海の冬は荒波で、足を滑らせ、波にさらわれる危険もあり、寒風の中の作業は手足の感覚も失うほどだという。養殖ノリは生えやすいようにかまぼこ型の漁場をつくっている。

波が行きつ戻りつしないことにはノリは生えない。天然のものは、海中で岩が高くなっているところに塩水が弾いてノリの胞子が大きくなるという。雪が降ったりすると栄養になって大きくなる。いつもノリの生える岩は決まっているそうだ。

しかし天然ノリも 14,5 年前から、「磯焼け」によって岩に生えなくなったという。「磯焼け」、「海焼け」ともよばれるそれは、岩に白っぽい石灰のようなものが付着するため、「ゴミみたいな感じになって」、黒っぽい岩が白くなってしまい、また岩の表面が滑らかではなくなるため、ノリが生えなくなる事態をいう。原因は「どうしてかわからん。水温かな。自然が汚れたからかな」。加えて雨が降ると海に潜っても海中が見えなくなった。海が濁るからである。「ノッタ」、つまり波がざわつくという。水温も上がって海へ入っていても寒くないという。

そんな海の異変が気づかれたとき、重油事故が起ったのである。

柚木 もうスゴイショックやった。10年はだめやと思ったね。言葉もなかったな。ああ一つて言うたまんま。ほんとに10年はだめやわって、みんな思ったと思うわ。あれ見た人は。

池田 だけど1年できれいになった。

柚木 ほんでも1年できれいになったんやでねえ、あのときにはあ、ワカメ（漁に）入られたんやで。その年の1月に来たでしょう。いろんなボランティア来てちょうだって、油回収もしたし海女さんもしたし、ねえ、自然にもなんかうまくなったんやろうけども。海のなんかいろいろ、自然治癒力なんてのも、海にあったんかも知らんけど。

池田さんは当時を次のように振り返る。

えーと、6日の日かね。(重油が)来るかもしれんということで、ほいで米谷さん(当時の米ヶ脇漁協支所長)が、あ、こら見るとちょっと変や、ていうことで役員は7日からあれ(会議)しよっちゅうことで、あれしたけど。だいたい沖合はちょっと変やな。ここに「ちひろ」さんてね、民宿があるんです。そこから見てますと、どことなく、ずっと沖ですよ。ほんな肉眼でみえんようなんやけど、どことな一く海が違うっていうんです。米谷さんがいったんです。油がどっとくるんではないけど、変やで来るんやないんかな、っていう感じで、ふんなら、明日からきちっと見張りをしようかっていうことになったんです。

よその組合はどうなってるか安島のほうへ様子見に行こうってことになったんです。安島のいま油の碑がたってるでしょ、あの辺をずっと車で走って。見てたんですけど見えるものでないわね。そんで8日の日にあがったんかな?7日の日に出てお昼ご飯を食べに行けって行って、お昼ごはんを食べてる間に呼び出しがあった。「もう早よ来い」っていうことで。ほんで行ったら、もう来てた。双眼鏡で見るとナホトカ号の三角が浮いたり沈んだりしてた。本当に小さい三角で「どこにどこに?」っていう感じやった。遠かった。ほんと、こんな三角やもん。

当時は「米ヶ脇にあがるぞっていうて電話かかって、ほうや?とかいう話をして」、「塩屋のほう行けー、石川県の方行けー」と笑っていたという。安島への重油漂着から遅れること1日、米ヶ脇にも流れ着いた。

池田 8日の晩やったやろか。油が来たっていうて見に行ったら、あの若えびすさん(米ヶ脇にある旅館)の裏にあったんです。うちらは1日か半日遅かったんです。浜地も遅かったんやな。それで町や漁業組合がせなあかんちゅうかんじで、いっせいにみんな立ち上がったんやな。

柚木 もう自分らの海やで、自分らでどうにかしよって。はじめ、もう、ああもこうもいわんとやったねえ。油はひつついて、なかなかとれんかったんでないかな。

話し聞くと簡単に取れるもんでない。そういうことをやったもんですから。はじめは魚入れる発泡スチロールの大箱ね。あんなのにとっては、ドラム缶に入れて。

池田 自分でも、油なぶってると、ガスに酔うたみたいで。長いこと作業ができんちゆうて、マスクしてましたね。わたしらは現場には行ってないんです。二人はね。炊き出しとか。役場とか連絡とか。ボランティアの人にどこいってくれあっこいってこれっていう。町からの連絡と漁業組合からの関係の連絡と、ほいからボランティア、こっちへ何人ほしいとか、炊き出しの弁当は、飲み物はいくつかと。

柚木 おにぎりは町が出してくれてたんですけど。寒い時期でしょ、そんであったかいもん欲しいなっていうんで。

池田 よう豚汁食べたね。

柚木 明けても暮れても、豚汁。あとは豚がなくなってねえ。大根とサトイモとかそんなのでねえ。そんで2人が今日もじゃがいもの味噌汁とかかわいそうやで、油あげと豆腐にするか、とか。だってお金ないんでね、どっからもでてこんでしよう？ボランティアで救援物資が来るんですけど、ジャガイモ、大根、だいたいもらえるのはそんなもんやで。そんじゃかわいそうやで、すこし組合から豚肉の安いのが買おか。卵買おか、と。二人で50人ぐらいのボランティアに炊き出しした。

柚木 とにかく朝入って来る人のメンバーをチェックして、それからジャガイモの皮むき、大根の皮むきがあって、その間に連絡事項なんかがあって、11時30から12時ぐらいにみんなくるでしょ。それにあわせて。おにぎりは町がつくってね。それもボランティアがやったと思うけど。それに味噌汁とおにぎりふたつぐらい。ほんでも味噌汁けっこう喜ばれて、寒い時期やで。めっちゃおいしかったって。たくさん炊くでしょ？

池田 こんな大きな鍋でしますんで。

柚木 けっこう、「おいしかった」って言われて。男の人なんかおかわりしては。

池田 んで、毎日豚汁でごめんの。っていうけど、や、ほんでええよ！って。

柚木 お腹空くで、でっかいおにぎりふたつ食べたしね。食欲あるシスタミナあるし。毎朝7時半に集合したかな、わたしら役員はヨットハーバーの倉庫へ集まって、海の状況と作業の内容を5人で決めて。海が荒れたりすると作業できんで。5人で今日は作業するっていうと、各班に作業ありますよ、っていう連絡を入れる。8時ちょっと前になるとみんなでてきてちょうだる。波が高くなるとできんでしょ。そいたら中止ってなる。

池田 各区民館に待機してもらってそこで寝泊りしたひとも何人もありますね。

柚木 ボランティアさんは、ボランティアの組織っていうのがありますでしょ。その人らが今日は米ヶ脇行きなさいよっていうと、何時っていうんでなしに来ましたよっていう感じ。子供広場に集まって各支所へ届けられる。米ヶ脇に泊まってる人は、そのままヨットハーバーにでてくる。米谷さんなんかは、本部とか町とかにときどき集まったりしてた。夕方の4時ぐらいになると、支部長がぜんぶ集合して明日の段取りとか話してたみたい。作業は4時でおわったくらい。私らは早くて6時ぐらい。どうしても火焚くでしょ。見回って。燃やすんですけど、帰りの始末をしてきてくれんです。明るいときはわからんでしょ、暗うなってわかるんです。バケツもってって塩水で。

4月いっぱいかな。ナホトカをもってたでしょ。あれぐらいからもう毎日出ずに。3月いっぱい毎日でて、炊き出しもした。3月いっぱいボランティアは解散したんですけど、まだバラバラきてたんで、交代で見回りをして。三国の社協が義援金から買ったもので、コーヒーなんか取りに行った。町の福祉センターの下に物資があって。野菜なんかもそこでもらえた。

当時は道路もけっこう渋滞してました。安島は道が何本もあるでよかったの。動かされた。だから仮設道路もつくれた。あれ下に石を入れたやろ。1月のひどいときに。でもあんなのすぐ壊れるわな。あんなの何でつくるんやろな、すぐ壊れるのに、って言ってたらすぐ壊れたな。米ヶ脇だったら道が一本しかないし。道はボランティアさんがみんなカッパ着て歩いてたな。車でピストン輸送したときもあるし、自分で歩いたときもあるし。

当初、米ヶ脇にはボランティアが来なかった。米ヶ脇が漁港と把握されてなかったらしい。米ヶ脇にはサンセットビーチという海水浴場があり、ある日サンセットビーチにボランティアのバスが到着して、初めてボランティアによる回収を知ったという。それまでは地元の人、漁協組合、親戚の人が仕事を休んだり、土日の休日を利用して重油回収をしていた。「ほんで、わたしらんどこ誰も来んね。うちらどうなってるんや。なんでうちら来ん？」と柚木さんが米谷組合長に尋ねると「何もいわんがや」。ボランティアの要請をしてないから来なかったらしい。「何でいわらん。明日からいうてー」。あくる日から50人のボランティアが米ヶ脇の重油回収に来るようになった。しかし50人と要請しても50人のボランティアが来るわけではない。「100人くらい言うのと50人くらいきてくれるでしょ」。1月10日は過ぎていて、20日近くのことだったという。

ボランティアに対しては次のように語ってくださった。

柚木 いやほんと感謝やね。だってほら、自分の自費でこっちきてちょうだるでしょ。こっち来てくれば、ご飯だけは食べさせてあげれるけども。やっぱり来てあげようって思うんやから。ほんで若い子が多かったんや。大学生かな。

池田 若い人は力もあるし。仕事もばっばとしてちょうだるし。ほんとに助かりましたね。

柚木 学生やったかね。ずーっといてくれた人何人もいるの。

池田 ボランティアの中で親方っていうとおかしいけど、やっぱり上にたってちょうだって、来るとこうせいあせいって指導してちょうだる人が何人かは長いこといてちょうだった。

柚木 私は今度その人にこうしてほしいってお願いすると、その人が本部いって話してちょうだって。こっちの言ってることをちゃんと伝えてくれて。たとえば、初めしゃもじで掬ってたんですけど、小回りきかんようになってまうでしょ。だから門松を割ってたけべらみたいなのつくってほしいという、本部で若いボランティアのひとが竹べらつくってくれたし。ほかの支所へ必要分もってってくれたり、カップがほしいっていうとまた集めてきてくれたり。長靴も油が入ったりするとすぐ痛んでまうんやね。長靴も女の人が多いで、24か25センチぐらいの靴がほしいっていうと本部で集めてきてくれたりね。

池田 来るとリーダーの人なんかは、今日どんなことしてほしいってあとになって聞いてくれたしね。

柚木 こういう感じができはじめたのは、2月の頭ごろからかな。ボランティア来たのが1月のおわりやで。

池田 お互いに、こんなんねっていうと見てくれて。わたしらも話がしやすいしってことで。豚汁するのに、っていうとほんならこれも持ってきてあげるとかっていって材料なんかをもってきてちょうだって、っていうふうになったの。そのうち顔ぶれが決まってきて。リーダーの。3人ぐらいは青いカップみたいの着てきて。たのんますっていうとしてちょうだるんです。誰にでもいうんでなくその人にいうようになってったんです。

柚木 あんまり気い遣わんね。なんかもう、自分の息子みたいな感じで。問題はないな。うちらは。ほんとようしてちょうだったもん。親しくなって。明るる年ボランティア大会なんかに来たときな、何人かは、親しくなった人が来てちょうだって、わたしらもほんならってんで、安島でやってたんですけど、その人らも来るっていうのを聞いたもんで、顔見にお礼がてら行こうっていうて、感激して帰ってきた。

池田 東京から来なった人で、安島のボランティアのなかでも上に立ってしてなった人。三宅さんというたかね。若いね、学生よりちょっとうえかな。しばらくで帰るんやったのが、みんなに喜んでもらってるし、自分も役に立ってるっての、会社をクビになったか、なるか。いい感じの人で。

柚木 後になったらむちゃ親しくなったの、おはよーっていって、おはよーって。ほんな感じで。おばちゃんの顔見て元気出たーっていって。私らもあんたらの顔見て元気出たよーっていって。今日も一日がんばろーってそんな感じで。

池田 ほんとに、あの人らが「おっす」っていってくれとお、ほんとに勇気が湧いてきたわ。

柚木 オッスっていうてからね、おはようじゃない、「オッス」ってからさ。私らも「オッス」っていう。今度は「メスやぞ」っていって大笑いしてて。

池田 ほっとお、周りにはいるボランティアの人もね、こうやって私らがほのぼのこん

なことしてると、自然に和んでね。

柚木 米ヶ脇来ると楽しいって言うてくれた人、何人もいる。

池田 また今度来たら米ヶ脇来るわってね。

柚木 ずっと来てばかりでなくて、しばらく帰ってはね。親にどこにいるか言うてくるわって。

池田 うちはおかげさんでトラブルもなく和やかな。いい思い出ってゆうか。

柚木 けっこう楽しかった。楽しいって言うと変なんかな？朝起きてまたいくぞって元気が出て。よし頑張るぞーって感じで。

調査報告書を読んでいてもなかなか伺い知ることのできない、当時の状況である。冬の日本海という厳しい状況下での回収作業は、たしかに過酷なものであっただろうけれども、そればかりが現実だったのではなく、むしろその現実は今記録されたものを通して作りだされるイメージといえるものであり、ボランティア活動は多くの場面でこうした定量化されないコミュニケーションによって陰で支えられていたのであろう。重油回収の際には、こうした場面やさまざまな交流が多くあったに違いない。そして海はきれいになり、海女漁も再開できるようになった。

柚木 めっちゃうれしかったねえ。みんなほれはもう。はじめみたときに、びっくりして言葉もでんし。涙もでんし。そんな感じ。海入られるって言うたときに、もうみんな、けっこう喜んで泣いてたの。ほんと 20 万人も 30 万人も来てくれたやのボランティアの人が。あんな頃からボランティアっていうのが、団結力ができて、三国方式っていうのができて、こっちで勉強したのをあっちへもって行って。ほれから何かあったらボランティアでってのが根づいてきたんやの。

池田 今になってみると、苦労というよりこんなこともあったって感じで。それこそ二度とこういうことが起きてもらっては困りますけど。

柚木 ほんでも自然のこれっていうのもすごいねえ。回復力っていうんか。油を回収したのもあるけど、海中のプランクトンが食べてくれてたせいもあると思うわ。やっぱ取り尽くせんところがあるがねえ？岩の中に入っていたりとか。5月ぐらいにワカメとって、保健所で調べてもらったんやね。いろいろ何ともないかって。

そしたらもう完璧や。何ともないっていわれて、それならお墨付きが出たで、
入ろってみんなでワカメ採りした。

6. 三国芦原金津青年会議所長谷川啓治氏に聞く

人物紹介…ナホトカ号の重油災害事故において、重油災害ボランティアセンターを立ち上げ、後に設立された三国ボランティア本部で活動の中核を担った一人が、長谷川啓治さんである。三国で生まれ三国で育った長谷川さんは、若干 25 歳で不動産会社を立ち上げると同時に地元 JC に加入した。人脈をつくり組織学を学ぶことがその目的だったという。JC は日本全国の企業経営者をはじめとする青年で構成される組織。年明けの 1 月から役職がスタートするシステムをとっているが、折りしも 1997 年 1 月は長谷川さんが三国芦原金津青年会議所 (MAKJC) の理事長に就任したばかりであった。

重油流出事故を最もよく知る一人である長谷川啓治さんへの聞き取りは、重油対策が進んでいった過程を生き生きと伝えるものとなった。

初めて知ったのは 1 月 2 日。テレビのニュースで島根県沖に座礁したのを見て、「これは大変やな日本海が…」と思っていた矢先、どんどん福井の海に近づいてきて、「これはとんでもないことになるな」と。

長谷川さんは「野暮用」が多く家にいる時間が少ないため、子供たちと毎朝一時間だけ共通体験する時間をつくっているという。この日は毎年磯遊びに行っていた安島の海を見に行こうと車を走らせた。すると突然、目の前に信じられないような光景が広がり、絶句した。

厚さでいうと 30cm 以上の重油が、沖合い 30m ぐらい真っ黒で、臭いはきついし目はしばしばして開けてられなかった。「たいがいな事には、どんなことがあっても大丈夫」と子供たちに言い続けてきんやけど、初めてこれはだめだなって思った。「パパ大丈夫？元に戻るの？」と尋ねる子供に初めて言葉を失って、「大丈夫だ」ということが出来なかった。

どうしようかなと思ってた矢先、飛び込んできたのは地元 JC に入りたての三国の海産物問屋の

息子さんだった。このとき長谷川さんはどうやって海から重油を回収しようかと一人思案していたのであるが、彼の一言が長谷川さんにあることを気づかせたという。

「長谷川さん大変です。このままじゃ三国終わっちゃいます。東尋坊も終わっちゃいます。三国の観光もすべてなくなっちゃいます。助けてください」って言われ、「助けてくれって言ったっておまえ、どうするし?」と答えたんやけど、「だって長谷川さん JC の理事長でしょ。JC として何かできることないんですか」。その彼の一言でハッと気がついて「あっ、おれは理事長だったんだ。だとしたら自分ひとりでもできることもあるが、組織として、JC として何かできることを探そう」と JC の事務局へ向かったんや。

阪神淡路大震災の際にも全国の JC は現地に赴き、各種の活動をしていたが、後に緊急連絡網や組織の作り方などのマニュアルを製作していた。事務局には日本各地の JC から「人手が必要なら何人でも言ってくれ。物が必要ならどんなものでもいってくれ。お金が必要ならどだけでも集めてやる」という連絡が殺到していた。

「これはスゴイ！どんなことでも出来ると思った」。何をするにもその労力は想像することも出来なかったし、お金もどれだけ掛かるか分からないと考えていた長谷川さんだったが、各地の JC からの連絡を受けたときはこの支援があれば何でも出来ると思った自分がいたという。

そこで長谷川さんはまず町の災害対策本部に向かったのだが、ここでも全国からの電話対応に追われ、「人？要りません」「物？何も要りません」の状態だった。今度は県の対策本部に連絡を入れた。そしたら県は「各市町村からの要請待ち」との返事だった。「これでは動きようが無いんじゃないか?」と長谷川さんは悟ったのだった。

福井県には 10 の JC があり、それら全てが集まる緊急役員会が 9 日に開かれた。そこで福井ブロック協議会としては 1 日 200 人づつ動員する体制をつくり翌日から重油の回収作業に向かうことを決定した。このときの福井ブロック協議会会長が東角操氏であった。長谷川さんはいう、「ほんとの中心人物はあの人なのよ。あの人をまとめて立ち上げた張本人で、僕は三国の代表として一緒について当初の三国を立ち上げただけだ。あの人はその後すぐ広域的に走り回り、三方や加賀と立ち上げて行った。実行力と広い視野を持った人で、またそれがパワフルで 1 週間以上は一睡もしてないと思う。僕は 3 日目には初めて家に帰らせてもらったが、翌朝 6 時に現場に行くと

東角さんはまだ動いてたもん。日本 J C のバックアップと県内の J C の連携のお陰で、一早い組織の立ち上げや運営が可能になったと思う」。

その後、重油災害ボランティアセンターと三国ボランティア本部が設置される。

三国観光ホテルでの協議が終わり、ロビーで東角さんと MAKJC の役員の何人かで話していると神戸元気村の山田和尚さんから声をかけられ、次のような会話が交わされた。「おお、あなたたちが JC か」。「はい、そうです」。「どうするつもりや」。「重油災害除去本部というのをつくったので、明日から 200 人体制で重油を回収することにしました」。「そんなことしてる場合じゃない！今後ボランティアが何 1000 人と集まって来るから、ボランティアのコーディネーターになるべきだ」。「は？」と返す言葉もない長谷川さんたちに、山田氏は「コーディネーターが必要なんだ！」とだけ言って帰ってしまったという。

「コーディネーターって何をすればいいんやろ」。長谷川さんはどうしていいのかもわからなかったという。当面は予定どおり 200 人で海へ入ろうと、翌朝手弁当を持って三国観光ホテル横にある成田山に集合し現場に行った。ほとんどのメンバーは回収を始めた。しかし後ろを見ると数 100 人のボランティアが続々と集まって来ている。「こうしちゃおれんな」と受付をつくり、一番初めに受け付けたボランティアから「ありがとうございます。今日のあなたのボランティアですが、受付をお願いできませんか？」と、受入れ体制をつくり始めたのだった。

「次は何が必要なんや」。「昼食を準備しないと」と炊き出し係をつくる。「力のいる人集まって」と、集まってくる物資を仕分けするための係りをつくる。「パソコンができる人いませんか？」。リアルタイムに必要なものを発信するため、メディアルームを立ち上げる。数日経過しても、初日の映像が流されているために、いつまでもひしゃくが送られてくることもあったそうだ。このように組織は災害現場で必要に迫られるものから一つ一つ形づくられていった。

1 日目の最後のミーティングが開かれた。時計はすでに深夜 12 時をまわっていた。「いいですか？皆さん提案があります。って山田和尚さんが言葉を発した。必ずあの人は提案をするのよ。ボランティアは自由人の集まりなので、あれしろ、これするなは通じない事を知っていたから」と長谷川さんは振り返る。初日目、山田氏は災害ボランティアセンター長であった。ミーティングの終わりに「この組織にもう僕はいらなと思いませんか？昨日始めて JC に声をかけましたが、さすがは JC や。若いものの集まりだから、機動力・行動力もあるし、色んな業種の集まりだから何でも揃ってしまう。また行政とのパイプも強く、地域とのネットワークもある。地元中

心の組織として立ち上げるには一番いいと思ったから昨日声をかけました。阪神のときには1ヶ月かかった組織を1日で立ち上げた。もうこの組織には僕は要らないと思いますが、皆さんどうですか」。拍手をもって役職を降りられた山田氏に代わって、東角さんがセンター長、長谷川さんが副センター長となって組織が動き出すことになった。

当初は福井県中から集まってきた JC メンバーが中心となり組織を動かした。例えば受付はどういう役割でどんな事に注意して作業しなければいけないのか。改善すべき点は何か。こうしたポイントを1、2日目は2、3時までかかってマニュアル化していった。誰しものが連日現場に赴くことができるわけではないため、業務の引き継ぎが必要であったのである。1週間経って組織が整うと、JCは役職を退き、一般のボランティアにその役職に就いてもらった。長谷川さんを中心にした MAKJC は三国に残ったが、他の JC は海岸調査隊を編成し被害の大きな場所を探し、嶺南や加賀市にボランティアセンターの立ち上げに向かった。引き続いて長谷川さんの語るところに耳を傾けよう。

やはり場所によって立ち上げ方も違って来るが、行政はボランティアが動きやすくなる支援体制がいち早く築ければ良いかな。一般的にボランティアの受け入れは社会福祉協議会（社協）という組織が担当することが多い。三国にも社協があつて、最初、僕らは子供広場の一番奥で受付を始めていたが、社協さんも災害対策本部からの指示により、広場の入り口でテントを張りだした。すると職員の方がこちらに来て、「今後は社協がボランティアの受付しますから貴方たちはもういいですよ」って言いに来た。でも、僕らは無理だと思っていた。何故なら7、8人の職員さんだけで対応していたから。僕らは例えば人が100人来たら、その中の5人が受付をして、5人が炊き出し、5人が物資を、ってな考え方だから、たとえ10000人集まって来ても、その中の500人が受付してって感じなの。だから何人来たって関係ないよ。案の定（社協の受付が）直ぐにパンクしてしまつて、溢れたボランティアがみんなこっちに流れ込んできた。

夕方になったら、「ちょっとテントを隣に移させてもらっていいですか」って言って来たから、しめたなと思った。やっぱり、社協の力なくしては出来ないと考えていたから。僕らがいくら頑張っても、仕事もあるし、その時点ではいつまで続くのか判らないし。本当は社協がするのが一番いいと思った。でも、やっぱり行政的な考え方だと、枠にとらわれているから、

それだけは災害の対応には適してないと思った。だから初動の体制作りは自分たちでやろうと思っていたけど、いずれは社協さんに引き継いでもらうのが一番良いと考えていたから。

ちょうどその夜、僕と東角さんが社協の会議に呼ばれ「二つの受入れ組織を一つにし、三国ボランティア本部を立ち上げたい」、「ボランティア本部の代表は社協の会長にさせてほしい」との提案を受けた。これはとても画期的で願ってもないチャンスだ。住民へのメンタルケアなど作業が長引いた場合に発生する色んな事を考えると社協がベストだと思った。すぐさま「お願いします」。あれが一般のボランティアと行政がくっついた「三国方式」が確立した瞬間だった。

以上のようにして「三国ボランティア本部」が出来上がり、「三国方式」が確立された。災害時における「お互いの役割」を確認したことが、この組織と運営方式の誕生を可能にしたことが分かる。

しかし、今回の重油事故のような大きなボランティア活動の、小さな場面、場面では、即対応を迫られるために、その場で判断を下さなければならないことも多い。こうした判断を求められつつも、それを下すに時間がかかったり、下した判断の責任を考えてしまうのが行政組織であることは、今までにも見てきたとおりである。それでは、行政と一般ボランティアが一体となった「三国方式」において、両者の兼ね合いはどのようになっていたのだろうか。

そりゃもう本当に面倒くさかった。でもその頃なんて、とてもそんなこといってる場合じゃないんやで。とくに初日目なんかは1日に500以上の判断に迫られた。目の前に現れる問題に対して、○、×、右、左、みたいな感じでその場で答えを求められる。人に相談している時間も無い。結局、誰が判断するのか？

例えば、小さい例を言うと、テントを用意したくて、各学校や公民館に貸出しをお願いに行くと、学校長とか公民館長でも判断ができないんや。何でかっていうと、どこの誰かも分からんボランティアに貸して、壊れたら誰が責任をとるのか、重油で汚されたら誰がクリーニング代を払うのかっていうことで。だから判断出来ないの。

たとえば、1メートル先に指を切断した人がいる。10メートル先に腕を切断した人がいる。50メートル先には両足を切断した人がいる。誰から助けていいと思う？誰がどう判断する？例

えばの話だよ。誰も判断できないし、誰も指示できない。もし一番重症だからといって 50 メートル先の人を助けたとき、10 メートル先の人が出血多量で死んでしまうかも知れん。なんで目の前の人から助けないんだと言われるかも知れない。考え方がばらばらだし、誰もその場で決定を下せない。災害時に僕らボランティアが決定を下せるのは、おれの責任と判断で、おれが返事してるから。だから動きやすいんだって。だから、特に初動の頃ってのは、社協さんにも上があるし、勝手に動けないだろうから厳しい。そういう部分を一般人がすれば、いいんじゃないか？って。

一般のボランティアはナホトカ号を目指して集まってくるから、実際に作業をする場所までの移動が必要だった。手段の一つにトラックの荷台に乗せて運ぶ事の提案があった。僕は直ぐに警察署に向かった。「きちんと手すりを付けて安全対策を取るから荷台に乗せても良いですか？」当然に答えはノー。違反を認めることが出来ないんだ！と当たり前の事に気づいた。そのままセンターに戻ると「長谷川さんどうでした？」「う～ん、行っちゃえ！」。そうするしかなかった。

国会議員の方々も沢山現場を訪れてくれたが、ほとんどの方がパフォーマンスに感じられた。急遽カップを羽織ると、重油を塗ってはい！カメラ。みたいな感じで…。でもバスを仕立てて、本気で重油を回収に来てくれた議員もいた。なんとそのお方はトラックの荷台に自分から乗り込み現場に向かってくれたんや。

話がそれて行くので本題に戻すと、ボランティアと言えども、その分責任も大きいと感じた。でも何でそれが出来たかとういと、JC の力とか、色んな組織のバックアップがあったからだ。最も早かったのは日本財団。本当に初動の体制づくりから支持をしてくれた。

そのお陰で、最初から何も迷わずにコンテナを手配したり、電話回線引いたり、コピー機や備品を揃えることができた。最終的には全国の JC のメンバーに寄付を募れば、数千万くらいは何とかなるかなと思ったからできたんやけどさ。

このように、重油災害において迫られた一つ一つの対応には、ボランティアの責任で下す判断が大きな役割を果たしたのだった。というよりむしろ、ボランティアという立場でなければ判断することはできない場面が多く、その判断がなければ事態は進んでいかなかったとっていい。

そうした例は他にもある。たとえば、悪天候の為に初めて三国での重油回収作業が中止になっ

た1月15日。それでも続々と集まるボランティアを、砂浜のために悪天候でも回収作業が可能であった隣の鷹巣海岸に行ってもらうことにした。そこでは既に三国のボランティア本部で運営法を学んだ福井市の職員が中心となり鷹巣にもボランティアセンターが立ち上がっていた。とても画期的だと喜んでいて矢先、昼前にボランティアの受け入れが急遽ストップされてしまった。理由を聞くと予定していた人数分しか弁当が用意していなかったからだという。また鷹巣の漁師さんから長靴やタオルが足りないと聞いて、直ぐに物資を輸送しようと指示すると、物資の受け入れを担当していた社協から「これは三国に貰った物資だから」と輸送を拒否された。日本海にももらった物資だと主張するも譲らなかったが、長谷川さんはトラックの幌にそれを隠して持っていたという。

次のような話もある。少しでも回収作業の効率を上げるために、調査隊を結成し日本海側の重油の汚染状況を把握していると、三国町の北側に位置する芦原町波松への漂着が増加してきたことが判り、ボランティアから回収作業に入りたいと連絡が入った。念のため長谷川さんは芦原町役場に行き、総務課長に「こっちの方が重油の漂着がひどいので、回収させてもらえませんか」と確認に行った。「それは困ります。芦原の方は芦原でします」と断られた。ボランティア本部に帰り「長谷川さん、どうでした？」と尋ねられたが、「う〜ん。行っちゃえ!」。ボランティアだから何でも許される訳では無いが、この際も自分が責任を取るということで、長谷川さんは重油回収を指示したという。

組織ばかりでなく、地域にも様々な「垣根」がある。重油の回収作業は海岸に面した5つの漁協単位で行われ、各漁協からの要望でボランティアやドラム缶を配置するのだが、早く作業が進んだ漁協からドラム缶が足りなくなったと連絡が入ったため、隣の漁協のドラム缶を移動するよう指示すると、「これはうちのドラム缶や。持っていったら困る」と断られたという。海は一つに繋がっているのに、と思いつつ初めて見えない境界線を感じたという。全ての場面で「ボランティアの自由」が保障されていたわけではなかった。

ボランティアだからこそ可能となった対応があった。そして、このようなボランティアによる判断が可能だったのは、様々な団体の強力な後押しがあったからであった。ボランティアにはボランティアの、企業には企業の、行政には行政の、「だからこそできる」ことがある。

ひとつだけ共通して言えるのは、どんな場面であれ、それぞれにできることが違う。個人とし

てできること。組織としてできること。企業としてできること。行政としてできること。それぞれが全く違って、ただ、重油が流出したから油を掬うだけじゃないってことを、今回大きな問題として教えられた。

日本財団・県民生協・山崎パン・モトローラ社・フジカラー・日本航空・マクドナルド・その他、本当に数え切れないほどの組織・企業・団体からの支援があってボランティア組織の運営が可能となった。

当初、本部は携帯電話すら繋がらず連絡もとれなかった。モトローラ社やアマチュア無線協会にお願いの連絡が始まった。記録用のカメラが必要となり、フジカラー社にお願いの電話を入れると快く使い捨てカメラを送ってくれた。

最初の頃はこちらからのお願いすることが多かったけど、後からはそれぞれの企業が自分たちが出来ることに気づいて。例えば JAL なんかは、飛行機を利用して何が出来るかを考えて人を運んでくれたり。そうやって色んな企業が気づいてくれるようになった。いままでは、自分がすることしか考えてなかったのに、「企業としてできることは」って。大きな変化だった。山崎パンさんはパンをたくさん持ってきてくれたり、生協さんは食材をくれたり。それが「だからこそ出来ること」やと思う。

真っ先にテントが届いたのは金津町商工会と金津技研っていう、JC の先輩からだった。何でそうやったか？三国町内にも何 100 張ってテントがあるのに、何で隣の隣の金津町から来たか。途中で三国のテントが集まりだしたときに、あれはちょっとどかしてくれって何人にも言われたけど、現実を残しておきたくて、おれは敢えてどかさないって。僕も三国の住人やよ？でもあれが現実だって分かってもらいたくて。最後まで置いておいた。

日が暮れるにつれ電気が必要になって。おれは建設業もやってたから、すぐ北陸電力に連絡を入れた。「実は今、ボランティアセンターに電気が必要なんや。直ぐにひいてくれ」。「はあ？そんなもん今から行ってひけるわけないやろ」。「何いってるんや。北電さんは、初日目から真っ白のスーツを纏い、真っ黒になるまでいち早く重油を回収した。それを見て本当に凄いなって。でも今北電に求めているのは、油を掬うことじゃないんやって。電気をひいてくれることなんやって。それが誰にもできなくて、北電さんにしかできないことなんよ」ってガンって電話切った。そしたら一時間後に電気ついたよ。すごいやろ？そういうところからみんなの意識がドンドンと変わってきた。もう一步一步ひとつひとつやよ。新明和さんは移動式のトイ

レや厨房付の車両を持ってきてくれたり、いろんなどこから。いっぱいあるけどさ。

報道には報道関係にしかできないこともある。NHK を最初に訪問した際に言われた言葉が、「ボランティアのなかにも泥棒さんとかいたりして、大変だったでしょ。」だって。こいつらボランティアをバカにしてるのかって思い「NHK にも数 1000 人の社員さんがいれば、中には 1 人くらい悪いことをする人がいるのでは？」と、言ってやったよ。「失礼しました」って。「そんなこと言ってるぐらいなら、現場でも一番いい場所を陣取っている NHK だからできること、NHK しかできんことをやったらどうや」。って言うと流石は NHK だ、後に緊急災害情報の体制を整えてくれた。

ホンダプリモも早かった。砂浜を荷物や重油を載せて運べる作業車をもってきてくれた。凄いとおもわんか？いままでは自分で回収することしか考えてなかった。それが企業として考えてくれた。サーファー協会も、岸壁とかみんなが回収できないところを回収してくれたり。

琵琶湖の湖畔に 5 つの町があって。5 人の町長さんがセンターに入ってきて雁首並べて「何かできることないですか」って聞いてくれたの。本気やなって思ったから、こっちも本気でお答えした、「ありがとうございます。でもいま人手的には体制が出来ているので、いま町長さんに分かっていたきたいのは、ボランティアっていうのがどういう生き物で、災害が各地で起こった場合にどういうふうに活用できるかを学ぶため、体験するためにスタッフとして職員さんをよこしてみたら、たぶん役に立ちますよ」って。それを聞いた福井市の職員の方がきて、どうやってたちあげていいかわからないので、組織図やマニュアルを写させてほしいって。大事なのはマニュアルみることじゃないの。場所によって違うし。うちらも阪神淡路大震災のマニュアルや組織図を取り寄せて、バンとつくって貼り出したけど、1 時間で変化していった。もちろん場所も違えば、戦う相手も違う。「あ、そういうもんじゃないんだ。頭で考えてるから進まないんや。何も無いところから進めたほうが早い」と思ったから、みんな張替えてしまっ。いくらマニュアルを写して行っても、ほかでは間に合わんかも知れんよ。それ位なら、スタッフとして派遣して現状をつかんだ方が良くって言ったら。毎日 2、3 人ずつ来てくれたよ。

長谷川さんの一言が、企業や組織に「自分たちは何が出来るのか」、「自分たちは何者か」を気づかせたのだった。この点は重要な事柄に思われる。というのも、「自分たちは何が出来るのか」

とは、つまり「自分たちは何者か」と問われているのであり、それによって組織は災害活動における自らの存在意義を確認したばかりでなく、広く社会にとっての存在価値を自覚したように思われるからである。このことは組織に限られない。重油の回収に集まったボランティア一人一人に対しても共通して考えられることではないだろうか。

阪神淡路大震災のときに日本にも、ようやくボランティアの芽が出てきた、と長谷川さんが言う。ナホトカ号の重油回収は命に直接関わることでないため、その芽をどのように成長させ、各地で花を咲かせてもらうか、長期間ボランティアで来た人たちにどのように成長して帰ってもらうか、という意識を持っていたという。2000年9月、東海地方を集中豪雨が襲った。このとき、重油災害にボランティアで駆けつけた人々で結成した「名古屋オイルバスターズ」が「名古屋水害バスターズ」となって活躍した。そして2004年7月には福井豪雨が起きた。このとき長谷川さんは山田和尚さんのポジションを取った。「みんなの動きを見ながら、こうしてみたら、こんな方法もあるよって」。1日目、2日目は福井市の日赤前のセンターへ。ある程度立ち上がったのを見届けると、美山へ、今立へと車を走らせた。ほぼ一週間位でどのセンターでも機能が立ち上がっていた。

しかし初動の頃はどの組織も混乱し、どのように対応したら良いか判らない。例えばセンターの位置を案内するため、福井のICからの看板が必要になった。目の前にあった看板を設置してはと県の社協に提案すると、「これは市の社協の予算で作った看板だから…」との答えが。「まだそんなこといつてるのか」と一括したという。行政とボランティアとのパートナーシップはこれから長い時間をかけて築かれていくものだろう。

ボランティアというものについて、長谷川さんは次のように語ってくださった。

僕は最終的には自分の為だと思う。あとは、出来ることを可能な範囲でチョットだけ無理をして、一歩だけ踏み出せばいい。無理をしても続かないから。結局は世の為人の為といいながら全部自分の為だと思う。集まってきたボランティアを見てそう思った。だからこそ、変な話、満足して帰らせてあげないと成長しない。誰でも基本的に人の笑顔や喜ぶ姿を見ると嬉しいやろ。それで心が豊かになったり、幸せな気分になれる。とにかく難しく考えないことだ。例えばエレベーターの前でボタンを押せないおばあちゃんがいたら、押してあげたいって思うやろ。そう思うだけでも立派なボランティアだし、でも一歩踏み出しボタンが押せれば、また違うこ

とが出来るようになっていく。

阪神淡路大震災の後、仮設住宅が沢山できたやろ。そこの住民代表で林さんという方がいたんや。白髪のおじいちゃんだった。震災後まだ2年目だし、復興の最中なのに、バスを何台も仕立てて、仮設住宅の人達を引き連れやってきてくれた。「大変なことになったね」と声を掛けてくれた。「いや、とんでもない。神戸の方がまだまだ大変なのに」って話をしたら、「長谷川さん、震災復興には、確かに10年や20年かかるかもしれない。数100億円以上かかるかもしれない。でも時間とお金があれば元に戻る。失った人の命はどうしようもないけど、それ以外は殆んど取戻せる。でも環境だけは一度失うと元には戻らないんだ。いま守らないと何100年先の生態系にまで影響するかもしれない」って言われた。あの一言に寒気がしてさ、「あー、そうなんや。この目先の油だけじゃなくて、周りの生態系や何100年先のことまで考えたら、おれらのしてることはとんでもないことなんや」ということに気づかせてくれたのが林さんやった。

重油漂着当初、長谷川さんはあるJCメンバーの一言によって「自分がJCの会長だと」気づき、組織として出来ることを探した。そして長谷川さんの一言は様々な個人や組織に「それぞれに出来ること」を気づかせた。ボランティアとはこのような相互関係のなかで自己の社会的意義を発見していく過程なのかもしれない。

7. 大湊神社宮司松村忠祀氏に聞く

人物紹介…松村忠祀さんは三国町にある式内社大湊神社の 35 代目の宮司である。大湊神社は付近の海を守る海神様が祀られており、1200 年以上もの歴史をもっている。現在福井市立美術館館長。ナホトカ重油流出事故の際には「船を引き上げ保存する会」の代表を務めた。

九頭竜川をくだる淡水が対馬海流と交じりあうところ、雄島がある。この島に川と海との交流がぶつかっては散り、運ばれた森の栄養が巡るように行き渡って、アワビやウニなどの豊かな海幸をもたらしてきた。古くから海女や漁師にとって心の拠り所のようなこの島は、今も三国の、とりわけ安島地区の住民にとって欠くべからざる場所である。人間にとってのみならず、海の彼方から渡る鳥にとっても、タブノキやスダジイの生い茂るこの島は、翼を休めるための格好の休息地であり、ここに降り立っては川を眼下に山を越えて行ったのである。多様な生が営まれるこの島に、あのナホトカ号の重油は流れ着いた。雄島を代々守ってきた大湊神社宮司、松村忠祀さんにとって、それは我が身に起こったも同じことだった。重油回収にあたったあの事故から 10 年を経た今、青々と光る海の前で話を聞いた。

地球温暖化とかいわれてきたんやけど、そういった色々な問題が、今きわめて目のまえに見えるのやね。水温が上がったりやね。そういう地球の先々のことが。何が一番悪いかといったら、人間が悪いのでね。人間が文明を持ったことによって起こったのやね。善い方に行くんでなしに、そうじゃなしにとにかく自分の利害にくっつけてやね。都合のいいことばかりしとるわけですよ。「生きとる」ってことを忘れてやね、利用できるもんは全部利用してしまおうってね。そういう発想がナホトカ号のタンカーというああいう形で出てきたと思うんですよ。そういうものをさらに検証しながら、もう二度とあってはならんって。地球の反対側であっても、隣のことのように考えなくてはならんっていうことでね。やっぱり地球は小さいし、いま月に周回衛星の「かぐや」が飛んでますがね、あっから映してくる映像なんかみるとね、ああいう青がいつまでもあってほしいと思うわけですよ。でも現実の問題としてなかなか分からな

い。そういうことも含めてナホトカの問題でしてね。僕らの2代か3代か4代で地球がだめになってしまうかもしれないですよ。そういう風にならないようにナホトカの教訓を地球全体で考えていかなきゃいかん。南極の氷が溶けていくっていう映像も、文明の悪いほうがああいうものを生んだんだと思うし。使えるだけ使って。使ってもいいけど、ある程度地球の生態とも折り合うように考えていかなきゃいけない。

だってもう、宇宙から考えたら地球がどれだけ小さいか。そんな青い星がいくつもあるわけじゃないんで。銀河系にひとつしかないかもわからんし。いくつかの銀河系の中にひとつしかないかもわからんし。それがまだわかってないわけだし。でも現に地球はひとつなんだから。生命体をもったね、生態系をもったもので。海そのものが人間そのものだし、花そのもので、雑草そのものであるしね、昆虫そのものであるわけですから。雄島そのものであるわけですから。もっと自然を大事にしていくような方向へ人類全部が知恵だして考えなきゃいけない。学問もそうだし、生産する人もそうだし。いろんな人間の仕業がいいほうに向かっていってほしいと思う。そういうことを警鐘したのが、あのナホトカ号のタンカーの油やと思うんですよ。今決していいほうに向かってませんもんね。地球は。それは人間の仕業でないかもしれないけれど、たぶん間違いなく人間の仕業だと思うんですよ。海が自分と一緒にだというのが肌身でわかっているのが、三国町であるし、福井県であるし、一番影響受けて、力をもらって、みんな関心もったのですよ。それが役所のイベントとしてみんな消えていってしまうというのが悲しいとこなんです。そう思うとね、ここへ着いた油などの資料を全部取っておいてね、資料を作っておかないかんのですよ。そういうことも全部消しちゃって、ないようにして、眼から見えないようにしたね。そこが先ず間違ってると思うんです。船なんかどかさんとな残しとかなあかんのですよ。

ナホトカ号がもたらした重油は地球の生態系を破壊する現代文明に対する警鐘だと松村さんはいう。地球はひとつの生態系であり、海も人間も昆虫も動植物もひとつの生命なのだから、人間はそれをただ利用し消費するのではなく、そのなかで折り合いをつけていかなければならない。そのために何ができるのか。松村さんは、船首を残すという「Na+ホントカ!?プロジェクト」や、重油漂着の翌年は雄島で文楽を催して来た。

自然が非常に早く回復したもんですから、感謝を込めて自然に対してありがとうってことで、やったんですけどね。海の力って凄いな、海の神って凄いなってことで。神ってのは海の生命体だと思うんですよ。そんなの別におるわけじゃないですし、生き様というんですか。大自然の力っていうのは凄いなと。雄島が茂っとるのは、生命の塊みたいなもんですから。もう二度とそういうことが無いようにっていうような意味を込めての浄瑠璃やったんですね。それには平知盛が一番いいんじゃないかってことで吉田勘緑さんがやってくれたんですよ。

船首部分を残すというのも僕が代表になってやったんですけどね、もう何もできなかった。あの辺吊っというたらいいんじゃないかって思ったんですけど。そんないいことはなかった。私はね、あれは善いもんでないからここあがったんだと思います。善いもんだったら石川行っただけいいんだから。こっちで悪いものはあっちいったら尚悪い。ここで回収できたってことがかえってよかったんじゃないかと。回収できないかも分からん。場所が悪いから。私はあの場所はね、石川よりいい場所だったんじゃないかと思う。

残すことってのは自分らが歴史を消さないことやね。そんなの二度とみたくないって目のまえから消してしまおうっていうかもわからないけど、私それは残しておいて、二度とこういうことが地球のどこに起きててもですね、大丈夫なように、経験を伝えてやると。早くこうしなさいとかこういうことをしましたよという事を伝えてやると。それしかないんじゃないかと思えますね。残して、そこで重油文明に対する予備知識を加えて研究所つくるときゃいいんですよ。ナホトカ号の経験で得たものを中心にして研究施設をつくって。それがアラビアやイスラムにあらうと、イスラエルであらうと、イギリスであらうと、事故がおきたらすぐ情報を送ってね。サンプルを置いておいてね。そういうものも一切無視してしまった。僕はこれ福井大学に問題あると思う。学者としての理念っていうものがどうだったかっていうね。学問でそのためにあるわけだね。こりゃ残しておかないかと。どっかの大学で研究室をつくるとかね。何かそういうものがあってもよかったと思う。そういう盛り上がりはなかったんですね。今考えてみると、これは福井だけの問題でもないんで、日本全国であつてもよかったかなと思う。それは10年経ったからいえることかもしれないですね。

この次同じようなことが起きたときにですね、できるだけ地球に影響を与えないような哲学というものを蓄えておくと。また一から始めるんじゃなしに。

だって、水平線をいくつか越えていけばすぐそこに大陸があるんだもん。あっちのほうに(事

故が) あるかもわからん。そういうときにデータが行って 10 年経った後の考えが伝わっていくその拠点に三国湊があればいいと思います。

一貫して重油流出事故を次の時代へとつなげていこうとするのは、現在がそこに至るまでの歴史によって初めて成り立っているという考えがあるように思われる。過去から学ぶことなくしてしまえば、何によって未来を描くことができるだろうか。この事故によって三国は未来のための貴重な財産を得たのである。現に、今三国の海がきれいなのは、ボランティアによるところ大きく、日本のボランティア精神は阪神淡路大震災で培われたのである。

ボランティアが集まったのは、大震災があったからでしょうね。日本に国民全体が困ったところに行ってお助けしてあげようという。そういう意味で僕は阪神大震災があつてあれが非常に助かったと思う。ボランティア精神がいくらか力貸してくださって、そういうことは当然みんなでも回収せなあかんと。それは阪神大震災の賜物やと思うんです。でも日本のボランティアはまだしっかり根づいてないですね。本当にヨーロッパなんかの場合と違うと思うんですが、いまは過渡期かもしれないですね。「してやった」っていう心が強いんですね。日本人は。でも本当は自分の問題でもあるわけだから。自分にも火の粉がかかってくることもあるわけですから。

だけどそういうものも含めてこれからバラバラにならないように、国が何かしてほしいとおもうんです。なんかそういうものが活用できるように、大変苦勞したことが、活かされていくような制度があつていいと思うし、研究機関があつていいように思います。

では三国町にとってこれからどのような活動が求められているのだろうか。

ナホトカの問題は起きてしまったわけですから、それを活かしていくように考えていかないと。海がこれ以上痛まないように。そういうことがこの村にとって大事です。

そこでまず三国の川が大事やと思います。生活廃品みたいなものが、下に流れていって日本海に溜まっているんです。網を引くとね、なんかビニールの袋があつたり。漁師さんがおっしゃってる。カレイなんかおる砂地のうえにビニールのような袋がいっぱい入ってくるっていう

んですよ。エビが入らんこなそういうものが入ってくるっていうね。そりゃそうでしょ、毎日毎日とまることなく流れてきとるんですから。そりゃやっぱり陸の人が協力しないかんのです。それはやっぱり三国湊が通ってくんだから、当然そのなかの文化として考えたらいいんじゃないかと。松岡だったり、永平寺であたり、武生であたりのゴミが全部流れて入ってくる。だから自分の足元から気をつけていかないかんことがいっぱいあるんじゃないかと思って。重油は大きい目で三国に災害をもたらしたけども、目に見えん石油製品がとめどなく休みなく流れてきてる。それはみんなぼつとほかすからですよ。あれらも目に見えんけど減ることなく消えることなくどんどんどん海の下に溜まっていく。それはやがて生態系をつぶしちゃうんでしょうしね。海だから大丈夫だと思ったことが問題なんで、たいしたものじゃないんで。それを市民が確実に知るのが青い地球だと思うんですよ、そんな大きいものじゃないわけだから。そのために「かぐや」があがってくんだと思うんですよ。月から地球を見るのにとってもいい鏡みたいなものだと思うんですよ。水なんかもそう簡単に増えるもんじゃないけど1ミリも増えると地球全体では大きいものです。そういうものと切っても切れん関係に重油の問題はあると思うんです。

昔はこころへん伝馬がいっぱいあったんですよ。みんな帆を張っていくんですよ。昭和40年ごろまではあったですよ。ほいで夜中に餌つんでいかないかんわけですから、カンテラもって漁港まで降りていくんですよ。ほいでエビとりにいくんですよ。その採り具合によって縄をはって、いろんな仕掛けをするわけですね、アマダイがつれたりするんですよ。

いまほとんど壊れてしまったね。屋根もこちらは手で焼いているからやわらかいでしょ。全部それなくなっちゃったね。あちらは機械で焼いてるから硬い。自然の石を敷き詰めたくねくねした道も、すべりやすいからといって変えた。とたんに風情がなくなった。その次は道路が敷かれる。それが文明やおもう。文化と文明との違いはそこやおもう。本来観光で行くんですよ。やったらこういうのを残しておかないと。それは観光でどんなことかっていう哲学を持ってないからだと思う。知っとるというだけで思想がない。

ウニを通して海を食ってるんですよ。僕らは。そのへんのことが昔の人は科学もないけど道理を知ってるんですよ。本当はタンパク質ならなんでもいいんじゃないのってわけじゃないと僕はときどきおもうんですよ。

伝馬船も川にいったけど川魚はとらない。自分の範囲があるんですよ。その範囲の中で知恵

を持ってると思うんです。能登の人が丹後にいたり、逆もあって。それは海の民です。炭焼きをきちんとしたと思うんですよ。いまは自然を壊してるんですね。いま鳴いたのは何という鳥だ、とかね。今あっこに鳥がいますでしょ。イソヒヨドリ。あれが青大将なんか蛇の習性をしってるんですよ。そういうものから知恵を得たりね。船酔いしないために松の新芽をたべたりね。それは知識じゃなくて知恵だと思うんですよ。やっぱり知恵をもっていけないと。仏教の哲学なんて知識じゃなくて知恵ですよ。両方使えればなおいとおもいます。ナホトカ号も知恵として次の後世につたえていく現代人としての責務があると思う。

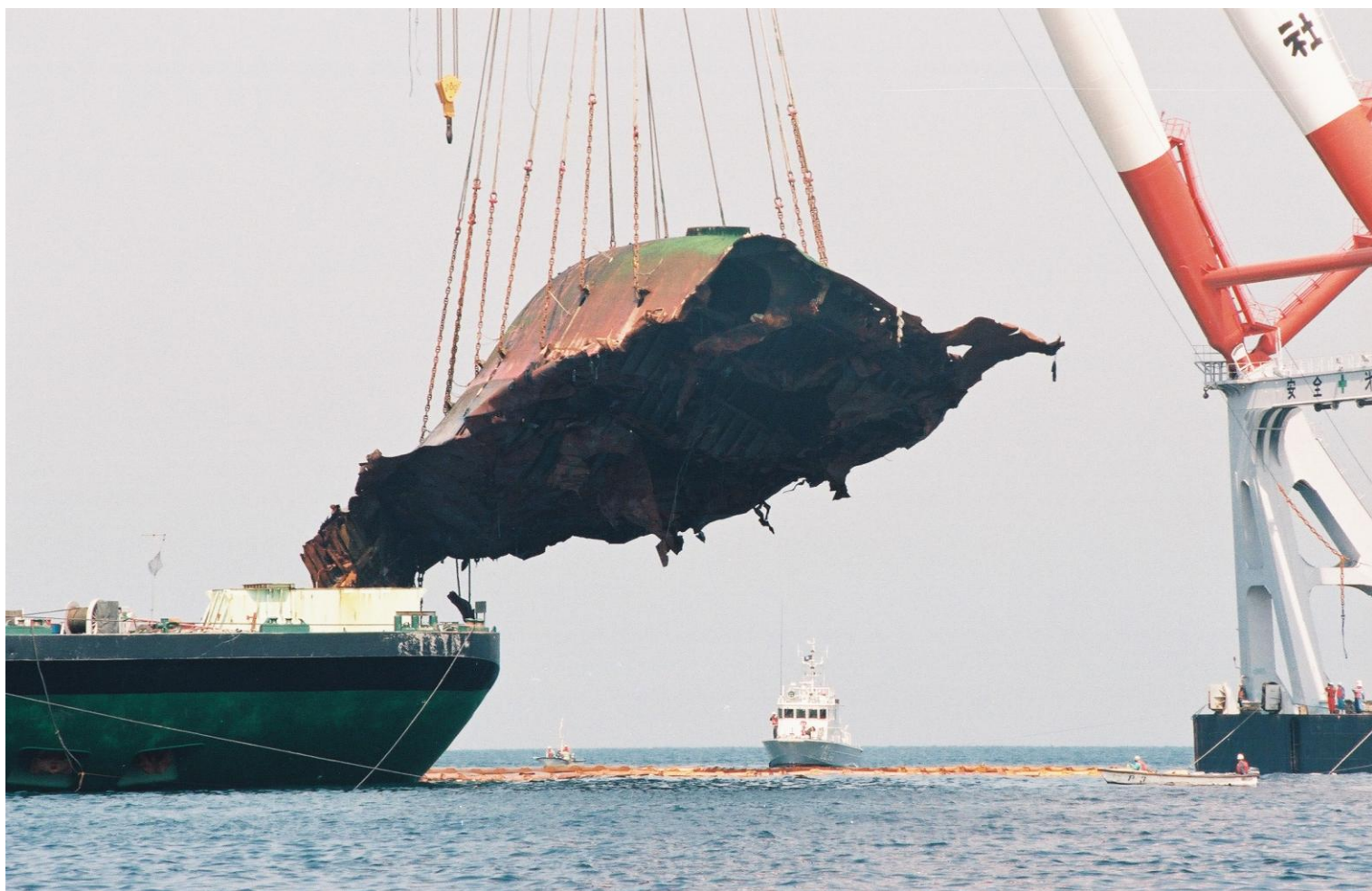
ここらへんに風を見る場所があつてね。昔は。今はこっちに風が吹いてますわね。それがこの風は何時にはこっちに吹くとか、たとえば7時になると風はこっちにくるとか、すべて見極めるんですね。風見博士というのがいてね。ここの村の風については一切わかるわけです。今日は昼からこっち来るから海行ってはいかんとか。いってくださいるんです。この先ちゃんとおきないとその人信用しないわね。見極める、そういう力がある人じゃないと言ひもしませんしね。その人年取った方だけどね、朝方3時ごろ真っ暗なときに起きて、若い者はあっちいたりこっちいたり今日風はどっちかってお互いに喋りながらいるんだけど、その人はじっと聞いとる。こうして全体を聞いとる。それで判断する。今日は行きなさい。今日は行ったらいかんとね。一言ですよ。それも戦後まであつたんですよ。まだね。それも全部なくなっちゃった。言葉を標準語に置き換えてしまったのもテレビですよ。文明ですよ。

やっぱり自然をどうしようかって考えることはものすごい大事だと思うんですよ。いつの時代も。こいつはつくれんのかから。人間は。美術の面からいってもそうなんです。抽象になんぼいっても最後はやっぱり自然に戻らんといかん。それを見る主体の心の中もゼロにせなかん。初心に戻る。もうひとつは古典に戻ってね。雪舟や宗達の風神雷神に戻ると、そうやって出直すと。そうやって繰り返す知恵を日本人はもってきたんやね。一生懸命するればするほど必ず壁にぶつかる。ぶつかったときにそこへ戻ると。初心に戻りなさいと。そういう意味では万葉集なんか詩的にも素晴らしいし、茂吉にしても三好達治にしても与謝野晶子にしても芭蕉にしてもそこへ戻るんですね。そっから出直してきて。そしたらあっちを写すんじゃないし、新しいものを生み出すのにエネルギーを費やすと。

三国湊の戻るところは、海に戻る。川に戻る。それは全部対岸につながって、この先何もないんじゃない、沢山の大陸の情報がある。あそこに戻ってかないかん。三国だけ

だったら自然って大したことない。それがつながるとるんや。大陸に。スゴイ情報ですよ。九頭竜川は日本海に注いでいるんですから。

松村さんの視線は広がる海の向こう、はるか大陸を見ているようだ。この海が大陸と三国をつないでいる。現に磯に打ち上げられた漂流物には漢字やハングルが見えるのだ。そのような視点にたったとき、ナホトカ号の事故はまた異なった面持ちを見せてくるのではないだろうか。



撤去される船首（写真提供：福井新聞社）

第3章 総括

第1章において重油災害後にまとめられた調査報告書等の文献を参照しナホトカ号重油流出事故状況を調査し、第2章では聞き取り調査によって当時の活動状況および10年を経た今の想いや活動を見てきた。それらを総合して第三章は重油流出事故の総括をしたい。

まず第1章において理解されたことは何だったか。もう一度確認しよう。

1. 重油流出事故の対策の初動においては民間ボランティアによる働きが有効である。
2. 1.の働きに対し資金面および資機材面でバックアップする団体、組織、およびネットワークが不可欠である。
3. 1.、2.で立ち上がった動きを継続させる役割を担うのは行政である。
4. 民間と行政がそれぞれの持分を活かした組織ないしシステムは大きな力をもつ。

そしてここにもうひとつ加えるべきは、「三国ボランティア本部」のような官民一体の組織と地元住民との関係を円滑にすることである。ここに、三国町安島で診療所を開く内科医師であり、同区事務所の「相談役兼ご意見番」である、西野慎吾氏が重油流出の災害対策において挙げているいくつかの問題点を取り上げたい（『日本海からのおくりもの』所収「愛する安島のために」を参照）。

- ① 重油漂着の初期対策における組織上の欠陥
- ② 行政によるボランティアへの対応
- ③ 区と漁協との海とその生き物に関する意見の食い違い
- ④ 安島区にある「子供広場」土地使用に際しての申し入れの不在

そして問題点は次のように要約できる。

- ① 組織上の欠陥とは、対策本部に船首が流れ着いた安島区が組み入れられなかったことである。
災害に対しては机上の論議よりもまず「現場のことは現場に聞く」べきであり、日本海沿岸の人たちは、昔から、「アイの風」が吹けばどうなるか、北風が吹けば潮の流れがどうなるか

を肌で知っており、冬の突風が吹く厳しさと戦ってきた経験がある。この地区にはこの地区なりの、昔から言い伝えられている観望天気がある。こうした面をなおざりにしたゆえ引き起こされたマイナス面も多く、たとえば重油回収のための仮設道路の建設も波にさらわれ道路としての機能を果たさなかったこともそのひとつである。現場の意見が十分に加わらなかったために派生した損害は多かった。

- ② 船首漂着が全国報道されるに及び、全国から「日本海を救え」とばかりにボランティアが安島へと駆けつけた。その反応たるや迅速であり、また「わたしたちの海を救え」「子供の頃泳いだ海を放置するわけには行かない」「よそから来た人が一生懸命になっているのに、手をこまねいているわけには行かない」と安島を故郷に持つ人々も、各地から馳せ参じた。これに対し行政は「ボランティアは衣食住を確保してくるもの」という持論を持っており、寒風吹きすさぶ中で「役場に行きましたが相手にしてもらえません。何とか泊まる場所を世話してもらえませんか」とボランティアが区事務所に来ることもあった。町対策本部はボランティアに対する姿勢は決して評価できるものではなかった。すぐさま安島区が高徳寺、陣ヶ岡区民館、米ヶ脇区民館、宿区民館の応援を求め2月14日までの無料宿泊所が開かれることとなったが、この宿泊所も社協が世話したことにしてくれないかと区長へ依頼があり、これに対しては区長とともに怒りを禁じざるを得なかった。
- ③ 区の広報誌に西野氏は次の一文を載せているが、第3の問題の所在はこの文章で理解されると思われるので、これを引用する。

「漁業協同組合の安島支所の動きに区民の議論が沸騰しています。なぜこんなに漁協が避難されるかを考えてみました。

漁協には漁業権という権利があります。しかし、安島の海は漁協の所有物ではありません。区民のものでもありません。日本の国に生を育むもの全部がその恩恵を受ける権利があるのです。だからこそ今度の災害には日本各地から気象条件の悪い中、災害に挑む者、物資を供給する者、体のままならぬ人たちまでが心の応援をするのです。

権利をふりまわし安島の海を牛耳ろうとし、子供と海の生物との接触まで阻止しようとするから区民との間に軋轢を生ずるのではないのでしょうか？（注…子供が海の中でとったサザエ1個で泥棒呼ばわりされた事件が以前にあり、漁業組合の人間以外は安島区民であってもサザエやアワビやウニは1個も採れない）幸い少ない漁業組合員の中で生計を立てている人

はわずかです。先導が舵取りを誤れば船は沈みます。四面楚歌の中では思うこともできません。

安島区あつての漁協です。区の立てた災害計画を覆す漁協の申込は越権行為です。漁協の考えの裏には保障費の配分の思惑が見え隠れしているように思えてなりません。漁協のなすべきことはみな力を借りて1日でも早く汚れた海を元に戻し、生態系の回復、後継者の育成に全力を挙げるべきではないでしょうか。この災害を機会に全区民の心の和を育もうではありませんか」。

- ④ 「子供広場」は安島区の有する土地と何人かの地主の土地を借用している約700坪の土地である。この広場は現地対策本部を設置するには格好の土地であり、安島区も土地使用にやぶさかではなかったが、町や災害対策本部から安島区に対して、土地使用に関する申し入れが一言もなかったのは残念に思う。

以上西野氏の挙げる問題点は、地元区民の視点から挙げられたものとして傾聴すべき点が多い。区と町、漁協組合、対策本部との関係を円滑に進めるためにはどうしたらよいか。それは地域住民に共通するであろう土地に対する想いを尊重することである。こうした面はナホトカ号重油流出事故のような大規模の災害においては看過されがちであるが、ないがしろにすべきではない問題だと思われる。

したがって以下の項目を付け加えなければならない。

5. ボランティア活動とそれをを行う地域および地域住民とのコミュニケーションの重要性

そして最後に挙げるべきは次の項目である。

6. ボランティアに成長のための機会をつくること。

福井新聞社が編んだ『ナホトカ号事故から船首回収まで 重油汚染』（1997）には、同社が行った重油ボランティア意識調査が掲載されている。これをみるとボランティアに参加した多くの人がそこで何を感じ、その活動をどう位置づけているかが理解できる。結論から言えば、「自分

の成長」や「仲間との一体感」等の、通常体験することのないような「自己成長」に結び付けていることが分かる。以下同社による調査を見てみよう（同著 106-111 頁を参照）。

このアンケート調査は県内で活動したボランティア 800 人を無作為抽出したもので、対象者は 770 人、回答者は 513 人。回答率は 66.6%となっている。

このアンケート調査によると、重油流出事故に対し県内で活動したボランティアの 98.2%が「参加してよかった」と答え、「仲間と一体感があった」ことや「自分の成長につながった」としている。もう一度同じような事故があったら 88.9%が「参加する」と答えるなど、活動を積極的に受け止めている人が大多数を占め、阪神大震災で生まれた災害時のボランティア文化が今回の事故に引き継がれたことが明らかになっている。ただ 54.2%が回収作業に改善すべき点があるとし、行政にもっと積極的な関与を求める意見も目立った。

参加した経緯は「自分で自主的に決めた」人が 69.2%、「友人・知人に勧められて」10.3%、「会社で勧められて」6.7%、県外から来た人やボランティア経験者ほど自主的に決めている。

動機（複数回答）は、「海をよみがえらせたかった」が 52.0%と最も高く、「地元の人を助けたかった」38.5%、「自分の向上につながる」が 27.4%の順であった。

98.2%が参加してよかったと答え、その理由（複数回答）は「自分の成長につながった」が最も高く 42.2%、「ほかの仲間と一体感があった」41.8%と心理面をあげる人が多かった。「海がきれいになった」は 38.0%だった。

運営については「うまくいっている」26.2%、「ほぼうまくいっていた」51.8%と 80%近くが好意的な評価をしている。しかし今後もう一度同じような作業をする場合改善すべき点があったとの回答は 54.2%と半数を上回った。「人員の配置や作業の指示を的確に」「情報をもっと正確に」などの声が強かった。

行政に対する意見では「運営や財政支援にもっと関わるべき」が 56.6%「財政的な支援を」21.4%、「運営に関わるべき」12.1%、「かかわるべきでない」は 3.4%に過ぎなかった。

そのほか、ボランティアを一部有償化したらどうかという考え方については意見が二つに分かれ、40.7%が「全て手弁当で無償で」とする一方で 45.2%が「弁当程度の支給はよい」と答えている。

もしふたたび地震や重油流出事故が起こったら、「県外でも参加する」が 46.4%、「県内など近くなら参加する」42.5%と積極派が目立った。

以上から様々なことがわかるが、多くのボランティアは「海をよみがえらせるため」、「地元の人を助けたかったため」三国に赴き、「自分の成長につながった」り、「ほかの仲間との一体感を感じた」りしたのである。ボランティア活動が自己成長の重要な場であるといえるだろう。

めまぐるしく変わる毎日のなかでボランティアに割り振られた「役割」は、自分が必要とされており、また「日本海をきれいに」する大きなうねりを担う欠くべからざる存在であったことを告げたのではないか。現場での単純作業は他の誰にでも出来るものであったかもしれない。しかしその過程で形成される自己は、ボランティアに参加した人々にとって他の誰とも置き換えることのできない特異なものであったのではないだろうか。自己の向上や仲間との一体感というコメントはそのことを教えているように思われる。こうした側面を提供しうるボランティア活動は、欠かすことなく新陳代謝を繰り返すために場をつくり、場を空けては新しいボランティアが成長する機会を絶やさないことが重要だと思われる。



石に付着した重油を拭くボランティア（写真提供：福井新聞社）

これまで第 1 章の総括をしてきたが、第 2 章ではどのようなことが述べられていたのだろうか。確認したい。

1. 三国の住民はボランティアへ限りない感謝の念を抱いている。
2. ナホトカ号の重油流出事故の記憶は住民意識を分裂させている。
3. 重油流出事故は現代文明への警鐘ではないだろうか。
4. 事故後、住民の自然環境に対する意識に変化があった。
5. 「自分に出来ること、自分にしか出来ないこと」がある。
6. 「人手」による重油回収が有効だった。
7. きれいな海のために陸の人の協力が必要である。

聞き取り調査をさせていただいた方々は並べてボランティアへの感謝を惜しむことがなかった。ボランティアがこの地を訪れ重油を回収しなければ三国の海は 3 ヶ月できれいになることはなかっただろう。しかし多くのボランティアが来るきっかけとなった重油災害の報道は同時に風評被害をもたらした。三国漁協および観光協会はこれを払拭するのに多大な労力を要した。そのため、三国住民の中でこの事故を思い出したくないと考える人々と、これを二度と起こさないように記憶を風化させないで次代へつないでいくべきだと考える人々がいて、これに事故に関心をもたないか或いはこれを知らない若年層を加えた三つの意識に分裂しているように見える。後者の考え方はボランティアへの感謝から支えられてもいる。それぞれの考え方に道理があるとしても、三国の海がきれいであれば漁業も観光業も成立しないことを考えれば、この海がこれからもきれいなままであるために相互協力が欠かせないのではないだろうか。それが今考えるべきことなのであり、重油流出事故が教えることではないだろうか。海に携わって生きる人には、海に生きる人だからこそ出来ることがあるはずであり、同様のことが川にも、里にも、山にも言えるのだとすれば、それら全てが往来する三国湊を、人間を中心に添えるのではなく、人間と人間を、人間と自然を結び付ける生身の「人手」によって保全していくことが、重油流出事故から 10 年を経た今、求められているのではないだろうか。

以上が第 2 章の総括であるなら、第 1 章と第 2 章から何がいえるであろうか。

1月7日に重油の流出に対し最初に動き出したのは地元の海女さんと漁師たちであった。その後震災ボランティアを経験した民間ボランティアがいち早く三国を訪れ状況を把握、必要な対策をとり、JCにコーディネーターとなることを提案した。その後社協とともに日々増加するボランティアへの指示を送り、行政とボランティアとその間に介在する組織によって事件解決を図るという「三国方式」ができあがる。このときボランティアのボランティアとしての地域住民の存在が回収活動全体を支えていたことを忘れてはならないだろう。総じてナホトカ号の重油流出事故に対する対策は、民間団体の回収活動への機動力と指導力がボランティアの積極性を方向付け、これを行政がバックアップするシステムをとったといえるであろう。

以上が組織・制度の面での総括となるなら、実践の面では「人の手」による活動が大きく特徴づけられる。日本海にはこの事件のように流出した重油の回収船は一隻も準備されておらず、回収船が現場へ到着したのも重油流出から5日が過ぎていた。三国に重油が流れ着いた次の日から回収を始めた地元住民がとった行動がバケツとひしゃくによる回収でありバケツリレーでそれを運ぶ人海戦術であった。この対策は全国から集まったボランティアが行うことのできるきわめてシンプルな実践であり、また自らの手が漂流油を減らしているという実感をもたせるものであり、なおかつ大型タンカーの重油によって顕された現代文明を、それをもともと生み出したが操作不能となっているわたしたちの手がすくいあげることは可能であると告げてもいたのである。

それは、かつて60年代の燃料革命によって、戦後まで燃料とされてきた薪や炭に代わり、ガスと石油および電気によるエネルギーが生産・消費されるようになった現代に、ふたたび人の手が深く関わる漁業、農業、林業などの産業が、新たにわたしたちの生活を構成する主要なものとして立ち現われることを指し示しているのではないだろうか。そしてそれは同時に、それら全てが往来する湊であった三国の歩むべき方向を指し示しているのではないだろうか。海、山、川、里のもたらす幸によって繁栄を遂げたのが、ほかでもないこの三国湊だったのだから。

Ⅱ. 三国湊の自然と文化

三国湊は日本海にその門口を開き、古代より様々な人やモノが行き交い近世には北前船によって栄えた指折りの要港である。南から流れ来る黒潮の分岐した対馬海流に洗われ、いくつもの河川が霊峰白山を頂とする山々から駆け下り、それらが運ぶ土砂の堆積によって形成された平野からは農作物が運ばれ、それを積荷した船は川を伝って海へ漕ぎ出し、彼方の大陸からの交流はとめどなく、人とモノが往来した。それらが出会い文化が形成される。三国湊は様々な「流れ」の交差する「流域」であって、流れが入り込んでは出て行けるように開かれていたのである。

流れの主たるものは海流であり、日本列島から樺太（サハリン）を経て中国大陸から朝鮮半島へ環を描くように連なる陸地に囲まれた「内海」、日本海には対馬海流と北方からのリマン海流やそれが分岐した北鮮海流が通過する。これらの海流を利用した活発な海上交通によって各国の政治と文化と経済は相互に影響をもたらした。「三国湊」が初めて歴史の 1 ページに登場するのも、この「環日本海」を舞台としている。

そこで第Ⅱ部では、人やモノの往来に注目し三国の自然と文化を調査することとしたい。第 1 章では海の生活と文化を、第 2 章では山・川の生活と文化を、そして第 3 章では海と山と里を往来する人とモノを調査研究する。

第 1 章 海の生活とその文化

「三国湊」が初めて歴史に記録されるのは奈良時代末、『続日本紀』宝亀 9 年（778 年）の条である。ここに「坂井郡三国湊」が初見されるのだが、その舞台は日本海を挟んだ大陸の国、渤海との通交であった。当時の三国湊はどのようなものであっただろうか。歴史を遡ることによって三国湊と海の間わりを知ることができる。以下、印牧邦雄編による『三国町史』（1964）を参照しながら三国湊の姿を叙述してみよう。

先に述べたように「三国湊」が初見されるのは日本と渤海との通交においてであった。古代という時代において両国はどのような状況にあったのか。その背景を探ることは、三国湊の古代の姿を浮かび上がらせるものとなるだろう。

時は 669 年（天智 8 年）、新羅と唐との連合軍に滅ぼされた高句麗の領土に建てられた国が渤

海である。今の中国大陸から朝鮮半島北部にかけてがその領土であった。一方この頃の列島では、畿内のヤマト政権が新羅 - 唐との朝鮮半島をめぐる戦いに敗れて7年が経ち、近江の大津の宮では大王天智が即位していた。渤海建国の669年には天智とともにクーデターによる政治改革を行った藤原鎌足が世を去り、大王天智とその弟大海人との対立が顕著になるにつれ、ヤマト政権に不穏な緊張が生まれ始めていた。

新羅と唐とに対する緊張関係の中、両国を牽制するため渤海は日本に援助を要請し通交を結んだ。これに始まった渤海と日本との通交だが、そもそもが新羅 - 唐に対抗するものとして始まったため、交通ルートはもっぱら日本海を横断する航路をとることとなり、当時風波の状況によっては渤海からの船が日本海のどこに到着するか一定していなかったようだが、渤海の使節団が最多数到着したのが越前の国だったのである。すなわち渤海の使節団が初めて日本に来てから929年(延長7年)にいたるまで約200年間、前後36回中の最多の6回である(『三国町史』による。『福井県史』では727-719年間の34回とある)。しかし朝鮮半島と日本は使節団を国賓として優遇、遣渤海使を遣わせたため奈良時代における両国の往来はきわめて盛んだったのである。

そして778年(宝亀9年)、前年渤海使を渤海へと送った高麗殿嗣は、渤海使張仙寿らとともに「越前国坂井郡三国湊」に到着したと『続日本紀』は伝える。三国湊に到着した一行は当地にて一時滞在し、その間食料および衣料等の生活物資が供給された。その後使節団は都へ上京したのである。この通交、当初は渤海による新羅 - 唐への対抗策が目的であったが、後には朝貢的通交は表面的理由となり、8世紀になると日本との貿易に重点はシフトしていった。渤海からは貂^{てん}、虎、熊などの毛皮や人参、蜜など自然採集品がもたらされ、日本海からは絹、綿、糸などの繊維製品、黄金、水銀、漆、海石榴油^{つばき}、水精念珠^{すいしょうねんじゆ}、檳榔^{びろう}の扇などがもたらされた(『福井県史』549-550頁)。物品のみならず、日本は渤海を通じ遣唐使^{るかくしやう}や留学生を唐へと出入国させている。渤海を通して唐からの情報を得てもいたのである。以上が記録として残った情報であれば、歴史として記述されえない人々の海を渡る交流は想像を越えて余りある。

ここでもう少し時代を遡ってみれば、『日本書紀』にはまた次のような記述を見ることが出来る。すなわち欽明天皇31年(570年)の条には、越の海岸に漂着した高句麗の使節を郡司道君(おそらく加賀郡の豪族)が隠匿し、自ら天皇と名乗り、高句麗使が調物を渡した。これを江滞臣(おそらく江沼郷の豪族)が都に告発し、中央から使いが遣わされ事が露見したとある。朝鮮側の史

料ではない欽明期の記述は多く後代の創作によるため、史実としては問題があるかもしれないが、ともかくこの時代に高句麗使が越の国の海岸（加賀・江沼付近は三国湊のすぐ北である）を踏んでいたことは認められるだろう。その後敏達天皇の2年と3年には高句麗の使いが越の海岸に到着したと伝える記事があり、大化の改新後では668年（天智7年）秋7月、この年はまた越の国から燃ゆる土と燃ゆる水、すなわち石炭と石油が初めて朝廷に献じられたと伝えられているが、高句麗が越の路から使いを遣わせて貢物を進めたこと、およびその使節は風浪高くついに故国に帰ることができなかったことを記している。

三国湊が中国大陸および朝鮮半島と日本海を挟んで相對し、その際の要衝であったことが伺える。しかし三国湊が重要な位置を占めていたのは大陸や半島に対してばかりではなかった。『日本書紀』によれば、孝徳天皇の647年（大化3年）には滯足に、翌648年には磐舟に柵を置き、柵戸を置いたという。柵とは軍事的な施設のことであって、柵戸はそれにあたる人々のことであるから、平時はともかく戦時となれば出動しなければならなかったのだが、これに越と信濃の民が選ばれたとある。滯足とは今の新潟県新潟市沼垂付近、磐舟は村上市岩船付近。当時の越の国は後の越前・加賀・能登・越中・越後はもちろん出羽の一部を含む広大な地域を総称するものだったが、越や信濃の民がなぜ新潟に移住させられなければならなかったのだろうか。「蝦夷」に備えるためである。越の向こうに広がる「蝦夷」。これに対して防衛施設を設置したとの記述は同時に二つのことを示している。ひとつは当時の律令国家の当地権力の及びうる日本海沿岸地方の北限が新潟県中部から北部にかけてであったこと。もうひとつは「蝦夷」へ支配力を広げる過程で越の国にもその支配が強力に浸透してきたことである。

その後清明朝4-6年（658-660年）の間には、越国守阿倍比羅夫による「蝦夷征討」のための日本海北上はもっぱら水軍によっておこなわれたとあり、その水軍は180艘とも200艘とも言われている。その後和銅初年（708年）と翌和銅2年にも蝦夷侵攻が行われたが、越前はそのための軍事的および経済的基地としてこれに占める役割大であり、716年と翌717年には越前国百姓100戸が、東北地方への防衛と開拓のため越前、信濃、上野諸国の百姓とともに配されたことを考えれば、三国湊もまた日本海に面した要港として水軍発進基地であったことは十分考えられる。

古代の三国湊とヤマト朝廷との関係は「蝦夷計略」に関わることのみならず、それにとまなう経済的基盤としての開発事業の点からも深い関係を持っていた。705年（慶雲2年）には越前国野地100町が大寶律令の選定を指揮した刑部親王に与えられている。野地とはいまだ開発されて

いない土地のことであるが、こうした土地も奈良時代前期からの次第に活発化してきた墾田奨励の傾向に応じて開発が進められていった。733年（天平5年）の山背国愛宕郡某郡計帳には、某郷から越前国に向かったの逃亡者が多く見られる。計帳とは租・庸・調などの租税を徴収するために毎年作成された基本台帳であるから、租税は各人が計帳によって登録された地において行うため、律令国家においては人々が登録地から離れて他の土地に移住することは禁止されていたのである。しかし実際には登録地からの逃亡者は後を絶たなかった。ましてや計帳に記載されていない人々の移動は多かったに違いない。問題は山背国愛宕郡某郡計帳に記された逃亡者の行き先がなぜ越前国であったかということである。『三国町史』によれば、おそらく越前国が開発の進みつつある土地として、経済的にも新しい生活を営む諸条件に恵まれていたからではないかという（74頁）。こうした越前国は東大寺大仏建立事業によって加速された。その経済的基盤が荘園である。東大寺の荘園として越前および越中の土地が多く選定されたのはなぜだろうか。『三国町史』には次のようにある。「その理由の一つとしてはこれらの国が当時開発の途上にあり、有望な未開な原野になお多く恵まれていたことがあげられ、またこの地方に適する稲の品種として越特子とよばれるものがあつたらしいことも推定されるが、さらにことに越前は都から距離的にかなりはなれているにもかかわらず、比較的交通の便に恵まれていたことも見逃せない理由であろう。すなわち東大寺荘園の多くは次に述べるように多く坂井郡・足羽郡に設定され、（略）これら二郡に設定された荘園の収穫は越前平野を流れる九頭竜川の水運を利用して河口の三国湊を經由して海路敦賀に送られ、そこから愛発関を越えて近江の琵琶湖北岸の塩津・海津に至り、さらに琵琶湖・宇治川・木津川の水運を利用して平城の都に運ばれたものようである。したがって北国の辺境と考えられやすい越前は、かえって経済的に京師のヒンターランドとしてきわめて有望視されていたのである」（77頁）。水利に恵まれた三国湊と、肥沃な平野、そして収穫米を敦賀まで運ぶための航海技術者の存在が東大寺領の荘園開発を可能にしたのであろう。このように三国湊は渤海や唐との通交における要衝であったのみならず、「蝦夷」に対しては軍事的および経済的な基地であり、東大寺の財政基盤を提供した荘園収穫を集めて運ぶ窓口であったのである。

以上から古代三国の姿が理解されるのではないだろうか。海外通交。軍港。収穫米の輸送。これらが古代三国湊に政治、経済、文化等々様々なレベルの豊かな富をもたらしたのだが、いずれも船舶がなければ成り立たないことからすれば、三国湊には操船の巧みな海の民が活発に行き交

ったと考えられる。海を航海する人々にとって恵みをもたらすそれは同時に畏怖すべきものでもあった。「板子一枚下は地獄」というように航海は危険と隣り合わせであり、ましてや黒い日本海ははげしく荒れるのである。

海運にとって道標となるものはその海域にとって要をなす。目当てとして航海すべき場所は「アテ」と呼ばれ、山であれば「山アテ」、島であれば「島アテ」とされ、航海者にとって聖性を帯びるものとなった。南から越前海岸を北上するときにも北から能登を南下してくるときにも、竹田川、九頭竜川、日野川などへの出入りの際にも「島アテ」となったのが安島岬の先に浮かぶ雄島である。岬は陸地の果て。海と陸との間際である。吹きさらす強い風は灌木の身を斜めによじらせ、波を白く泡立たせる。安島はその西北に雄島があることで日本海の季節風から守られてきた。風は雄島によって二分され、安島では南を「上（かん）がち」北を「下（しも）がち」といい、南の海が荒れたときは「下がち」で、北の海が荒れたとき「上がち」で海産物を採ることができたのである。古くから航海の守護神として三国湊を見守ってきた雄島は海の神「御島」でもあったのである。

「あっこに波の光ってる線が見えるでしょう」。そういつて安島沖の海上を指さすのは第 2 部にもご登場いただいた大湊神社宮司松村忠祀さんである。少なくとも 1200 年の歴史をもつ大湊神社は付近の海の安全を守る海の神様が祀られている。35 代目の宮司である松村さんはあたかも三国の歴史と文化の語り部のようでもある。

波が光っているように見えるのは、川の水の塩分濃度や温度と海のそれが違うから。互いに交じり合うとき日をうけた波がきらきらと光るのだという。そこは山から運ばれた栄養の豊かな漁場でもある。そうしたバランスの中に漁師や海女の生活がある。遠くに白山があり、ここに湊があり、魚がいる。漁師や海女の生活は活字で残ることはほとんどないが、海民は海を体全体で知っていた。手を使って、汗をかいて、心で観て、魚を追い、貝を収穫した。そうやって生きてきた海民のもつ文化を松村さんは次のように述べている（『日本海からのおくりもの』を参照）。

昔は神様は遠くの山や水平線の彼方からやってくると信じられていた。安島に祀られている神様も海神様で西の水平線の彼方から海を渡ってきたのだった。古くから安島には海民が集落を形成しており、少なくとも昭和の初期頃まで付近の沿岸漁業の中心地でもあったという。ここでと

れるウニ、ワカメ、サザエ、アワビ、ナマコなどは天下一の名産品であった。

安島はこのあたりでもっとも日本海に突き出た土地であり安島岬ともいわれている。その先端から200数十メートル沖合いに「神の島」と崇められてきた雄島がある。

雄島は遠くから眺めるとあたかも鯨が泳いでいるような形をしているため別名鯨島とも呼ばれているのだが、そのこんもりと生い茂る原生林で冬の日本海の厳しい季節風を吸収し安島地区の住民の暮らしを守ってきたのである。

ナホトカ号の重油は雄島の東岸には漂着したのだが、西岸にほとんど漂着していないことから理解されるように、日本海の海流が雄島を起点に南北に分かたれる海域でもあると考えられ、この近辺には古くから様々な漂流物が運ばれたと歴史は伝えている。それは雄島の神様が日本海のすべての新しい情報を嘘偽りなくそのまま私たちに伝えてくださっているといえるのではないだろうか。

だからナホトカ号の出来事も雄島の海神様が私たちに現代文明のひずみを教えてくれるように思えてならないのである。

海には国境がない。アジア大陸から、そして遠く太平洋から、たとえば椰子の実までも漂流物として安島の浜に運んでくる。海流は地球上の血液のようなものだ。

したがってそれはつねに新しい海の情報を自然のまま選別することなく運ぶとともに、地球そのものを活性化させている流れでもある。だからこそ先人たちは海を畏敬の念を持って母なる海と呼び、そしてそれがもたらす漂流物に対して漁民は神と崇め、他所から来るものを夷と称し、さらに恵比須神と崇めたのだった。

海神を祀る雄島の昔の出来事も今では大湊神社の縁起を通して、安島と彼方の大陸との関わりを秘めた民話として素朴に語り伝えられている。

安島の集落は真西の方位に間口を開き、春は南西の風で生命の芽吹きを南から北へと運び、夏には西南から西の方位の風を起こし、陸地に吹き降ろす風は土用の酷暑を運んでくる。この辺りの人はこの風を「タカの風」という。この風はアジア大陸のほうから日本に向かって吹くもので、波長の大きなうねりをもった海流、すなわち日本海の海の道をつくりだす風でもある。この海流のことを安島の漁民たちは昔から「モックリ・コックリ」と呼んできた。

「モックリ・コックリ」とは蒙古・高句麗に由来する言葉であるが、元寇襲来のときに敗残兵がナホトカ号の船首部分が座礁した「この浜」付近に漂着したと言う伝説が残っている。

「にの浜」は「丹の浜」と書き、丹は「赤色」を指す字である。文字通り赤い浜と名づけられた海岸であり、別名「アカバセ」ともいう。どちらもその浜の石が赤いことに由来するが、伝説では元寇の敗残兵の血で染まったため赤い石になったとも言い伝えられている。

土用最中に吹く風も、土用三番頃になると日本海の西北辺りから吹く風はどことなく秋の気配を感じさせ、その風を地域の人々は「アイの風」と呼んできた。そして秋を告げるこの風が去り、西から北西にわたる水平線の彼方からとめどなくドカベ雲が湧き出てくるようになると、安島は冬の装いとなる。

当たり前のように空と海がすさまじく荒れ狂った冬の日、山陰沖で海難事故に遭ったナホトカ号は雄島の目の前の安島沿岸の岩礁に打ち寄せられて座礁したのだった。

この漂流物は現代の^{えびす}恵比須であり、海神恵比須はこの海岸を目指してやってきたのかもしれない。この漂流物は今日の^{えびす}夷として、現代文明による自然界の汚染に警鐘をならすために守護神となり人類社会に何かを告げようとしているように思えてならないのだ。

雄島には古くから次のような物語が伝えられている。

有史以前から照葉樹林の繁茂する雄島に大湊神社の本宮があり、そして奥津宮とよばれる海域で海神様を祀っている。雄島の神様が昔「げらの国」から雄島にやってこられるとき、「波に乗せてください」とお願いしたところ断られてしまった。そこで雄島の神様が鯨に「雄島まで乗せてください」とお願いするとその願いを果たしてくれたという。それで雄島の神様を「げらの国」から乗せてきた鯨を雄島では神使いと称している。

この雄島の神さまに祭祀を奉仕する神主として松村さんの先祖が尾張の国から神護景雲 2 年(768 年)に任官したときから、神主家では雄島の神様の神使いである鯨の肉を食べることは禁じられたのである。「げらの国」とは当時の朝鮮半島のある地域を指すものと考えられている。

また雄島はモックリ・コックリというところから麻三本で担いできたと伝えられたり、爺と婆が麻三本に雄島を担いできたがあまりに重いため安島でおろして休んでいる間に根がついて雄島ができたとも伝承されている。

「モックリ・コックリ」とは春から夏にかけて海にあらわれる大きな波のうねりをもった海流のことをいうのだが、あるときその海流が大きな「モックリ・コックリ」の怪魚となって雄島を海に沈めようとした。九分まで雄島が生みに沈められようとしたとき、雄島の神様が雄島に自生する矢竹をことごとくその怪魚に射尽くした。しかし怪魚は死ぬこともなくさらに雄島に襲いか

かってきた。

そのとき、天から一本の鎗矢を授かり、これを怪魚に射るとたちまちそれが千本の矢に分かれて怪魚に的中したとも、また一本の鎗矢が四十二本に分かれて怪魚の両目に的中して死んだともいわれている。そして九分まで沈んだ雄島はふたたび浮かび上がり、元の姿に戻ったという。

その出来事があったのが大晦日の晩で、翌日の正月元旦に怪魚モックリ・コックリの死骸がナホトカ号の船首が漂着した雄島北岸の「アカバセ」に漂着したと伝承されている。アカバセの石が今でも赤く染まっているのは、そのときモックリ・コックリが流した血によるものだと伝えられている。

安島の村人はモックリ・コックリがあまりにも巨大だったので食べても食べても食べきれず、とうとう食べつくすのに次の年の正月までかかったという。

奇しくも新しい年を告げる正月に起こったナホトカ号の海難事故は、姿を変えてこの「モックリ・コックリ」の言い伝えを演じているように思われてならない。モックリ・コックリはアカバセを赤い血で染めつくしたが、ナホトカ号はアカバセを黒い重油で埋め尽くしたのだった。ナホトカ号の安島漂着は現代における「モックリ・コックリ」なのである。

ここに述べられていることから何を読みとることができるだろうか。まず重要だと思われるポイントを抜き出してみる。

- ・ 「海の神様」は西の水平線からやってくる
- ・ 「様々な漂流物」が運ばれたこと
- ・ 安島に「新しい海の情報」が運ばれること
- ・ よそから来るものを「恵比須神」と崇めたこと
- ・ 雄島の神さまは鯨に乗ってやってきたこと
- ・ 「タカの風」、「アイの風」が吹いてくること
- ・ 「モックリ・コックリ」という大きなうねりをもった海流がやってくる
- ・ 元寇襲来の際の敗残兵が漂着したこと
- ・ 「モックリ・コックリ」は怪魚となってやってきたこと
- ・ 「ナホトカ号」、「重油」の漂着

ここに列挙したものは並べて「向こうからやってくるもの」という共通要素をもっている。向こうからやってくるものを「寄り物」という。日本各地の海岸で「寄り物」の伝承数多く、それは「何か好ましいもの」、あるいは聖性を帯びたものと考えられ、それを拾うものには幸がもたらされるとされてきた。漂着した流木である「寄り木」によって立てられた寄木神社は全国沿岸に建立されている。上にあげた諸項は「寄り物」的な共通性をもちながらそれぞれ別の顔をもっている。ここで諸項を寄り来る土地に対して肯定的と捉えられるか否定的と捉えられるかに分けてみる。

＋の要素：海の神様、新しい海の情報、恵比須神

－の要素：敗残兵、怪魚（モックリ・コックリ）、ナホトカ号、重油

＋－の要素：タカの風、アイの風、海流（モックリ・コックリ）、漂流物

＋の要素をもった第1群は航海の守護神である海神、経済的、政治的、文化的な幸を運んでくる新たな情報、そうした幸をもたらす神としての恵比寿神によって構成される。－の要素からなる第2群は「にの浜」を赤く染めた負傷した敗残兵であり、雄島を沈めようとした怪魚であり、黒い重油を運んだナホトカ号である。そして土用の酷暑を運ぶタカの風のように－の度合いが強かったり、漂流物のように＋の要素を含んでいたりするが、総じて＋でもあり－でもあるものが第3群をなす。この群には自然の働きが多く含まれる。

第1群と第2群は雄島の神と怪魚の戦いによって対比されている。際立って対比されてはいるが、「寄り物」という共通性をもつ。「寄り物」はそれが運ばれた土地にとっては他所から来た「異なるもの」と考えられるが、この「異質性」をどう捉えるかによって「寄り物」はそれぞれ好ましいものか、好ましくないものか、どちらともいえないのかの3群に分けられることになる。異質性を分母とし、その捉え方を分子としてそれぞれ第1群、第2群、第3群が構成される。したがってそれぞれの群は異なった枝葉をもつように見えながら同じ根をもつものである。3つの群はより大きなひとつの群に属する。つまり雄島を沈めようとした怪魚も、矢をもってこれを射止めた雄島の神も、その発するところは同じであり、海の彼方からやってきたのである。神と怪魚は一体ということになる。

ここからある面で非常に忌まわしいナホトカ号の重油流出を、別の面では人間の姿を映し出す「警鐘」として肯定的に捉える思考が生まれるのである。したがってあの事故は、否定的なものでもあれば肯定的なものでもあり、毒でも薬でもあるようなものであり、ある一面だけを切り取り考察したり判断を下すべきではない。そのようにこの海に息づく知恵は、その背後にある見えないものを含めてあの事故を捉えなければならないと促しているのである。それは事故のみならず世界を全体性のなかで見るという眼差しである。自然という全体性のなかでは、善も悪も正も負もどちらか一方が他方に勝ることなく二つは同体である。善悪も正負も自然のうちには存在しない。それらを全て飲み込んで、とめどなく贈るものが自然であるからだ。もし事物の切り取られた部分をもって知ることが知識であるとするならば、この思考は全体性をもった知恵ということができよう。この知恵が教えるのは異なるものとの共生のあり方であり、異なるものに対する歓待のあり方である。ほかでもなくこの世界は異なるものによって贈られ与えられているのだから。

加えて注目すべきことは、ナホトカ号の重油が漂着したということを一種のコミュニケーションの発生と捉えているという点である。コミュニケーションは発話するものと応答するものとの双方向性がある生まれるものである。「警鐘」という言葉が意味するのは、響き渡る鐘の音を鳴らすものとそれを聴くものが存在するということである。8,600klのC重油の漂着は、物質的次元からも説明可能なものであるが、同時にそれに還元されないものを伴って、私たちへ何かを呼びかけている。このような考えは重油漂着をある種のメッセージとして、言い換えれば「授かったもの」ないし「贈られたもの」として受け取ることなしには成立しない。しかしこのような感受は「働きかけるもの」があって初めて生まれるものである。此岸にて鐘の音を聴くのは私たちである。だとすれば鐘を鳴らすのは誰か。働きかけるものは誰か。それこそが海であり自然であり、神と呼ばれるものなのである。この海の文化の基底には自然とのコミュニケーションが横たわっている。それは「アイの風」や「タカの風」、あるいは「モックリ・コックリ」という大きな波のうねりを受けながら生きてきた人々の実感から発したものではないだろうか。歴史や文化はたんに過去の記録に見出されるものではない。土地土地に生きる人々が何気なく発した言葉や仕草に現われ、今ここに生きられるものが歴史や文化なのであろう。

何らかの発話がなされた限り、それに対して何かを答えなければならない。それがコミュニケーションの原則である。「ナホトカ号重油流出事故を風化させてはならない」という意識は、言

い換えれば「自然とのコミュニケーションを断絶させてはならない」ことを意味している。そうでなければ贈り主は贈り物を断られたことになるだろう。海は絶えず波を送り、風と季節を運び、海の幸を、富と文化を贈ってきた。そればかりではなく、住民の生活意識の见えない基盤である海を守護する神さえも海は贈与したのである。しかしその贈与は同時に怪魚と敗残兵と漂流物と重油と一体のものなのである。この贈り物を断ればその結果漁師に魚を授けることを止めることになるだろう。コミュニケーションの断絶が意味するところはこの事態である。海の知恵はどのように教えているのではないか。だとすればこのコミュニケーションを滞らせることなくつつがなく流れさせなければならない。では私たちにせめてできることは何であろうか。海からの働きかけに対してどのような働きによって応答することができるであろうか。ナホトカ号は10年前から私たちの応答を待ち続けているのかもしれない。

第2章 山・川の生活とその文化

「地つき唄」をご存知だろうか。「地つき」は戦後までみられた習慣でもあり、建築物の立つところを地固めする際、木を組み合わせてやぐらをたて、大きな柱をその中心に吊るし、何本かの綱をくくりつけては大勢で引くことをいうのだが、そのとき唄われるのが「地つき唄」である。『坂井町誌』に収められた「地つき唄（木やり唄）」には水上交通によって三国湊と山河を結ぶ興味深い言葉が散りばめられている。

(拍子木) チョン、、、、、、

ええー	大黒さんは米の蔵えー	(えんやー (全員)
ええー	お恵比須さんは鯛の蔵えー	(えんやー
ええー	ほていさんは子ども蔵えー	(えんやー
ええー	べざい天のびわの蔵えー	(えんやー
ええー	福祿寿の巻物蔵えー	(えんやー
ええー	寿老人の剣の蔵えー	(えんやー
ええー	びしゃ門天のかねの蔵えー	(えんやー

えーさて今日の千秋楽の相なれば、大黒でつきおさめぞえんやーえんや、(えんやーえ、やんこのさっさのえー、あーよいしょ、よいしょ、えんやーえんやの浮いたんやれこれはしめたれや、(ホイ さてどなたにも各々象、(ホイ 今日はまたお日長な御時節に (ホイ 下手な木やりを相手とし (ホイ 朝から晩までただ取りあげよ取取りあげよと言うてからに、(ホイ 御無理な願いをかけまして (ホイ おん願いをかけたれば (ホイ お聞きずみとなりまして (ホイ まことに御苦勞さんでございました。(あーこまかにこまかに、どうやらおかげさんで千秋楽と相なれば、(ホイ 千楽万事万々事、(ホイ このようなめでたい事はない (ホイ お天どう様のお守りか (ホイ 雨も降らにゃ風もなく (ホイ 氏神様のお守りか (ホイ あやまちなけにやけがもなく (ホイ このようなめでたい事はない (あーこまかにこまかに さておめでたやめでたい事で申そなら (ホイ 天でも地でもこの世でも (ホイ 松ほどめでたいものはない (ホイ まず正月にはかどには門松立てられて (ホイ しめ縄を張ってからに (ホイ 床にはだいだいを活けられて (ホイ 元日の祝いも済んで夜食もすんだる事なれば、

(ホイ ごろっと寝れば夜があける (ホイ まづ二日の初夢に (ホイ 宝の山を夢に見て
(ホイ 宝の山の古木は (ホイ さても見事な楠で あーこまかにこまかに 七福神が見定
める (ホイ 武田の大工さんが大引き小引を引き連れて (ホイ 宝の山に乗り込んで (ホ
イ 鬼門よけに枝を折ってからに (ホイ 楠めがけてあきの方さいてきりたおす (ホイ
枝葉をこないて面をとり (ホイ 稜をとっては雄綱とし (ホイ 錦をたっては雌綱とし (ホ
イ 七福神がざいふりで (ホイ とってもけわしい道なれど (ホイ あまたの力者にゃ依
頼をしてからに (ホイ よいやさこらさと言ってからに (ホイ どうやら宝の島まで持ち
だいた (あーこまかにこまかに 宝の島よりさっても見事な楠を (ホイ 宝の御船に乗せ
られて (ホイ 積み込む宝は何々じゃ (ホイ 打出の小づちや 黄金小判や かくれ笠や
かくれ蓑 (ホイ これらの宝を積み込んで (ホイ 宝の御船に乗せられて (ホイ 稜や
錦の幕を張り (ホイ 金銀しゃこうの帆をあげて (ホイ 七福神がざい振りで (ホイ ど
うやら三国の港までこぎ寄せた (あーこまかにこまかに 三国の港より大川小川へきしあげ
て (ホイ 木曾やくまん(熊野)の材木を (ホイ こなたの屋敷に運ぶときゃ (ホイ 大
八車や馬車 (ホイ まづこなたんのお屋敷へどっさりと (ホイ 受けとるおん方誰なれば
(ホイ まづこなたんのご亭主で (ホイ ならびにや大工さんでございまする (あーこま
かにこまかに 石屋さんから捧頭 (ホイ 数ならぬ木やりどもに至るまで (ホイ これら
の者にゃ依頼をしてからに (ホイ 大工さんがするようには (ホイ 図板を帳場にほり出
いて (ホイ 水縄を張ってからに (ホイ 今つく大黒柱よりがわ柱に至るまで (ホイ 鬼
門よけにて巽、巽と指いてからに (ホイ これらの地鎮をたままつる (あーこまかにこま
かに まづこなたんのご普しぎを (ホイ ちょうめんになぞらえて申そなら (ホイ 鶴は
千年おめでたい (ホイ 亀は万年なおのこと (ホイ 浦島太郎は八千才 (ホイ とんぼ
さつは九千才 (ホイ 和布の太助は百六つ (ホイ これほどめでたい事はない (あーこ
まかにこまかに ああめでたや千寿万才万々才 (ホイ このよなめでたい事はない (ホイ
このよなめでたい調ぎが続くなら (ホイ まづこなたんの御世帯は (ホイ ずんずと栄え
るんじゃとや えんやーえんや、(えんやーえー、やんこのさっさのえー よいさ、よいーよ、
よいさ、よいさ (拍子末) チョン、、、、、、 (山崎重平・田中利一)

『坂井町誌』はこの唄を「木やり唄」ともしている。江戸には鳶職が連なって唄う木やり唄が

あるが、この場合は木やりが伝承したからそういうのであって、それは大工や木工職人たちが山から伐りだしてきた材木を柱や梁にして組み立ててゆく様子が唄われているところからも察せられるだろう。

唄の最後にこの唄を記録した二人の名前が添えられている。山崎氏はすでに物故されてしまったが、幸いにも田中氏に会うことができた。

田中氏は35歳で坂井市に社会教育の専門員として勤務するようになり、以後23年間市に勤めることとなった。そうしたなか山崎氏に出会い、この地つき歌をはじめ、田植え唄や盆踊りの唄を習うようになった。終戦まで富山にいた田中氏は、以前から唄い手になろうと思っていたほどの唄好きで、かの地で謡の手ほどきを受け、富山の若者に教えるまでになっていたという。この唄は山崎氏との出会いを通じて田中氏へと継承されたのだった。

氏によれば、コンクリートによって家の基礎が作られる以前は村中で地固めをしたのであり、この唄も大黒柱を家の中心に建てる際の地固めに唄われたもので、大黒柱の地つきは「千秋楽」であった。つまり、家を建てる際の様々な段階には、それに応じた唄が唄われたのであって、一日を通して建築作業と唄いが同時におこなわれ、その最後が地つきだったのである。とりわけ地つきは村中の人が集まっておこなう一大イベントの様を呈し、力一杯引いた綱を離すと、大柱がドスンと地響きをたて、そこに唄の掛け合いが入り、場には笑いが絶えなかったという。

この地つき唄（木やり唄）は、三国湊と山と川、大工から木やりにいたる木工建築職人とのつながりを指摘している。近年まで身近な建物はおもに木材によってつくられていた。木を切り、削って、組み手を作り、組み上げる木匠たちは、かつて身近な存在だったのである。彼らが用いる木材は山から伐りだされ川伝いに港へ流された。河川を行き来する船と人が木匠たちと深く関係していたことはこの唄からも理解されるであろう。港はただ海路によって他の港と結ばれているだけでなく、河川によって里と山とつながっており、そのつながりの網目にはそこを行き来する人々の交通も重なりあう。

この地つき唄はまず正月を無事に迎えられたことを寿ぐ文句からはじまり、「ごろっと寝れば世があけ」で、二日の初夢の場面に転換する。ここで注目したい諸要素を拾いあげると次のようになる。

①木に関する要素 宝の山、古楠、木曾や熊野の材木

- ②職人に関する要素 武田の大工、大引小引、数ならぬ木やり、図板、水縄、石屋、捧頭、かくれ笠、かくれ蓑
- ③移動に関する要素 宝船、金銀しゃこうの帆、大八車、汽車、馬車、険しい道、大川小川
- ④地名及び場所の要素 宝の山、宝の島、三国の港、木曾や熊野、お屋敷

ここに取り出した要素から何が浮かび上がってくるだろうか。相互に関連付けてまとめると次のようになる。

- A. 宝の山と宝の島、そこで積み込んだ宝がどっさりと運ばれる屋敷。木材資源豊かな木曾、熊野。並べて自然から幸がもたらされる所だといっている。宝とは自然がもたらす幸のことなのである。これらと同列に並べられる三国の港は「宝の港」といってよいだろう。
- B. 宝の山や宝の島と、芸能者がいまここに訪れ万歳をしている屋敷との関係は、遠くはなれた夢といまここにある現実のような関係であるから、宝の山や宝の島と屋敷のちょうど中間に位置する三国の港は夢と現が同居したような場所であり、それは夢のように栄えた港を意味すると考えていいであろう。
- C. その三国港は宝の船によって宝の島とつながっており、大川小川つまり大小さまざまな河川で屋敷とつながっている。
- D. そしてこれらの交通ルートに関わるのは、様々な木々と職人たちであって、それはつまり海と川を移動する木工建築職人である。

水上交通による川、山と結ばれ、その文化によって栄えた三国港の姿が浮かびあがってこないだろうか。屋敷、亭主、世帯を寿ぐために宝の山ないし宝の島と屋敷だけでは足りず、両者の間に三国港を介在させるのは、それほどこの港と山とのつながりが看過できないからではないだろうか。少なくともこの地つき唄（木やり唄）の担い手にとってはそうであった。その担い手とは木工建築職人である。

武田（今日の竹田川か）の大工。大引小引。後者は材木を加工する匠のことで、大引は大鋸と呼ばれる二人がかりで使用する鋸によって、切り出した木を建築用の木材、主に製版へと割り出す。14-15 世紀に渡来したといわれ、従来の木材加工技術に一大革新をもたらした。小引は後に

つくられた大引より刃渡りの短い一人用の鋸をもちいる者で、大引小引ともに本来なら木工道具としての鋸のことをいうが、これを用いる人々の呼称ともなり、これらの人々は 15 世紀頃に現われたという。そして木やり。こうした人々は里に定住しない移動民である。良質の木材を求めての移動に欠かせなかったのは、河川であり船であった。切り出した木材は船によって河口へと運ばれたからである。

三国湊の河川交通について『三国町史』には次のようにある。

九頭竜川は越前と飛騨の国境、油坂峠から流れ出で、国を東西に横切って三国の海へ注いでいる。また、さらに国を南に貫いて福井市のやや西端において日野川・足羽川を合流させているから、しぜん交通の大動脈となった。それに支流の竹田川・天王川・志津川を加えると、九頭竜川を主流とするこれらの諸川は、江戸時代から明治初期にかけて国内運輸に特に大きな役割を果たした。これを三国を中心にして考えれば、ここを起点として交通機関の動脈が広がって行ったともいえるわけである（293 頁）。

今となっては高速道路も鉄道もいずれも陸路であるためその重要性は感じられないが、100 年ほど前までは水上交通は交通の要であったというのである。小引＝木挽について、第 2 章で登場いただいた漁業組合の米谷さんは、明治生まれの祖父から聞いた話として次のように語っている。

山主さんのとこ行ってお願いしますと木を切ったり出したりするのを木挽といってね、そういう人に切ってもらう。それを 1 年なら 1 年、半年なら半年寝かしてね、今度はいよいよ建築材として使ってもらう。そうすると逆に今度は木挽さんから、若い木を切った分だけ山に植えてくれという。今言うように海が荒れたら鋤もって行ったり、スコップもって行ったりして一人 10 本なり 20 本を 10 人や 15 人で植えてくる。

木挽というのは山主に食わしてもらってる。山主さんに常時雇われてはね、そういう仕事をする。木を切ったり何かは冬はやらんでね。鉄砲撃ったりしてね、熊やらカモシカやらそういう猟も兼業でやるんやしね。冬仕事ちゅうやつや。

漁師も、はっきり一言でいえば山がなかったら水がないんやで。魚が一切来んのやで。木を切ったらあかんのやぞ、切っても必ず植えろよと。

そやから山主は木挽を離さんのや。川の流ればみんな木挽が知ってる。木挽があるで山がある。山があるさかい木挽がなげないかんのやで。お互い持ちつ持たれつでこれは必ず必要なんやで。木挽さんは100本切れば必ず100本植える。そうしないと山がいかれてまう。

川の水はね、山の間を通ってね、栄養分を含んだ水が川を通って海へ流れてくる。それによって今度は光合成でプランクトンが発生して小魚が来る大魚も来ると、こうなると。それが自然環境やて。それをひとつ止めてあっちゃこっちゃ終わらしたらペアやて。今限界はそれや。農業もそれ、林業もそれ。大根じゃあるまいし今植えて今すぐってわけにいかん。そんなもん100年も経たんのに切ってしまうてどうするんや。300年も経ってるブナ切ってどうするんやて。

米谷さんによれば、木挽が山の森林を管理し保全していたのである。

日本列島の森林が何度も壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、森林を消失することなく今日にも伝えているのは、ほかでもなく人間の手による管理と保全があったからである。たとえば、最初の局面は7世紀に起こった。大陸から大規模建築の技術が導入されると空前の建築ブームが起り、木材伐採が異常に増加した。これによって畿内流域の森林は収奪され、平城京と平安京の周辺では生態系が激変した。江戸時代には人口の急速な増加に加え、城郭や寺院建設及び都市建設が一気に増加した。およそ1世紀にわたって大規模な森林伐採が行われ、山は裸になって侵食が起り、とりわけすでに危篤状態であった畿内流域には甚大なる被害もたらされた。こうした環境の損傷は治水工事や保安林業の展開を促したが、度重なる圧力がかけられたにもかかわらず、そのたびに日本列島の森林は消失することはなく現在に到るまで存続してきたのである（こうした事情についてはコンラッド・タットマン著、熊崎実訳『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書館（1998）が詳しいので参照されたい）。

つまり日本列島の森林が消失することがなかったのは、それを利用するために管理し保全する人々がいたからだったのである。今日指摘される里山の荒廃は、木材利用の減少とそれに伴って森林を管理し保全する人間もまた少なくなったからである。そして今日、山の荒廃は海のそれをもたらすとして全国のいたるところで様々な森林再生の取り組みがおこなわれている。

かつて森林の利用と再生を担った、たとえば木挽の生活と文化はなかなか伺い知ることができない。それが文字として残っていないからである。しかし木挽は山に携わるのみならず、川にも

深く関わる人々だった。山と川をつなぐのは船である。したがって山を管理し保全した人々や木工職人たちが操船にも携わっていたと考えることが出来るだろう。

コシヒカリを生んだ米処、福井は、平安時代には興福寺の荘園としてその最も重要な財政基盤をなしてきた。米の生産量を支えるのは福井平野を形成する河川である。大河九頭竜川をはじめ、足羽川、竹田川、日野川がここに注いでいる。そして海路によって物資が運び出されるのが三国湊だった。

『金津町史』には、河川の交通路と三国湊のかかわりについて次のような記述がある。

天保二年十一月（1831年）越中の儀右衛門という男が上方から馬に積んできた荷物を福井大橋から三国まで川下にし、三国の室屋金六はこれを人足で北潟へ廻し、幾右衛門の手舟で吉崎から加賀へ送ろうとした。途中で細呂木宿の馬借に見つけれ、荷物は細呂木宿に保管した。そこで川北四宿の間屋連盟で、横流しをやった福井宿の馬借と宿場外の村々で勝手に運送したものを嚴重に取り調べるよう金津奉行所へ訴えた。明治五年にもこれと同じ経路で運送したことが問題にされた。それほど宿場の定めは駄賃は高く荷物通切手の一札を用意しなければならず、実に窮屈な制度であった。事情はこのようであったから、川船に沢山詰め込んで、そのまま運んでもらえることは、実に便利であった。往来が盛んになるにつれて、川船の利用はますます多くなり、舟運は発達していった。竹田川と九頭竜川では、三国の川船が大活躍をしていた。しかし、宿場の馬借どもにしてみれば、自分たちの職が上がってしまうので、川船を目の上の敵とし、宿法を楯に上記のような抗議をしていたのである（277頁）。

金津宿内で使う薪は東部の山村から出した。御簾尾から矢地にかけて河戸があり、ここから川舟で運んだ。仏徳寺の河戸は金津三国間で唯一の渡舟場であった。東方の山村から買い取った松葉や薪・割木もここで荷上げした。三国の川舟はずっとさかのぼったのである（同頁）。

江戸時代、陸路による荷物の運送は、宿場に高い運送費を支払わなければならないため、これを避けて船運によって荷物を運んだところ見つかって奉行所へ訴えられたという話である。しかし船運の利用は絶えることなく明治まで続き、竹田川と九頭竜川の船運には三国の川船が大活躍したのである。薪や割木も続々と運ばれてきた。

『金津町史』に曰く、「全長四十六キロに達する竹田川は、広い竹田深山の溪水を集め、気違い谷といわれる急流をなしている。その上扇状地に出てからは、曲流を重ね支流を合わせているため、大雨になると、忽ちにして洪水となった」（722 頁）。もちろん河川には上流・中流・下流の区別があり、通常ならば上流から下流にかけて川幅は広くなり流れも穏やかになる。それにもなって上流では小船が移動に適し、下流に行くほど少しずつ大きな船に切り替える船運体制があったと考えられる。木材を運ぶ筏も上流では木材を筏に組まず、水量の豊富なときに伐木をばらで川下に流し、アバとかハマとか呼ばれるところでせき止め、そこで筏に組んで川下に流し、さらに川幅が広がった下流で二列に組むなどの工夫が行われていたと見られる。したがって、木材の河川しや船に関する技術的な面のほうでも、川狩・筏流し、船に働く人たちの生活伝承の面でも、上・中・下流の間では異なるところがあっただろう。

漁業や水上交通の研究で知られる民俗学者桜田勝徳氏は次のように述べている。「川船でもその上り下りに帆をあげて風力を利用することが行われ、風力を利用できずに川をさかのぼるときには、もっぱら船を陸上から綱で引き、さかのぼることが行われたから、風の観察・予知は川船に生きる人たちにとってもたいせつな知識であったと思う。風に対する知識は海を行く舟人にも最もたいせつであったことはいうまでもないが、溪谷の川を行く舟人にとっては谷風に注意が必要であり、海の航海者とは別途な風の観察の仕方がそこにあっただけである（『桜田勝徳著作集 3』名著出版, 1980）。おそらく竹田川、九頭竜川の河川で操船をしていた三国の川船操者も、このような自然を熟知した人々であつたに違いない。

船が停泊する場所を河戸というが、河戸のある村は河戸権を有し、ここを利用する村々は「渡舟施米」を支払っていたという。また船運を用いることの多かった村では船および水路維持に要する費用として「水役」を村人が負担していたともいわれる（松岡町誌編纂委員会『松岡町史』、1978. 644 頁）。水上交通が欠くべからざるものであつたことを伺わせるものである。

最後に、以上の記事が江戸時代まで遡ることができるものだとしたら、三国湊と山野の関係を今から 1000 年以上は遡ることがであろう記録を紹介したい。三国町大湊神社の由緒がそれである。同神社宮司である松村忠祀さんが安島地区広報誌「あんてな」に連載している「安島のあゆみ」を参照して考えてみたい。

大湊神社の由緒によれば、文武天皇の御代（697 年—707 年）に雄島周辺に多勢の外敵が攻めてきたため住民は白山山麓まで逃げ隠れたという。このとき大湊神社の神宝である高麗から伝わ

った「御獅子」を守って、白山の麓で隠れ住んで一時を過ごしていたが、外敵が去っても一部の雄島の人々はそこに住み着き、その場所を雄島の島の名をかたどって、島村と名づけたと「高麗伝来御獅子略縁起」に記されている。

白山山麓の島村とは現在の石川県石川郡白峰村桑島だという。ここに雄島村の人々が住居を構え、以来祭礼の時には高麗獅子を雄島の村人と白山の島村の村人が1年おきに受け渡しをしてきたのである。この獅子の受け渡しは白山麓の桑島と雄島村の中間地点となる坂井郡旧鳴鹿村の石上において行われたのである。

島村と安島との交流は、たとえば白山の朝鮮繭の情報やその時代の大陸の糸紡ぎの技法を伝承する役を担っていたのが安島の海民であり海部、海人部という集落であったことことから裏付けられる。安島から数10キロも離れた桑島と約1300年も前の時代から毎年神事を通して交流が行われたことには様々な理由が考えられるが、一つは越前、若狭、能登が大陸文化の受容によって大きな役割を果たしたからであろう。先述したように、渤海使が最も多く渡来したのが越前であり、こうした記録として残った公の交流の背後には、限らない私的交易があると想定できる。

注目すべきはこの私的交易者の一群が祀っていたのが大湊神社の祭神大毘古命オオヒコノミコトであり、大毘古命オオヒコノミコトこそ朝鮮、渤海などから越前に渡来された氏族だったと考えられるのである。したがって安島を中心とした三国湊に集まる大陸文化の情報を白山の人々が必要としたのであり、その伝達を可能にした海と山をつなぐ広域のネットワークが存在していたのである。この交流を裏付ける多くの資料は今や残っていない。江戸時代大湊神社の周辺では二度大火が生じ古い記録や資料が焼失してしまったからである。

今日では、海、里、川、山のつながりは見えなくなりそれぞれの領域で生業を営む人々は相互の関係を失って久しいのではないだろうか。しかしかつては以上に見てきたように海流や河川のような自然の流れは人々の間に密なるネットワークを張り巡らし、人々の移動に伴って豊かな情報や物品が運ばれた。三国湊はそれらが一手に集散する場所、交通の大動脈の発するところだったのである。環境問題の発端が自然とのコミュニケーションを断ち切ってしまうことにあるならば、自然からもたらされる幸を流通させ、そこに人々を交流させることでそのコミュニケーションは活発に流れ出すのではないだろうか。それはあたかも里山が人の手が入ることによって多様な生物の住処となるように。

第3章 海里山をつなぐもの—移動する人とモノ

三国を起点とする「交通運輸の大動脈」であった諸川を、繰り綿、木綿、生蠟、晒し蠟、鯉、鉄鋼、銚、黒砂糖、白砂糖、白下、焚込、蜜などの商品が川舟に乗せて運ばれたと江戸時代の記録にある（『三国町史』293頁）。

こうした商品の集散地だったのが三国湊である。この湊は日本海の交通要地であるばかりでなく、嶺北七郡の物資の集散地であった。港の繁栄は、明治になっても敦賀以上で川船の活躍は激しかったのである。『三国町史』は往来する人とモノを次のように述べている。

主な河川をあげてみることにしよう。まず九頭竜川の本流は勝山に至る 53 キロである。それから日野川は今立郡の旧舟津村まで約 32 キロ、足羽川は足羽郡の旧酒生村まで約 16 キロ、竹田川は坂井郡旧金津村まで約 12 キロ—こんな所でみな通船の便があった。

一番利用度の高いのは三国—福井間で、昼夜の別なく舟運の便があり、三国—金津間がこれについだらしい。船は川船と夜船があった。川船は近世三国湊に 30 艘前後あって盛んに利用されていた。その種類は丸役、半役、小半役という三種で、三国の川船乗りの話によると、丸役は 120~130 俵積んで福井まで、半役は 80 俵積んで白鬼女や金津まで、小半役というのは 20 俵積んで勝山までさかのぼったというのである。「坂ノ下の清水善太郎は、明治 24 年 16 歳のときから竹田川を往来したという。引き網を 60 尋も用意して、川を上るときにはこれで船を引いた。難所には引船の者を特別においた。竹田川の途中竹田から田島川に入り丸岡までいった川道八里を一日がかりで行ったという」（金津町史）。金津方面からは盛んに米・瓦などが積出された。当時「金津から三国までの運賃は、明治の終わりごろで米一俵が一錢八厘、五斗入の菜種一本が一錢三厘で長屋から金津まで米一俵が二錢であった。米七八十俵も積んでいけばかなりの収入だったという。…北陸線は開通したが一般にはまだ荷車や馬といった時代であって、少し遠方になると非常に難渋した。そこで川舟の利用は広く、当時においては実に大切な交通機関だった」と金津町史は書いている。また日野川の遡江終点であった白鬼女は、日野川流域の物資の集散地であった。丹南三郡の物資はここを経由して三国へ集ったものである。下り荷の大部分は、米・菜種・木材・薪などであったが、上り荷は鮭・塩・鉄・甘藷・茶・砂糖などであったという。足羽川のものは福井からで、明里にはかつて藩倉がありここが集散地で

あった。三国の川船は港橋付近を泊地とし、九頭竜・足羽・竹田三河川を盛んに利用した。金津の時と同様、遡江の時九頭竜・足羽の合流点に達すると水主は上陸し船を綱で引き福井まで行ったということである。また三国の川船乗りは急流に慣れていないためあまり上流には遡ることが出来なかったらしい。「明治の中頃では川船一艘つくるのに三十五円対象になってからは九十円かかったが、これで十年は使えたので十分に採算がとれた」ということである。

水上交通の活発なこと驚くばかりであるが、農産物や生活材などのモノばかりでなく人を乗せる旅客船につかわれたのが夜船—ヤカタ舟だった。

夜船というのはヤカタ船で主として三国—福井間の旅客運送に使われたものである。「上りは午後八時頃元新付近出発、翌朝八時ごろ福井の九十九橋付近着船」「くだりは福井午後九時頃発、三国へ翌朝早朝着船」。明治初め頃の船賃は一人六銭二厘五毛であった。夜船というのは、夜間航行したことから夜船と称したわけで、現在の夜行列車にでもあたるものである。これが1897年（明治30年）頃になると鉄道開通の影響で川船は五隻に減り、夜舟による旅客も減ったので船も四隻になり、しかもそのうちの二隻は予備船であった。それもやがて三国線開通とともに廃業するに到っている。川船がなくなるのは昭和の初頭で港橋付近の竹田河岸に繫留したまま自然消滅したという話である。

三国支線が開通したのが明治44年。その後貨物輸送は汽車にかわった。昭和に入って三芦電鉄がつき、その後トラックも登場して陸上の交通機関が機械化されるとともに川船は姿を消していった。清水家では昭和13年につくったのが最後で、大戦中になってやめたとのことである。昭和の初頭頃、三国の川船乗は8人だったが、廃業と同時に共同出資でトラック一台を購入し丸川自動車を経営、三国—福井間のトラック輸送に当たったがまもなく解散したと『三国町史』は伝えている。

Ⅲ. 三国湊型環境教育モデルの提案

第Ⅰ部ではナホトカ号重油流出事故を文献および聞き取り調査から理解し、第Ⅱ部も同様にして三国湊の自然と文化をみてきた。第Ⅲ部は第Ⅰ部と第Ⅱ部の調査研究をもとに三国湊型の環境教育モデルを提案する。

第Ⅰ部で重要なポイントとして挙げられた点をここで再度まとめてみたい。

1. ボランティア活動の初動において民間組織・団体の働きが有効である。
2. その活動には民間と行政のよき役割分担、パートナーシップが欠かせない。
3. そのパートナーシップをバックアップする団体・組織・ネットワークが重要である。
4. 三国町では生態系や自然環境に配慮した活動が各々行われてきた。
5. 重油流出事故は生態系や自然環境に配慮した生活、生産、教育を促している。
6. 海と山と里と川の保全には相互協力が必要である。
7. 「その人にしかできないもの」があり「誰にでも出来る方法」がある。

第1章 人海戦術が教えるもの

重油流出事故後、三国町では様々な個人、団体・組織が河口のゴミを拾い、里山に植樹をする活動がみられている。そしてそれは河川の上流あるいは山の近くに住む人と下流や河口に住む人との相互協力のもとに始められている。しかしこうした活動をより一層広め、根付かせていくにはどうしたらよいだろうか。そのために第1部の第2章、山崎さん夫婦の言葉を想起されたい。

「バケツとひしゃくで汲むでボランティアが来たんやが」。

どのような個人・団体・組織でもできるきわめてシンプルな実践、それも大掛かりな機械に頼るようなものでなく、身一つで出来るような実践。山崎さんの言葉から理解される実践が環境教育として成立すれば、それは広がりを持つものになるだろう。

同じようにJCの長谷川さんが後輩のJCメンバーの一言により重油災害に対して「JCとして出来ること」を探し、長谷川さんの一言で様々な企業が自分にしかできないもの考えたことを想起されたい。第Ⅱ部から、三国が海のみならず河川ネットワークを介して山、里からもたらされ

る幸によって栄えた湊だということがわかった。今日山野河海の幸を運ぶのは、たとえば漁業組合、森林組合、農業組合、生活協同組合である。漁協には漁協だからこぞできるもの、漁協にしかできないものがあり、同様のことは森林組合にも農業組合にも生活協同組合にもいえる。

千葉県に協同組合提携推進協議会という組織がある。この協議会は1989年に千葉県内の農協、漁協、森林組合、生活協同組合から組織され発足したもので、相互提携を図りながら食育プログラムを策定したという。農林水産を生業とする生産者を「先生」とする食育学校を開校し、それぞれの協同組合の持ち味を活かしながら、県内の一般市民を対象にして食育に取り組む。農協は「農（たはた）の学校」、漁協は「海（さかな）の学校」、森林組合が「森（みどり）の学校」をそれぞれ主催し、生協は消費者への呼びかけ等を担う。食べものを育む自然や生産についての知識、食べものの選別や料理法などを教えるのが食育である。2007年9月には「はたけの学校」が開校した。食を介した生産者のパートナーシップの形成、および環境教育の実践の好事例である。山野河海の幸が流れ込む三国湊はこの事例に学ぶところが大いにあるのではないだろうか。

第2章 循環する自然と共生の知恵

シンプルな実践と漁協、森林組合、農協、生協と提携して行う環境教育。これをここ三国で行おうとするならば、三国の意味と機能を考えなければならないだろう。三国湊の持つ機能は、一言でいうならば「集散」ということにあると思われる。海や山や里から、海産物や木材や農作物が集まり、そして散らばる。それははるか彼方の大陸や、緑深い山や、人々の賑わう里の「文化」という情報が集散することを意味する。それぞれの価値をもった異質な文化情報が集まるからこそ、そこに比較が生まれ、対比が生まれ、利益が生じる。三国湊はその意味で「市場」であり「都市」であったのである。

それぞれの価値を持ったものが集まってくる。それが別の価値を持つものと取引され交換される場所。それが「市場」である。海の情報山へ運ばれるとき価値が生じる。里の情報が海へ運ばれるとき価値が生じる。異質なものが異質なものと出会う場が「都市」である。

それでは、ナホトカ号はどんな文化情報と価値をもたらしたのだろうか。それはボランティアの力であり地域環境に対する意識の高まりであり、そして三国湊の豊かな自然への気づきであったといえるのではないだろうか。石油に依存する文明でなく循環する自然と共生する知恵をもった文明への転換が必要とされている。自然の循環を現しているのが川であった。第二部で松村忠祀さんは次のように言っていた。

まず三国の川が大事やと思います。生活廃品みたいなものが、下に流れていって日本海に溜まっているんです。網を引くとね、なんかビニールの袋があったり。漁師さんがおっしゃってる。カレイなんかおる砂地のう上にビニールのような袋がいっぱい入ってくるっていうんですよ。エビが入らんこなそういうものが入ってくるっていうね。そりゃそうでしょ、毎日毎日とまることなく流れてきとるんですから。そりゃやっぱり陸のひとが協力しないかんのです。それはやっぱり三国湊が通ってくんだから、当然そのなかの文化として考えたらいんじゃないかと。松岡だったり、永平寺であったり、武生であったり全部流れて入ってくる。だから自分の足元から気をつけていかないかんことがいっぱいあるんじゃないかと思って。重油は大きい目で三国に災害をもたらしたけども、目に見えん石油製品がとめどなく休みなく流れてきてる。それはみんなぼっとほかすからですよ。あれらも目に見えんけど減ることなく消えることなくど

んどんどん海のそこに溜まっていく。それはやがて生態系をつぶしちゃうんでしょしね。海だから大丈夫だと思ったことが問題なんで、たいしたものじゃないんで。それを市民が確実に知るのが青い地球だと思うんですよ、そんな大きいものじゃないわけだから。そのためにかぐやがあがってくんだとおもうんですよ。月から地球を見るのにとってもいい鏡みたいなものだと思うんですよ。水なんかもそう簡単に増えるものじゃないけど1ミリも増えると地球全体では大きいものです。そういうものと切っても切れん関係に重油の問題はあると思うんです。

とめどなく流れる九頭竜川は三国湊のはるか海上で蒸散し雲となり風に運ばれて陸地に達しては雨を降らせ再び川へと注ぐ。その循環のなかに水の湊三国湊がある。今日水を介した人と人とのつながりは上流で捨てられたゴミが河口に流れ着くことよって目に見えるようになり、それが自然の力によって分解される前に海の生態系には大きな影響が与えられる。三国町では河口に溜まるゴミを上流の人々に周知させる活動が、第1部第2章で登場いただいた阪本周一さんを初めとする人々の手で行われている。

第3章 森・里・海の関係構築に向けて

私たち現代人の生活に必要なエネルギーを供給するため海底から汲まなく上げられている石油。ナホトカ号重油流出事故はその当たり前の事実を私たちの前に映し出す鏡だったのかもしれない。石油への依存が引き起こす地球温暖化、海面上昇、生態系の激変、それらの問題を防止するためにどのようなことができるだろうか。今日、地球温暖化への対策として注目を集めているものの一つにカーボンオフセットがある。通常に生活していれば、二酸化炭素の排出をゼロにすることは難しい。電気を使わない生活をするのが難しいからである。そこで排出した分の二酸化炭素を吸収する樹木を育てることによって、二酸化炭素の出入りを相殺することをカーボンオフセットという。

(以下 <http://premium.nikkeibp.co.jp/em/keyword/10/index.shtml>2007-10-09 参照 2007-10-09 にアクセス)。

しかしながら自分がどれだけの二酸化炭素を排出しているか理解している人はほとんどいないだろう。そこでカーボンオフセットは自らの二酸化炭素排出量を知ることから始まる。その方法として英国の環境団体が作成した「クライメート・ケア」は日常生活の行動を二酸化炭素の排出量として産出し、相殺するのに必要な金額に換算するウェブサイトを運営している。

日常生活や経済活動の中で排出される二酸化炭素量を知ることが、人々の意識や行動の変化を促す。人間活動が地球に与える影響を中和させるという点でカーボンオフセットは有効と考えられており、個人でも企業でも取り組むことができる。

カーボンオフセットの販売を初めて手がけたのは英国のカーボンニュートラル社で 1997 年のことである。現在は約 40 の事業者や団体が米国、オーストラリア、ドイツ、カナダなどにある。カーボンオフセットを取り扱う事業者や団体は、森林吸収、再生可能エネルギー、エネルギー効率向上などに資するプロジェクトに投資する。購入者は二酸化炭素の量を金額に換算し、事業者や団体に支払うことで、二酸化炭素の排出量を相殺する。

以上がカーボンオフセットの概略である。二酸化炭素の排出量を貨幣を尺度として定量化するこの試みは、二酸化炭素という自然の流れを人間生活における貨幣の流れと重ね合わせるものである。これを環境教育モデルとして考えるなら植樹が実践モデルとなる。

そこで三国湊型環境教育モデルとして提案するのは、漁業協同組合、農業協同組合、生活協同

組合と森林組合によるカーボンオフセットのための植樹である。そして日常生活や経済行動から排出される二酸化炭素への認識に加え、「ナホトカ号」をモデルケースとして用いたテーマ別に二酸化炭素排出量の調査学習を加えたい。

三国町のある坂井市には坂井森林組合が 1988 年に発足、以来森林管理業や林産業、森林病害虫防除業、公園管理、木屑廃棄物処理業や建設業を行っている。森林の管理は提案型利用間伐を進めており、これによって、これまでの問題が解決され始めている。これまでの問題とは間伐材の受け入れ先の不在、搬出コストの問題、不十分な補助制度などであったが、行政や企業にも森林管理や間伐の必要性が理解され始め、国産材への注目が集まり、また高性能な林業機械の普及がみられている。現在坂井森林組合管内のスギ・ヒノキなどの人工林面積は樹齢 30 年のもので 400ha ある。しかし森林所有者は高齢を迎え、自分の持ち山がどこからどこまでなのか、その境界はここ数 10 年のうちに定かでなくなるだろうといわれている。それというのも山主が山に関与しなくなったからであり、木材の恩恵を受けた時代から、住宅建築で用いられる素材が変化し、燃料革命が起こり、木材を輸入するようになって、山を持っていることにかつてのような大きな価値が無くなったため、森林が放置されたからである。そこで人工林を年に数回にわたって間伐し、そのつど所有者（山主）に利益が生じさせるためには、カーボンオフセットが有効であると考えられる。

海をきれいにするために山に木を植えるという運動は全国各地で行われているが、第 2 部の田中千賀子さんが報告しているようにそれはここ三国町でも行われている。こうした活動が広がりをもって定着し、持続可能なものとなるためには高い専門性をもった森林組合とのパートナーシップを形成することが必要となってくるが、同時に環境保全に関心をもって活動している地域住民やボランティアの参加がなければ根づいたものとならないだろう。相互の協力のもとでこれからも三国が青々とした海に洗われる湊であるために植樹を実践モデルとした環境教育を提案し実践していきたい。